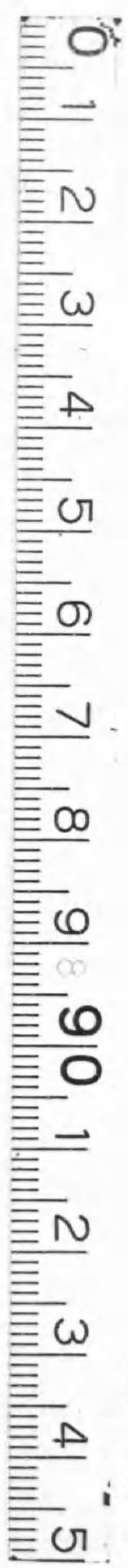


444
247



始



特219
846



歴史は動く

邦本完二



風文おぼへ

おぼへ

目次

旅の山々
壬生青嵐
祇園囃子
白梅紅梅
春暮るる
大政奉還

一 巻
二 巻
三 巻
四 巻

歴史は動く

旅の山々

一

へ心細いよ木曾路の旅は

笠に木の葉が散りかゝる、

木の葉が降る秋から吹雪に埋れる冬を過ぎて、文久三年癸亥の春を迎へた木曾路には、まだ残りの雪が深かつた。が、この年の如月は、近年稀れな好晴つゞきだといはれるだけに、空は毎日木曾川の流れよりも碧く冴えてゐた。

その晴れた一日、宮ノ越から福島への木曾川沿ひの街道を、夥しい武士の群が秩序もなく、三々五々と通りかゝつてゐた。何を指して何處へ行くのか知る由もなかつたが、支離滅裂な隊列と雑然たる風態によつて、それが浪人者の集團であることだけは頷かれた。様々な種類の旅人を見馴れた街道筋の人達の眼にも、餘程奇異に映つたのであらう。行き遇ふ人

々はいづれも立停つて見送り、遅しい木曾駒を曳いた馬子は、馬を片寄せて怪訝さうな眼を瞞つた。

一群の年齢は二十歳前後から四十歳前後までの、屈強な活動さかりの者ばかりであつた。手甲脚絆に草鞋を履き、刀に褌袋をかけた如何にも嚴重な旅持らへの者があるかと思へば、町内のせざる歩きやうに、長い羽織の紐を頸筋にかけ、鐵扇を振りながら、朴齒で悠々と歩いてゐる者もある始末。義経袴もあれば野袴もあり、仙臺平もあれば小倉袴もあるといつた雑多振りであつた。

前後から聲を掛け合つて賑やかに談笑して行くひとかたまり。肩を寄せ合つて睦じさうに話し込む二人づれ。悲憤慷慨の口調で時局を痛論する者。黙々と獨りで歩く者。ちぎり取つた竹を振り廻しながら朗々と詩を吟じて行く者。或は今しがた通つて來た宮ノ越の、義仲の城址や旗揚八幡を語る者等、土地の者に奇異な感を抱かしめるに充分な一行であつた。

それにしても何の必要から、この夥しい浪人が集團をなして旅を續けてゐるのであらう。中仙道を西へ、多分江戸から京上りをする一行であるらしいことだけは、まだ見ぬ皇城の地に憧憬を馳せて、あれこれと頻りに京の噂を交はしてゐるのを見てもそれと頷かれたが、その他は一向に見當がつかかなかつた。

木曾街道は谷道のことゝて、行けども行けども左右から急峻が迫り、山また山はいつ盡きるとも

知れず、雪を溶かして流れる木曾川の急湍が、涼々たる潤音を響かせてゐるばかり。道のうねりにつれて風景は次々と展けて行きはするものゝ、それも所詮は谷道の單調な變化に過ぎなかつた。たゞ左方の重疊たる山の嶺越しに、白銀色に輝いて鋭く大空を衝いてゐる駒ヶ嶽の偉容だけは、幾度仰ぎ見ても益々ぬ魅惑を感じしめた。

やがて、一行から遙かに先立つてゐた先頭の二人の武士は、關所にかゝつた。もはや福島宿への入口も間近く、そこからは遙かに低い谷合に埋れてゐる福島の町が隠見された。

「將軍家御上洛の警護のため、この度新規に徵募せられた、新徵浪士隊總員二百三十四名、元御目付鶴殿甚左衛門、並に御旗本山岡鐵太郎殿御扱ひにて、京師へ罷り通ります。」

先頭の二人の武士は、關所役人に向つてかう叫んだ。

「御苦勞に存じます」と役人が挨拶を返した。

二人は振り返つたが、まだ一行の姿が見えないところから、關所の低い石垣に腰をおろした。

先頭の武士は、一行の隊名を新徵浪士隊といつたが、實はそれは取締に當つてゐる幹部連が、口にするための便宜な假稱であつて、隊士達は誰一人自分達の假稱を知つてゐる者はなかつた。が、この度、寛永の家光以來、はじめて上洛入朝する將軍家茂の警衛に任ずるのが、彼等の役目である

ことだけは事實であつた。しかしその内容に至つては、徵募した當の幕府自體が、まるきり彼等に望みをかけてゐないのと同様、彼等もまた隊列に秩序さへも保てない事實が示す通りの、亂脈極まる連中であつた。

總員は七隊に分けられ、一隊は伍長三名、隊士約二十七名から成り、その他に統率者たる取締二名、それに附屬する取締附の幹部伍長三名、そしてその輩下隊士若干名といふ編成であつたが、隊伍は殆んど守られてゐなかつた。

彼等は應募の際、盡忠報國を誓つて來てゐた。が、幕府側の徵募の主旨は、あまり明確なものではなかつた。それを反映した浪士隊の目的も、極めて漠然としてゐて、盡忠報國を、朝旨を奉じて上洛する將軍を通じての、朝廷への御奉公だと考へてゐる者もあれば、幕府への獻身の意味に取つてゐる者もあり、また誓言などはほんの形式で、食にありつくことが主眼だつた者、幕府の費用で憧景の京攝の地を踏まうとする者、更に前非を悔ひて盡忠報國を誓へば、既往の罪科が赦免になるといふ特典によつて、昨日まで囹圄の裡にあつた者なども加はつてゐるといふ有様。

従つて他人同士の寄合であることは勿論、互に肚や身分の探り合ひで、馴染むよりも反目の率の方が多く、融和するよりも嫉視する方が強いのは自然の勢ひであつた。年長者に對する禮讓もなけ

れば、伍長も平隊士もない。互に相手を屈服させて、おのれの勢力を伸ばさうと機会を狙つてゐる、謂はゞ雷雲のやうな剣呑な一團であつて、たゞ僅かに朋友づれで應募した者だけが、途々親しげに談笑を交へてゐるに過ぎなかつた。

「おい、こゝらでひとつ打ッ放さうぢやないか。」

一行の後ろ寄りに歩いてゐた六番隊中の一人が、突然周囲の隊士を顧みて誘つた。三十歳くらゐの色の浅黒い面擦れの目立つ武士で、程なく關所にかゝると知つて、急に氣づいたふうであつた。すると同じ隊中の五人の武士が、何か言外の意を汲んだやうに頷いて、一様に行を共にした。熊笹の密生した勾配に向つて、六人は横一列に列んだ。袴は小倉だが、揃つて脚絆に草鞋履きの身軽ないでたちであつた。

「二六番隊の伍長金子正言、西恭助、村上俊五郎の三人のうち、金子と西は見向きもせずすんすん行つてしまつたが、村上だけが足を停めて、背後から六人の姿を不快さうにじろじろと眺めた。——村上は阿波徳島の生れで、大工あがりだといはれてゐたが、山岡鐵太郎に剣を學んで、鐵舟門下では四天王の一人であり、一時信州松代の佐久間象山に師事したこともある男であつた。「ふん、放尿まで揃つてせんでもよからう。」

吐き出すやうにいつた村上の言葉には、明らかに面あての敵意が含まれてゐた。すると面擦れのある例の平隊士は、用を足しながら顔を斜めに振り向けた。

「出るものは仕方があるまい。」

村上は睨んだまゝ暫く言葉を返さなかつた。が、やがて思ひきり輕蔑をこめて、ちろツと舌打ちをすると、汚物をさけるやうに鐵扇を翳しながら行つてしまつた。無言で行つたのは自分を優位において、輕蔑の効果を強めるためだつたのであらう。

六人は用を済ましたが、立ちほだかつたまま動かなかつた。

「山南さん、殺るつもりか。」

面擦れ隊士に隣つて並んでゐた長身瘦軀の、病的に顔の美しい青年武士が、囁くやうに訊ねた。「殺るよ。忍耐にも限度があるからな。」

背後をぞろぞろ他の隊士達が行くので、聲は低かつたが、調子は斷乎たるものであつた。「京まで待てぬか。」

「斷じて待てぬ。」

「われわれは留めぬが、一應近藤さんの耳へ、入れておいた方がよくなるか。」

山南と呼ばれた面擦れ隊士は、その言葉を容れて頷いた。

六番隊は通過して、七番隊が通つてゐた。六人は無言で歩調をゆるめて、七番隊をやり過ぎた。

殿は幹部隊であつた。取締の鶴殿甚左衛門と山岡鐵太郎が、不審さうに六人を見たが、そのまゝ

行き過ぎた。續いて取締附の伍長芹澤鴨、齊藤熊三郎、池田徳太郎が通つた。それから幹部附の平

隊士二十三名が續いた。その一群の中に、池田徳太郎配下の近藤勇が混つてゐた。

近藤は六人を見ると、骨張つた浅黒い顔に微笑を浮べて寄つて來た。眉の迫つた眼の鋭い精神な

顔だが、一文字に引かれた大きな口の両方に深い唇が刻まれて、苦み走つた容貌に親愛の情が滴つ

て見えた。

「どうした、諸君。」

六人は黙つてにやりと笑つた。それが他聞を憚るためだと察した近藤は、同じやうに黙つて笑ひ

返すと、六人と一緒に歩調を緩め始めた。殿隊は行つてしまつて彼等だけになつた。待兼ねてゐ

た山南敬助は、近藤を見て刀の柄頭を叩いた。

「近藤さん、愈々やります。」

近藤は鷹揚な微笑のまゝ、反問するやうに山南の顔色を窺つた。

「我慢がなりません。關所へかゝるまでに叩ッ斬つてしまひます。」

微笑が緊張に變つたが、なほも近藤は黙つてゐた。

「御迷惑はかけますまい。こゝまで一緒に來て、今更別行動を取るのには残念ですが、叩ッ斬つた上、

落ちるなり、取締に具陳して處分を受けるなり、いづれともお指圖に従ひます。」

かういふ間にも憤りが衝き上げて來ると見えて、山南は相談の餘裕もない程、感情を切迫させ

てゐた。

「諸君も同意か」と、近藤は山南には答へず、咎めるやうに他の五人に訊ねながら、美男で小柄の

貴公子風の武士に眼を留めた。

「土方、あんたが傍にゐては困るではないか。」

「なに、いざといふ場合には、留めるつもりでゐましたよ。氣の立つた山南さんを、なまじ理窟で

抑へるのは、却つて煽動するやうなものですからな。」

土方歳三は、意氣込んだ山南を拍子抜けさせるくらゐ、才氣走つた澄んだ笑ひ聲を立てた。

「山南君、京まで我慢して、着いてから相談しようぢやないか」と、近藤は初めて山南に宥める調

子を向けた。

「……」

山南はまだ不穏な顔で黙つてゐた。

「こゝであんたを失ふくらゐなら、江戸を出るまでに、一同この隊とは袂を分つたのだ。出發から我慢して來たのぢやないか。どこまで我慢が出来るか、我れわれの忍耐を計つて見るのも一興だ。我慢して行かう。」

「しかし。……」

「解つてるよ」と、近藤は山南の不服を強く遮つて、「僕のしてきた我慢は、あんたが村上俊五郎の伍長面を、腹に据ゑかねるところのものではなかつた。こゝであんたに村上を斬らせるくらゐなら、僕こそ本庄宿で、鯉口を切つてをつたはずだ。——とにかく京まではお互に我慢しよう。」

「よし、諦めた。」
棄鉢ではあつたが、山南は思切りよくきつぱりといつた。そして振り返りもせず、急いで一行の後を追つて行つた。

近藤は残つた五人と、眼で笑ひを交はした。五人は頷くやうな一禮を残すと、山南の跡を追つて行つた。

近藤はまだ微笑んだまゝで一同を見送つてから、ゆつくり歩きはじめたが、ふといつの間に後方へ來てゐたのか、街道脇に獨り山岡鐵太郎の佇んでゐるのに氣付いた。近藤は山岡の微笑に應へて足を速めた。

「近藤君、道中間違ひなどありませんまいな。」

すでに山岡は、山南等の不穩な氣配を察してゐたのであつた。

「御安心下さい。」

近藤は自信に満ちた微笑を見せて、言葉少なに答へた。

山岡は大きく頷いた。そして二人は肩を並べて歩き出した。

二

山南敬助に殺意を放棄させた近藤の我慢といふのは、浪士隊が江戸を發つて泊りを重ね、愈々武州最後の本庄宿に着いた時に始まつてゐた。

取締附の池田徳太郎が、宿舎割の役に當つてゐたので、その配下の一人である近藤は、撰ばれて

手傳役を命ぜられた。

近藤に取つては迷惑な役であつたが、しかも彼は苦笑を洩らしながら、池田の命の通りに走り廻つてゐた。宿舎の割宛が終つたところへ本隊が着いて、それぞれ割宛られた宿舎へ落着いたのを見極めた池田と近藤は、まづ良しと安堵の胸を撫でながら、自分達の宿舎を指して歩みを速めた。すると唯一人街道の真中に突立つたまゝ、邊りを見廻してゐる男が眼に映つた。見れば隊中屈指の巨漢として知られた取締附の伍長芹澤鴨であつた。芹澤はぎよろりと光る眼で、切りに自分の宿舎の貼紙を探してゐるらしかつた。

池田と近藤ははつとした。うつかり芹澤の宿を取り忘れてゐたことに、當の芹澤を見てはじめて気がついたのであつた。

「とんだ失念をしたな、近藤君」と池田は心底から困つた顔をした。まつたく気がつくまでは、夢にも思はない失念であつた。

「なア近藤君、濟まんが、君の過失といふことにして、ちよつと猶豫を頼んでくれんか。なアに、うはべだけ頭を下げておけばよいのだ。同じ取締附の僕が挨拶をしたのでは、芹澤のことだから、變にこぢれて出んとも限らん。奴がひねくると、事が面倒だからな。濟まんがひとつ悪者になつてくれ。」

近藤は少しむツとした。しかし池田は、信任する者への親しさで頼んでゐるのでもあるし、一半の責任は自分にもあるのだと思ふと、近藤は無下に斷るわけにも行かなかつた。

途々近藤が聞いた噂によると、芹澤は本名を木村總次といつて、常陸芹澤村の郷士の出であり、神道無念流の、戸ヶ崎熊太郎の道場で師範役を勤めた腕であるばかりでなく、水戸天狗黨の一人として、狂暴無頼の劍客であることは、關東一圓に聞えてゐた。愛用する三百匁の鐵扇には「盡忠報國之士芹澤鴨」の文字を刻み、その鐵扇で鹿島神官拜殿の太鼓の皮を叩き破つたことなども有名になつてゐた。が、暴慢の悪事のみが過去の經歷を綴つてゐて、一向に盡忠報國の士らしい逸事は傳はつてゐなかつた。

「芹澤先生。」

池田に頼まれた近藤は、傍らへ近寄ると、特に芹澤を先生と呼んだ。

「甚だ申譯のないことをいたしました。どうした手違ひからか、先生のお宿を取り忘れましたが、たゞ今直ぐに取決めてまゐります。何卒暫く御猶豫をお願いいたします。」

既に蒼蒼と暮れて來た宿場の夕闇の中に、宿舎々々の提燈の灯がまばたきそめてゐた。一日の旅

にぎらぎら脂肪を浮べた芹澤の顔は、妻みのある大きな眼と厚い唇とが裂けるやうに張切つて、動物的に不気味な感じを見せてゐた。

「宿舎割は誰がやつてをる。」

肚の底に疝癪がびりびり顫へてゐるやうな聲でかういつた芹澤は、傍らに佇つてゐる池田の顔をじろりと見た。近藤は慇懃に頭を下けた。

「池田さんがやつて居られます。しかし先生のお宿のことは、まったく僕の責任でした。不覚は重々お詫び申します。」

「君の責任か。」

知的なものがまるで感じられない大きな動物的な眼で、真正面から近藤を睨んでゐる様子には、急迫した危険が孕まれてゐた。巨體の變化は、忽ち居合の抜打を呼ぶかも知れない氣配であつた。近藤も危険に備へるのか、ちりちり足をにちらせてゐた。池田は耐りかねて言葉を添へた。

「芹澤さん、御容赦下さい。まったく我れわれ當番の不覺でした。」
すると芹澤は急に肩を落して緊張を解いた。

「よろしい。宿が無ければ焚火でもして暖をとらう。御心配には及ばんよ。」

さういつて芹澤はワツはツはと空に響くやうな大聲で笑つた。

六番隊中の近藤一黨は宿舎前の軒に立つたまゝ、先刻から固唾を呑んで、一刀の鯉口を切つてゐた。山南敬助も殺氣を含んで、成行を凝視してゐた一人であつた。

池田と近藤は直ちに走り去つて、適當な宿舎を取決めて引返した。が、この時既に芹澤は、宿場を買いてゐる街道の真中へ樹木や枝切を山と積んで、大きな焚火を始めてゐた。しかも配下の隊士は、藁、柴、薪、木材などを更に手當り次第に搬んで來ては、どんどん投げ込んだ。火は轟々と音を立て、火事のやうに燃え上つた。

幸ひ風の弱い宵だつたが、火焰は屋根よりも高く立昇つて夜空を染め、宿場中が火の粉の雨を浴びる有様となつて、屋根といふ屋根には、悉く水桶を提げた人々が火事に備へてゐる騒ぎであつた。女子供が泣き叫んで、本庄宿の大焚火はまさに地獄繪を現出した。

見かねた山岡鐵太郎の仲裁で、どうやら事なきを得たものゝ、山南はじめ近藤の一黨は、芹澤を討果して隊を脱すると息巻いた。

「諸君の手を煩はすくらゐなら、あの時既に僕が斬つてをる。蟲を殺して頭を下けた以上は、それ無駄にはせんつもりだ。當の僕が我慢するのだ。まアおさまつてくれたまへ。」

近藤は例の親愛の滴る鬚を見せて、一同を宥めた。

山岡鐵太郎が、こいつ唯者ではないと、秘かに近藤に眼をつけたのはこの時からであつた。

途中山南敬助と村上俊五郎との唾み合ひは、爆發せずには濟まないとところまで嵩じて來たが、本庄宿の例を引いて近藤に嗜められては、さすがに山南も手出しがならなかつた。

三

近藤にさうまで忍耐しなければならぬ理由は何もなかつた。が、忍耐を怠る意志は、鍛へた鐵の如くに固められてゐた。それは幕府の名を以てせられた浪士徴募に、一黨を引連れて應じようと思つて決した時以來であつた。

文久二年の暮、幕府講武所の劍術教授方松平上總介忠敏の獻策によつて、浪士募集が公表されると、近藤は牛込二合半坂の松平邸を訪ねて、徴募の主旨を質した。

幕閣が松平上總介の獻策を容れた眞意は、實は攘夷の名のもとに頻々と行はれる、不逞浪士の外人斬殺事件に手を焼いてゐた矢先として、不逞浪士を一括して幕府の統率下に置き、暴發を未然に取

締らうといふ苦肉の策で、謂はば不逞の徒の監視にあつた。そのため、勤皇も佐幕も、攘夷も開國も、すべてを包含するに都合のよい、極めて曖昧な盡忠報國といふ、變通自在の看板を掲げたのであつた。

松平上總は近藤の質問に對して、如才なく親切な返答をした。が、それは飽くまで答辯に終始して、進んで自己の意見らしいものを開陳しようとしなければ、幕府の立場を説明しようとしなかつた。それでも近藤は、幕府に忠勤をいたすことは、間接に朝廷への御奉公であり、攘夷の勸説を拜した幕府が、やがて人數を必要とする日のために、備へてゐるのだといふ結論を得た。これは廉直で單純な近藤には容易に肯けた。

(朝命によつて幕府が攘夷を實行するとなれば、國內戦だけに備へるための、舊來の旗本八萬騎だけに、意を安んじてゐられないのは當然であらう。この際徴募に應じておくことは、あはよくば將來旗本に列することも不可能ではあるまい。——)

近藤はさう考へると、一代の運が拓けて來たやうな氣がした。彼は欣躍して、牛込二十騎町の自分の道場試衛館へ戻つた。

「諸君、僕は試衛館を疊む決心をした。僕と行動を共にしてくれるか、お別れするか、今夜はその

ことについて御相談したい。」

浪士募集の件について、松平邸を訪ねた近藤の歸りを待たびながら、奥座敷に集つてゐた一同は、這入つて来た近藤に、いきなりかういはれて呆氣に取られた。

試衛館は勇昌宣が當主にはなつてゐたが、實は隠居してゐる養父の周助邦武以來の道場であつた。勇は武州調布町上石原の農宮川久次郎の三男で、宮川の持道場へ出稽古に來てゐた周助邦武にその太刀筋を見込まれ、十七歳の時養子に迎へられて、天然理心流の試衛館を繼いだ身の上であつた。その勇が抜打的に、獨斷で試衛館の閉鎖を口にしたのであるから、一同が驚いたのも無理ではない。集つてゐた土方歳三、沖田總司、井上源三郎、藤堂平助、山南敬助、永倉新八、原田左之助の七人は、一齊に眼を腫つた。

このうち近藤取立の門人は土方、沖田、井上の三人で、土方は矢張り武州多摩日野在石田の出身、身分も同じ農家の四男であつたから、特に近藤とは親しかつた。

多摩地方の農家の青年の間には、武術の錬磨に心を寄せる者が多く、近藤の生家と同じく至る所に持道場があつて、江戸から出稽古専門の師を求めては稽古に熱中してゐた。

土方は家傳の首接打身の妙薬「石田散薬」を行商しながらも、竹刀を手放した事がなかつたと

いふくらの男で、養父の周助邦武に代つた近藤が、多摩地方への出稽古中意氣相投じて、試衛館へ伴はれて來たのであつた。

沖田總司は奥州白河の脱藩者で、試衛館に這入ると僅か一年で免許皆傳になり、師範代を勤める試衛館の塾頭に取立てられてゐた。まだ年は漸く十九歳であつたが、肺が悪く、しかも劍技の鋭さは病天才だといはれてゐた。

井上源三郎は府内の浪人で、土方と同じく試衛館の目録者であつた。

二十四歳の藤堂平助と、二十九歳の山南敬助とは、共に千葉周作の玄武館で北辰一刀流を學んだ。藤堂は伊勢津藩主藤堂和泉守の落胤と稱され、玄武館の目録者であり、山南は仙臺の脱藩者で、玄武館では免許の腕前であつたが、近藤との立合に竹刀を弾き落されて以來、心服して試衛館の客員となつてゐた。

その他松前の脱藩者永倉新八は、神道無念流の岡田十松から免許皆傳を授けられて、龍尾の劍と稱される恐るべき劍技を有してゐたし、伊豫松山の脱藩者原田左之助は、大阪に於て種田寶藏院流の名手谷三十郎に槍を學んで、矢張り免許の腕であつた。關西人で特技が槍である點は、試衛館寄食仲間中の異才とされてゐた。

いづれも一道場の主となれば、立派に剣で生計を立て、行ける域には達してゐたが、鬱勃たる野望が邪魔になつて、小道場の主で生涯を終へる氣はなかつた。風雲を孕んだ時勢に彼等は一様に煽られてゐた。

無目的な野望は、この時代の青年層を支配した風潮であつた。的もなく脱藩することが流行つたのも、野望の現れのひとつだつた。江戸へ、京へ。——そこには何か大きな希望が、彼等を待受けてゐるやうな錯誤を抱かせた。

(大志と剣に物を言はせる機會がある。——)

確信を持つて行動する者の他は、誰も彼もが漠然とさう信じてゐた。

剣道好きの一農家の伴で、市井の小道場の主に過ぎなかつた近藤には、學問の素養はなかつた。従つて國體の大本を究める識見もなければ、國際關係を案じて見る手掛りもない。たゞ當時世間一般の常識であつた程度に、勤皇、佐幕、開國、攘夷といふことを理解してゐたのに過ぎなかつた。

その近藤に心服し、師弟の契を結び、刎頸の交りを持つてゐる七人が、近藤以上、人物であるはずはなかつた。近藤の持つてゐる異様な底力と膽力が、今に何かやり出すであらうといふ期待と信頼とを一同に抱かせて、市井の一小道場たる試衛館は、たゞ鬱勃たる野望の溜り場となつてゐた観

があつた。

内容はなかつた。が、強いて風潮的な主義主潮に於て彼等を見るならば、さしづめ攘夷派といふことになるかも知れない。しかしそれとても民族的な信念や、歐米の侵略を思ふ憂國の至情から來たものでは勿論なかつた。要するに彼等は理窟なしに異人が嫌ひなのであつた。見上げるばかりの大兵である上に、白癩のやうな皮膚の色と、青や茶色の眼を見ると、肌が粟立つやうに不氣味で、ゆるもなく反感を唆られた。——あんな奇怪な人種と親交を結んだり、日本の地を踏み荒されたりしてたまるものか。毛唐攘ふべしと、近藤をはじめ一同の本能的な嫌惡が、時流の攘夷といふ言葉と都合よく結びついたのであつた。

それでも彼等の厭異人觀は、幕府の浪士新徴の趣旨と合致した上に、ゆくゆくは幕臣として旗本に列せられる様子だと、近藤から聞かされると、「さううまい工合に行くかなア」と山南が一應の疑念を口にただけで、一同は一も二もなく應募を承知した。

近藤は事前に一黨を擧げて参加することを、松平上總に申込んで來てゐた。それでその夜は愈々試衛館一黨の鵬翼を延べる時節が到來したと、一同は酒宴を張つて前途を祝つた。

「いづれ採否決定の試合があらうから、その時には日頃の腕を示して、試衛館一黨のために氣を吐

いてくれたまへ」と、席上近藤は上機嫌でいひ、「まづ最初は百石かな。……でもよからう。慶長、元和の、もつと大きいやつが来るんだから、功名如何によつては、千石二千石も大して困難ではない。何よりも自信を持つことだな」といつて氣勢を挙げた。

一同は既に天下を取つたやうな氣持になつて、三更に至るまで盃を交して噪いだか、わけても近藤、土方の内心の欣快は想像の他であつた。——旗本といへば、三河以來三百年近い連綿たる麾下の家柄か、大名の子弟でもなければ買へない株であるにも拘らず、一農家の俸の頭に輝かうとしてゐるのだ。夢にも見られなかつた事實が、今や白晝の現實となつて來たのだ。さればこそ、近藤は道場を疊み、妻のつねと娘の瓊子を、郷里に残さうとまでの決意を固めたのであつた。

四

明けて文久三年二月四日、小石川傳通院に於て新徴浪士の初顔合せが行はれた。集つた人数は二百五十人を越えてゐたが、當日、當面の責任者たる松平上總介の姿は見えず、目付で老人の鶴殿甚左衛門だけが、浪士取扱に任命されたといつて、申譯のやうに顔を出してゐたに過ぎなかつた。

試衛館一黨は期待が大きかつただけに、何となく騙されたやうな白けた氣持になつて控へてゐた。後で判つたことだが、松平上總の獻策に對して、閣老板倉勝靜は、粒選りの大所を五十名くらゐと見積つてゐた。それゆゑ支度金も一人あたり五十兩として、二千五百兩の豫算が組まれたのであつたが、さて蓋を開けて見ると五倍の人数である上に、期待したやうな有能の士は極めて乏しく、芹澤鴨を以て代表されるやうな、無頼不逞の徒が大部分の顔觸れと判つた。板倉勝靜が呆れ返つたばかりでなく、當の松平上總自身啞然たらざるを得なかつた。

しかも一旦幕府の名で公表したものを、今更取消しては、威信に關するものは勿論、浮浪浪士騷擾の口實を興へることにならぬとも限らなかつた。さりとて財政難の幕府に、この熊手で掻き寄せたやうな浮浪の徒に向つて、更に數倍の豫算を捻出する餘裕のあるべき筈はない。前後策に窮した松平上總は、賢明にも引責辭職といふ理由で、浪人奉行の名を返上してしまつた。

貧乏籤を引いたのは鶴殿甚左衛門であつた。同じく取締に任せられた山岡鐵太郎、松岡萬、窪田治部右衛門などといふ旗本連中は、當日逃げて姿も見せず、名目だけ上役の鶴殿老人に、責任を押しつけてしまつたのであつた。

近藤勇の一黨は、集つた連中を見渡して失望した。その上、期待した採否決定の手合せなども、

やりさうな様子がない。これは大分様子が違ふと思つてゐるうちに、鶴殿の挨拶が始まり、手當不足に就て氣の抜けた辯解が行はれた。

「諸君は盡忠報國の名の下に、お集りになつた正義の士であり、清廉潔白な方々ばかりであると信じてをります。手當の多寡によつて、志を變へられるが如きことは萬あるまいとは存するが、しかし萬一不平を抱かれたり、事情が困るといふ向きがあるとすれば、相方のためであるから、御慮なく隨意にお引取りになつて頂きたい。」

如何にも熱意のない、役目だけの言葉であつた。

旗本、幕臣の好餌に釣られて來た浪士達は、見事に背負投けを喰つたのであるから、當然失望と不平の囁きが起つた。が、不思議なことには、席を蹴つて立去らうとする者は一人もなかつた。幕府の不信を足踏にする程の、氣概の士がゐるなかつたのにも因らうが、また近藤の場合の如く、それぞれ多少に拘らず、應募のために拂つた犠牲と決意を顧みると、このまゝでは歸つて行く面目が立たなかつたのであらう。

やがて各自の不平は、吹き募る風のやうに驟々たる非難となつて、座中に渦巻き始めた。

するとこの潮騒のやうな喧騒の中に、突然ひよつこり立上つて、満座の注意を集めた男があつた。

紋付羽織に袴をつけて、如何にも端然たる姿をしてゐたが、二百五十人の視線を一齊に浴びたその男は、苦味走つた長い顔に、ぎよろりと光る思慮深い感じの窪んだ眼で、ひと渡り座中を見廻はしてから口を開いた。

「退席なさる方もないやうですから、大體御異存はないものと認めます。」

よく響く落着いた聲であつた。そして懐中から取出した書附を披くと、かぶせるやうに言葉を繼いだ。

「では、唯今から隊の編成を發表いたします。」

呆氣にとられて、一座は静まり返つた。いや、それよりも隊の正體を知るために、靜まらざるを得なかつた。隊の分割から隊士の所屬、役員に至るまで、その男は明瞭に讀上げると、今度は一座を見廻して、一段と聲を張り上げた。

「唯今發表通りの編成に従つて、本隊は中仙道を京に上り、洛中に於てこの度御上洛の、將軍家御警衛の任に就きます。出發は來る八日の辰の下一刻、集合は本院、それまでに遲滞なく御參集願ひます。尙、支度金は玄關口に於てお渡しいたしますから、お歸りにお受取りになつて頂き度い。——では、本日はこれを以て散會いたします。」

これだけの事を、極めて事務的にてきぱき言つてのけると、その男は長い刀を提げて、颯と襖の彼方へ消えてしまった。

一同がはつと我れに還つた時には、既に鶴殿老人の姿も見えず、浪士達は狐につままれた思ひで、互に入々を見廻すばかりであつた。もつと儀式張つた事を期待してゐた人々は、何だこれで決つたのかと呆氣に取られたが、決つたには相違なかつた。それぞれ自分達の所屬は聞いたし、芹澤鴨の取締附をはじめ、伍長に擧げられた根岸友山、大館謙三郎、新見錦、石坂周造など、多少人に知られた者は、優遇されて役附になつてゐた。

「今のは出羽の清河だ。」

「清河正明先生だ。」

やがてかういふ騒ぎが、あつちこつちに起つた。出羽庄内の清河八郎といへば、郷士の出ではあるが、劍は千葉周作の玄武館の逸材であり、儒者としては安積良齊の塾に學んで、相當の貫録を示す數種の著作もあつて、幕閣にも聞えてゐる程の人物であつた。

「諸君、僕の不覺だつた。改めてお詫びする。」

最低百石の夢は脆くも破れ、掻き集めた人夫のやうに扱はれて、黙々と牛込二十騎町の道場へ歸

つて來た近藤は、かういつて苦笑した。

「今度の募集は、清河八郎が黒幕のやうですな。策士だとは聞いてゐたが……」と、山南も同じ苦笑を浮べた。

「甲州から來てゐた連中が、清河一派の石坂周造と、池田徳太郎に勧誘されたと話してゐましたよ。なかなか巧いことを言つたらしいが、これで見ると松平上總は道具で、實際は清河の仕事らしい。」

かう口を挿んだのは永倉新八であつた。

「無論さうだ。石坂も池田も最近まで牢にゐた男だ。清河も一昨年日本橋で人を斬つて、表向きの體ではないと、僕は玄武館で聞いたことがある。それがのこく出て來たのだから、今度の募集で自分や同志を救つたのだ。既往の儀は出格の譯を以て、御免しの儀云々は笑はせるな。正に策士の策、圖にあつたわけだ。我れわれこそいゝ面の皮だよ。」

山南は馬鹿々々しくて、腹も立てぬといはぬばかりの苦笑を繰返した。

かうして一同の苦笑裡に、この應募事件もひとまづ放棄に決つたかのやうに思はれた。が、間の抜けた時分になつて、急に一同を見廻した近藤が、大真面目に「で、どうする」といひ出した。

「どうもかうもないでせう。」と山南が投げ出すやうに笑つた。「歸りがけに一人づゝ金を渡すもん

だから、つい受取つてしまつたが、こいつは極めて鶉殿老に叩き返してやりませう。」
が、近藤は益々眞剣になつてゐた。

「ところが僕はさうは思はんのだ。清河の策にしろ誰の策にしろ、當面の責任は幕府にある。取扱は幕府の役人がするんだ。誰に利用されても構はん。諸君の協力さへあれば、僕は最初の夢を實現して見せる。それには僕一人では覺束ない。諸君が堅く一體になつて、協力してくれなくちややれんことだ。」

「それア利用もさせてやりませうが、何しろ集つた連中があれでは。……」

「そこだ。周囲が不逞無頼の連中であればあるだけ、我れわれが至誠を盡せば、當路の役人の眼に立つわけだ。玉石混淆の烏合の衆だから、これはきつと、何度にも節かかけられるに相違ない。我れわれは至誠を盡して、最後まで踏み止まるんだ。いかに國事多端の折でも、名もない市井の一劍客が、長い傳統と由緒ある家門の旗本に、一躍比肩出来ると考へたところに、僕の不覺があつた。しかし幸にして、泰平の世には想像もされなかつた道だけは、拓かれたわけだ。誠實と忍耐と腕があれば必ず認められる。それを認めさせる道が展かれたといふだけでも、破天荒なことだといはなくちやなるまい。これが時勢だらう。諸君はこの機會を棄て、生涯を試衛館に埋れるか、進ん

で最初の夢を實現するか、今こそ生涯の問題を、決定しなければならぬ岐路に臨んでゐるんだ。腹藏のない、諸君の意見を聞かせてもらひたい。」

近藤はめづらしく熱情的な興奮を見せてゐた。山南はひと度笑ひ棄てた機會が、思ひがけなく意味を深めて來たやうな氣がして、口を噤んだ。一同も眞剣になつて、生涯に二度とない機會を凝視する氣になつた。

「千石の旗本の家には、千石の槍があつたのだ。我れわれが百石を欲するなら、百石の功を盡さなければならぬ。しかしこの試衛館の板土間で、千石の槍を使つて見たところで、百石はおるか、十石の祿を仕留めることも出来まい。」

「解つた。近藤さんがそれ程の意氣なら、生涯の運を賭けて見るのも面白からう。」

さう最初に賛意を表したのが山南であつた。

「やつて見るか。」

「やりませう。」

快然と一同が應じた。近藤は鬨を深めた。

「策士の策を逆用するとすれば、當座は相當の我慢が要らう。一に誠實、二に忍耐、我れわれは心

身一體の行動をとつて、個人の感情に走ることは、絶対に避けなければならない。これは互に誓つておきたい。」

近藤の堅忍は、實にこの夜から始まつたのであつた。

五

二月二十三日、京入りをした浪士隊は、折から愛宕の肩にかゝつた西陽の光を真向きに浴びて、三條の橋を西に渡つた。江戸を發つてから、實に十六日の行程であつた。

夕冷えが肌を迫つて、花の季節には少し早かつたが、北東の空に比叡、西に愛宕、それをつないで都を繞る峰々の春を仰ぐと、遙々來たといふ感慨を押へることが出来なかつた。殊に山影の乏しい武藏野を見て暮した關東兒の近藤達には、なだらかな峰々の起伏に圍繞されて、整然と碁盤目に建並んだ町々を見ると、如何にも落着いた皇城の地の感が深かつた。至る所に神社の屋根が見え、塔が聳えてゐた。築土の塀が巡つてゐた。牛が歩いてゐた。低い屋根が並んでゐた。すべてが靜穩で、明るく長閑な風光であつた。

噂に聞いた腥風血雨の慘が、この芽出度い地の、何處に行はれてゐるのかと疑はれた。保元、平治、應仁の昔物語さへ、この地の現實に結びつかぬ、單なる繪卷とよりほか思へなかつた。

一行の宿舎には、洛外王生村の寺院や、土地の豪家があてられた。新徳寺を本部として、そこに清河等二十一名が落着き、鞠殿や山岡などの幕府役人は、前川莊司といふ豪家に這入つた。近藤と芹澤には八木源之丞といふ郷士の家があてられ、それぞれ一黨を率ゐて同宿することになつた。宿舎割がかういふことになつたのは、半月餘の旅程の中に、漸次黨派色が明らかになつて來て、入京直前には殆んど最初の編成が解體してゐたからであつた。

途々、山南敬助は近藤の阻止にあつて、積極的に手出しをすることこそ諦めてゐたが、それでも村上俊五郎相手の小競合は止めず、一觸即發の危険を孕んだまゝ、險惡な旅を續けて來た。

清河八郎は出發から姿を見せなかつたが、これは一日くらの間隔をおいて、わざと一行の後になり先になりしてゐたことが、入洛直前に知れ渡つた。芹澤、池田等と同じ取締附の齋藤熊三郎が清河の實弟で、兄に代つて隊の監視にあたつてゐたことも判れば、浪士募集の際、牢から出て甲斐地方の勸説に奔走した石坂周造、池田徳太郎の外に、西恭助、河野晋次郎、草野剛三、森土鐵四郎、和田利一郎、宇都宮兵右衛門等の清河一派の者が、それぞれ各隊に巧妙に配置されてゐたことと判

つた。

街道が東海道に合する草津まで来たころには、芹澤も一黨の新見錦、平山五郎、平間重助、野口健司等と一團になり、近藤もまた、たゞ一人三番隊に編入されてゐた井上源三郎を加へて、試衛館隊を作つてしまつた。かうして最初の編成が自然解體すると同時に、一平隊士に過ぎなかつた近藤の勢力は、隠然として重きをなすに至つた。

同宿の者は二黨合して十三人だつた。試衛館派は芹澤派を見て、これはみんな相當に出来る奴らだと囁き合つた。それもその筈であらう。新見錦は岡田助右衛門に學んで免許皆傳の腕であり、平山五郎は齊藤彌九郎の練兵館出身でこれも免許、平間重助は芹澤取立の目録者、野口健司は百合本升三門の目録者で、いづれも芹澤と同流の神道無念流であつた。揃つて水戸の脱藩者であり、揃つて芹澤の手直しを受けてゐた。その點近藤一派に似て、更に強固な團結の條件を備へてゐるともいへた。

主領同志が本庄宿で睨み合つた仲であり、隊中でも互に一黨を成した勢力の對立であるだけに、夕食の膳についた時には、兩派とも油斷のない盃の獻酬をした。

「近藤君、本庄宿では手古摺らせましたな。あはゝゝゝ。」

芹澤は床前に近藤と向ひ合つて、座敷中に響き渡るやうな豪快な聲で笑つた。取り様によつては侮辱とも思へる挨拶であつた。が、近藤は、これが芹澤の最大の讓歩であり、妥協であり、且つ敬意の表現であると感じると、ひねくれた一國者ではあるが、それだけに案外人が善いのかも知れないと思つた。

酒が終つて食事にならうとした時、近藤は山南の姿が見えないのに氣がついた。

「井上君、山南はどうした。」

「いま山岡さんから使ひが来て、すぐに來てくれといふので出て行きました。」

近藤はちよつと不審に思つたが、芹澤がゐるので深く訊ねなかつた。が、芹澤はそんなことにはまつたく無頓着だつた。そこへ下婢が顔を出した。

「あのう、ご飯がお濟みやしたら、本部へお越しやしくれやすて、お使ひがござりました。」

芹澤は憤然たる顔をして呟いたが、それでも食後一憩みすると、近藤を誘つて立上つた。が、近藤は山南の歸りを待つことにした。

芹澤は一黨を引連れてどやどやと出て行つたが、殆んど入れ違ひに山南が戻つて來た。

「お、待つてたんだ。山岡さんは何の用だつた。」

みんなが心配さうに口々に訊いた。

「うむ」膳の方へは行かずに、山南は座敷の真中へ坐つた。

「山岡さんは人物だな。」

「どうした。」

「行くといきなり、將軍家入浴前の大切な時だから、何事も自重してくれといはれた。何のこともと思つてゐると、そこへ村上俊五郎が這入つて来て、大小を除つて、道中は失敬した、萬事今宵限り水に流してくれといふのだ。——面喰つたな。」

「山岡さんが謝らせたんだな。」

近藤は感動の色を見せた。

「村上も相當の奴だ。よく謝つたな」と永倉新八がいつた。

「村上は清河の股肱だ。それが大小を除つて謝るといふのは……これア餘程のことがあるんだ」と、土方の眉が才走つた動きを見せた。

近藤は愉快さうに頷いた。

「いづれは何事かあるさ。何があつてもいゝ。見る人は見てをる。芹澤の一黨と我れわれを同宿させたところに、既に山岡さんの眼はあるのだ。諸君も知遇に酬ひるつもりで、自重してくれたまへ。——では山南君、飯を済まして本部へ行つて見よう。」

六

本部の新徳寺の本堂には、既に隊士達が溢れるやうに詰めてゐた。が、役人側の姿は見えず、百目蠟燭があかあかと燃えて、茶菓の支度がしてあり、何か食後の茶話會といつたくつろいだ風景であつた。隊士達は、京獨特の焦けた糠の香のする煎餅を取つて、ぼりぼり嚙つてゐた。

そこへ清河八郎が、親しげな微笑で這入つて来て、「みんなお揃ひですな」と突立つたまゝでいつた。前の方でるすまみを改めようとする者のあるのを、「いや、そのまゝ」と気軽に制したので、誰も別段改まらうとはしなかつた。

清河の響きのよい聲は、その虚を衝いた。一瞬、相似た風景が、江戸の傳通院の顔合せの日を錯覚させた。

「ちよいと御挨拶を申上げます。出發以來半月餘、長の道中一人の落伍者も出さず、本日全員無事着京を見たことは、諸君と共に洵に御同慶にたへない次第です。さて我れわれは、盡忠報國の名の下に馳せ参じた者であります。方今未曾有の國患に際して、上御一人の歡慮あらせられるところを拜しますれば、何が盡忠報國であるかは自ら明らかであつて、賢明なる諸君におかれては、この事は既に御承知の筈であらうから、贅言を費すまでもありません。それに就いて我れわれの微意を、朝廷に達せねばならないのでありますが、建白書は潜越ながら、不肖清河が起草しておきましたから、一應御静聽を煩はしたいと存じます。」

清河は懐中へ右手を差入れながら、すつと一座を見渡した。微笑は湛へてゐるが、一觸忽ち火を發するやうな烈しさが、炯々たる眼光に潜んでゐた。

着京の勞を備ふ茶話會でもありさうな様子から、突如不意打の重大問題を浴せられて、不用意の満場は肅然としたが、はつと神經が緊張しただけで、口を切らうにも意見を纏める餘裕がなかつた。誰も彼も反射的に、我々の立場は……將軍の警衛は……幕府は……と反対意見の斷片が、清河の張つた尊皇攘夷の網の目を脱けて、空轉するばかりであつた。

近藤が人々の頭越しに、颯と芹澤へ注視を馳せたのと、芹澤がぎよろりと眼を向けて來たのは殆ど同時であつた。が、どちらも、咄嗟に窮餘の色を見たに過ぎず。それもこれも一瞬の間であつた。

「では、讀上げます。」

恭しく草稿を擴けた清河の、鏗のある聲が隅々まで響いた。

謹而奉言上候。今般私共上京仕候儀は、大樹公御上洛の上、皇命を尊戴し、夷狄を攘斥するの大義御確斷爲遊候。御事に付草莽中、是迄國事に周旋の族は不及申、盡忠報國者有之候は、既往の忌憚に拘らず廣く天下に御募り、其材力御任用尊攘之道主張被遊御趣意に付、私共始御召に相成其周旋可有之との義に候間、夷變以來、累年國事に身命を抛ち候者、其旨意も全く征夷大將軍の職掌御主張相成尊攘の道可相達との赤心に候得者、右の如く言論洞開人材御任撰被遊候者赤心報國の志從て是非可相徹底と存則御召に應じ罷出候。然る上は大將軍家も斷然攘夷之大命御尊戴奉補佐相成朝廷は勿論之事、萬一因循姑息公武離隔之姿に相成候は、私共幾重にも挽回之周旋可仕、獨其上にも御採用無之候得者、不及是非銘銘靖獻之心得に御座候得共、固より盡忠報國身命を抛ち勤王仕候志意に付、何卒、於朝廷御憫察被成下、何方成共尊攘之赤心相遂候様御差向被成下候は、難有仕合に奉存候。右に付幕府御世話にて上京仕候共、祿高位等は相受不申候。只々尊攘之大義奉相期

候問 萬一 皇命を妨げ私意を企 候 奉於有之は、假令有司の人たりとも、聊 無容赦謹
 責仕 度一統の決心に御座 候。此段不願威嚴言上 仕 候間、御開置被成下徹底 仕 候様
 誓天地 奉 懇 願 候。誠惶頓首謹言。

讀み終ると清河は、今度は嚴肅な表情になつて、ぐつと満堂を睨め廻した。
 「明日、學習院へ上程する。別に、御異存はありますまいな。」

一語々々を句切つて、強く威壓するやうにいつた。誰一人言葉を挿む者はなかつた。
 呆氣にとられ氣味だつた一堂には、やがて秋風が寄せて來た笹原のやうなざはめきがつた。幕
 府の世話で上京したが、祿も高位は受けてゐない。皇命を妨げ、私意を企てれば、有司の者たり
 とも容赦しないといふのであるから、これは幕府の支配下になるて、反幕宣言をしたのに等しかつ
 た。清河が幕府を利用して、自己の目的のために我れわれを操つてゐるのだとは、一同等しく氣附
 いたが、なほ發言する者がなかつた。それにはいろ／＼な心遣ひがあつた。不用意な意見を述べて
 も、清河には堂々たる逆襲が用意されてゐるであらうと考へる逡巡。もしも建白反對を唱へて、
 佐幕派かと極め付けられた時、さうだといひ切れれば如何なる結果になるかと危ぶむ遲疑。更に、思
 案もなく無條件に清河の盛名に壓服されてゐる者。漠然と建白に同意しながら、周囲の者の肚を顧
 慮して、それを口に出せない者。……

「御異存はないと認める。誰しも盡忠報國の赤心に、變りはありませんまいからな。……では、お疲
 れだらうから、引取つてお休み下さい。」

軽く満足さうに頭を下けた清河は、まづ自分から颯と引揚げてしまつた。一言の反對にも過はず、
 浪士隊の動向を決定する重大問題が、清河の意志一つに纏められてしまつたのであつた。
 清河が去ると、がや／＼と急にさよめきが高くなり、その高まりに應じて、集團は鈴なりに塊つ
 てるた蟻をつゝいたやうに、徐々に崩れ始めた。散解の先鞭をつけたのが芹澤であつたかのやう
 に、その一黨が眞先に憤然と席を蹴立て、行くのを近藤は見た。

遅れて近藤達が宿舎に歸つて見ると、芹澤達は外出の支度をしてゐた。
 「近藤さん、お出掛けにならんか」と芹澤が誘つた。
 「いや、僕達は出掛けますまい。」

「さうか、では頼みますぞ。」
 何もいはなかつたが、清河の遣口がむかつて、おそらくむしやくしや腹を癒しに、島原へでも
 出掛けたのであらう。

「村上程の奴が、山南君の前に溫和しく膝を屈したのも道理、うまうまと一杯喰はされましたな」と土方が近藤にいつた。

「一杯喰つたのは、我れわれよりも幕府だ。」

「どうしたもんですかな。一同で山岡さんの所へ相談に押しかけますか。」

「うむ」と近藤は大きな口をぐいと結んで、案ずるやうに京の家特有の低い天井を睨んでゐたが、稍あつて「暫く様子を見てはどうだ。清河は江戸の山岡さんの屋敷を宿所にしてゐた男だ。どんな默契が出来てゐるかも知れぬ。そこへ我れわれがのこく出掛けるのも、忠義振つたやうで、卑しまれる結果になるかも知れぬからな。」

「さうです。我れわれが騒がなくても、問題があれば、山岡さんの方から起りませう。先づ自重すべきですな。」

ふだんあまり喋らない津藩主の落胤藤堂平助が、何處か品のある調子でかういつた。

「しかし、今夜の清河には、乗るか反るかの決死の様子が見えてゐたな。石坂にも齊藤にも、池田にも村上にも、一黨には悉くそれが見えてゐた。清河は大きな役者だ。結束が固ければ、あれ程の仕事が出来るといふことを、まさしくと教へられた。業腹だつたが、我れわれに取つては生きて

教訓だつた。」

近藤は本堂の緊張を思ひ返して、むしろ羨しさうな口吻を見せた。

折から京の空を縫つて流れる鐘の響が、一同の胸に何かいひ知れぬ哀愁を溶かし込んで行つた。

七

この時分、新徳寺内の宿舍本部では、清河と、素志を一にする一黨とが、互に感激の涙を溜めた眼を見交はしてゐた。

「兄上、おめでたうございました。」

乾坤一擲の大芝居が、清河の決死の覚悟と尊攘の熱情にあつたことに、今更兄の勞苦を思ひ遣つた弟の齊藤熊三郎は、感激の涙に咽んだ。傍らには石坂周造、池田徳太郎も眼を潤ませてゐた。村上俊五郎もこの大きな感激の前には、山岡の言葉に従つて山南敬助の前に、大小を除つて忍んだ屈辱などは、忘れ果てゝゐるものゝ如くであつた。

「まだ安心する時ではない。今夜は不意打にあつて、一同呆然としてゐただけだ。これで日が経て

ば、納まらぬ速中が泡のやうに沸え立つて来よう。それを抑へるためには、機先を制して建白書を上程し、勅諭を拜してしまはなければならぬ。烏合の衆を操ることは、こつちに覺悟さへあれば困難ではないが、たゞ、建白をお取上げになるかならないかと問題だ。もしお取上げにならないのだ。我れわれは幕府と浪士との間に挟つて、立場を失つてしまふ。これまでの苦勞も水泡に歸するのだ。その上幕府は何か名目を設けて、我れわれを捕縛するか知れぬ。問題は明日の建白書だ。一同は固唾を呑んで聽いてゐた。

「西君、河野君、草野君、森土君、和田君、宇都宮君、君達六人、明日學習院へ行つて、もしお取上げがなかつたら、生きて還るなよ。我れわれの素志が達せられるか否かは、偏に懸つて、明日の君達の努力にあるのだ。しかと頼んでおくぞ。」

「御安心下さい。我れわれのためばかりではありません。尊攘の大義のためです。生還もとより期す處ではありません。」

西恭助は、精悍な眉宇に決死の色を見せてゐた。

「成れば即ち謫も正だ。歩調の合つた同志ばかりの、仕事でないだけに困難は大い。そのかはり事成れば、敵に廻つて、回天の業の害をなすかも知れぬ無頼の劍を、存分大義に活用することが出

來るのだ。諸君もこゝ數日は、慎重に事に當つてもらひたい。」

清河の謀策は、いまだ志士中の何人も企て及ばなかつた新機略であつた。弘化四年 孝明天皇御陵祚の年、十八歳にして郷關を出づるや、八方に勤皇の大義を遊説して、實に六十餘州足跡に至るなきまでに跋涉し、東西各藩の志士と交を結び、劍を學び、經倫の學を修めて東奔西走、隠現出沒正に風の如く去來する活躍振りに、その名は全國志士中に隠然重きを成すに至つた。

清河は去年四月の寺田屋事件に於ける、爆發の主謀的役割を擔つてゐた。文久二年春、中山家の侍 田中河内介、久留米水天宮の祠官眞木和泉守、筑前藩平野次郎、肥後藩官部鼎藏、壽 武兵衛、土佐藩吉村寅太郎、薩摩藩有馬新七、柴山愛次郎等、錚々たる志士中の精銳が結んで二百餘の義徒を募り、折から入洛の島津久光を擁して、討幕の師を擧げようと策したが、これが久光の溫和主義のために挫折した。續いて、この誤算を補はうとした平野次郎は、恰も參觀のため我が藩公の播州まで來てゐるのを知るや、直ちに馳せ向つて謁し、久光に代る蹶起を慫慂した。ところがこゝでも誤算を重ねた平野は、却つて脱藩の罪に問はれ、東上を中止した藩公のために、筑前へ送還される結果となつてしまつた。

これ等の蹉跌は義徒をして方途を失はしめ、一時解散の悲觀論まで生むに至つた。この時清河は

「こゝまで来た上は仕方がない、我れわれの手で事を擧げるまでだ。在坂の者は洛中へ侵入して長藩の連中と合し、九條關白と所司代を血祭にあけ、戊午の大獄以來幽囚の御身であらせられる、青蓮院宮の参内を願ひ、勅を賜つて否應なしに島津侯を起たせてしまふのだ。非常手段に訴へるしかない。」と強硬に暴發を主張した。

清河に心服しない者も、清河の機略と識見は認めてゐた。重なる齟齬に無念の涙を吞んでゐる時、むしろ他力の大を恃まず、眞に有志の手だけで、回天の業の端緒を拓かうとする清河の積極論は、一同の心を振ひ興した。年配の眞木和泉等の自重説もあつたが、熱血の壯者達が悉く動いてしまつた騎虎の勢は、如何ともすることが出来なかつた。

議が纏ると、清河は一足先の大坂から京都に潜入し、三條河原町の知己の家に隠れて、一擧の夜を待つた。ところが京都殺到の直前、計畫は久光に漏洩して寺田屋事件となり、危機一髪のところ義舉は晝餅に歸してしまつた。

清河は地團駄踏んで口惜しがつた。有馬以下多數の同志が瘞れたのを、斷腸の思ひで聞かなければならなかつた。しかも事の起りが清河の策にあつただけに、蠶々たる非難が一身に集り、屠腹し、責任を果せと詰寄る者さへあつて、京阪には身を置くに所もない有様となつた。こゝに於て同

志間の信用を挽回し、同時に素志を貫徹しようとして策したのが、松平上總介を動かしての、浪士募集といふ幕府への獻策であつた。

京阪で同志と共に、事を策する餘地のなくなつた立場も無論であつたが、何よりも清河に取つては、それぞれ一方の將たり得る同志が、雑兵の如く失はれるのが遺憾でならなかつた。同志だけで事を策するのは、堅實性はあるが、一つ間違へば何處を衝かれても、あたら有爲の士が犠牲にならねばならない。寺田屋事件はこれを痛感させた。そこで清河は、時勢柄剣だけは相當に修めてゐるが、國事のために何等の益をもなさない無爲徒食の徒を、雑兵代りに利用して、これを尊攘の義擧に活用しようといふ肚を決めたのであつた。五十名といふ幕府の見積を知つてゐたにも拘らず、集め得るだけ掻き集めた魂膽もそこにあつた。

既に清河が幕府へ身を賣つたといふ悪口が、行はれてゐることも彼は知つてゐた。それだけに是非でも建白の目的を達成して、一は新戦略と潔白とを明らかにし、一は彼としての理想の最後の花を、咲かせねばならない立場にあつた。一黨は清河の立場と心事とを、よく理解してゐた。そしてこゝには、芹澤一派や近藤の試衛館派の結束とは、おのづから異なる思想的團結があつた。

翌日、西恭助以下決死の六人が、非藏人鴨脚和泉、松尾伯耆の兩人をして、朝廷が建白書採納

あらせられた旨を齎して歸ると、清河一黨は胸を叩いて欣躍した。更に數日を経て、鷹司關白からは左の朝旨が傳へられた。

醜夷拒絶の期於一定者、園國の人民戮力可勵忠誠者、勿論之儀先達有志の者以誠心報國盡忠可致周旋之儀 叡感不斜依之猶又被洞開言路草莽微賤之言達 叡聞忠告至當之論と否を不論不雍蔽様との深重の思召に候間、永翰忠言學習院へ參上御用掛の人々に迄、揚言被仰出候に付相心得可申出候也。

清河はこの御沙汰書を拜し、感極つて同志の者と共に男泣きに泣いた。思へば骨を削り肉を割くにもまさる困難な仕事であつた。

鶴殿と山岡はこの事實を知つたが、最初からの態度によつても知られる通り、二人は幕府のために浪士隊をどうしやうといふ程の、深い關心も熱意もなく、むしろこれを機會に取締不行届の應で、自分達の解役されることを秘かに望んでゐるくらゐであつたから、一應形式的に、守護職と所司代へ届出たに過ぎなかつた。が、守護職と所司代でも、當面の責任たる板倉勝靜が不在とあつて、處置を講ずることが出来ず、江戸へ報じようにも、板倉を始め關老水野忠精以下は、既に江戸を發した將軍と共に入洛の途上にあるといふわけで、その着京を俟つより仕方がなかつた。

八

浪士達はすることがないので、毎日ぞろぞろ京の町へ出歩いた。陽氣は一日一日と春めいて来るが、彼等は出發以來の汚れた衣服のまゝの者が多かつた。何しろ支給された手當といへば、出發前の十兩ながしの外には總一文の収入もなく、その金で旅支度もしてゐれば、途中の飲食もしてゐた。そこへ噂に聞いた祇園の雪洞、島原の軒行燈を眼の邊り見れば、翌日から忽ち困ることは判つてゐても、誘惑に打克つことが出来ぬまゝに、誰も彼もひどく貧乏をしてゐた。

ちゝむさい風態で、物珍らしさうにぞろ／＼歩き廻る彼等の姿は、浪人に馴れてゐる京の人々の眼にも、如何にも浪人臭が強く、忽ち口の端に上らないではゐなかつた。江戸から來た壬生の浪人だといふことが、瞬く間に知れ渡ると、京童は壬生浪やと稱んで、壬生浪が浪士隊の通り名となつた。

その壬生浪が、亂暴を働くといふ噂がちらほら立つた。脅迫、暴行の訴へが茶屋商家から相次で起つた。が、町奉行でも取締に就いては、守護職所司代の意を心得て、見て見ぬ振りをしてゐた。

この間に清河の計畫は着々立案されてゐた。先づ攘夷の朝旨を弄した上は江戸に引返し、横濱を襲撃して市中に火をかけ、外人を襲殺して黒船を焼拂ひ、それから神奈川の本營を攻めて軍資を奪つた上、厚木街道から甲府城に入り、こゝで勤皇攘夷を天下に呼號しようとの策を樹てた。朝旨を奉じてゐる以上こゝまで遣れば、有志は全國に烽起するといふ見込みであつた。

大きいといつても清河は赤手空拳、郷土出の一介の浪士に過ぎず、藩の背景もなければ資力も兵力もあるのではない。寺田屋事件の折の爆發計畫も、實にこの事情に孕胎してゐた。たと二十年來の自己が築いた、勤皇家としての閱歷を唯一の財産として、力の及ぶ限りの義軍を起せば、後は時勢が提供する後援と運に俟つ他はなかつた。時恰も江戸は將軍が不在であり、好機逸すべきにあらずと、清河は攘夷を口實に、浪士隊の江戸歸還を朝廷に運動したのであつた。

かゝる間に將軍家茂は三月五日、兵三千を率ゐて入浴した。着京と共に清河の策動を耳にした板倉勝靜は、「さてこそ清河め、やりをつたか」と苦肉の策の裏をかゝれて、舌打して口惜しがつた。が、既に朝旨を拜した浪士隊を、無闇に強壓するわけには行かず。さりとして明らかに反幕府的態度を示してゐる浪士隊を京に置いては、將軍在京中の事ではあり、いつ飼犬に手を噛まれる結果にならうも計り知れない。勝靜は、急遽江戸へ送還して監督するに若くはないと思ひ定め、折から

生麥事件が日英外交上の重大問題化してゐるのを口實に、朝廷と議して早急に事を運んだ。これは清河の秘かに希望してゐる處と表裏から一致した。その結果遂に、生麥事件に就き萬一兵端相開くの節は、即刻攘夷の實を擧ぐべし、といふ意味の御沙汰を浪士隊に賜はることゝなつた。

かくて遙々如月の殘雪を踏んで中仙道を上つて來た浪士隊は、居ること僅か二十日餘にして、三月十三日再び道を東に返すに至つた。その前夜清河は、全員を本部に招集した。鶴殿も山岡も本堂へ出席してゐた。

今般横濱へ英吉利軍艦渡來、昨戊年八月武州生麥に於て、薩人斬夷の事件より三個條申立、何れも難聞屈筋に付、其旨被及應接候間、己に兵端を開くやも難計、仍而其方召連浪士速に東下し、粉骨碎身可勵忠誠候也。

これは浪人奉行の鶴殿に宛てられた御沙汰書であつたが、清河は自己の威令を行ふ必要上、自分で讀上げた。

「これは、鷹司關白より下された御沙汰書であります。去年八月武州生麥に於て、薩州老公の行列が西下の砌り、英人四名が不遜にも先供を切つたため、中一名を斬り、一名に重傷を負はせた件は、諸君に於かれても既に御承知の事と思ひます。然るに英公使パークスはこの件に關し、薩州

老公を捕縛して、英人立會の上で處刑するか、五十萬弗の償金を出すかの、暴戻なる條件を以て吾に迫り、事態は何日何時兵端を開いて、攘夷實行に移るやも知れんのであります。畏れ多くも、聖上におかせられましては、殊の外御軫念遊ばされる由に拜聞いたします。我れ等は盡忠報國の實を擧げるため、關白の命を奉じ、直ちに東歸して事態に備へることになりましたから、左様御承知願ひます。」

この夜の清河は始終穏かな微笑を湛えてゐて、そのよく響く聲にも、大事を仕遂けた後の満足が和やかに流れてゐた。

集つた一同も、今度は別に意外も驚きも感じなかつたと見えて、命令として靜肅に聞いてゐた。やれやれ、また江戸へ歸るのかといふ囁きが、隅の方にぼつくと起つたくらゐるものであつた。

「では、發足は明朝卯の刻と定めます。いづれも遺漏なき様お支度を願ひたい。」
かういひ渡して清河は靜かに立上つた。

「清河さん。」

その利那、びりりと耳朶を震撼する猛然たる聲が起つた。寒夜に氷が割れたやうに、満座はしいんと息を呑んで靜まり渡つた。

「僕は歸還は不服だ。」

その聲は近藤であつた。清河から前へ十人ばかりを隔てた座中に、近藤は憤とした顔をして清河を睨んでゐた。

「不服だと。」

思はず氣色ばんだ清河の眼がぎろりと光つた時、また一人。

「わしも不服だ。」

轟然たる聲だつた。近藤とは向ひ合ふやうな位置の、清河の前に矢張り十餘人を隔てて、芹澤が鐘馗のやうに苦り切つて突ツ立つてゐた。

波及を虞れた清河は、咄嗟に落着いて聲を落した。

「何故不服だ。理由を聞かう。」

「我れわれは縁り人形ではない。」

芹澤は呷鳴つた。

「それだけでは理由にならぬ。」

高飛車に出て、清河は芹澤を尻目に向けた。それから悠然と近藤の方を見た。

「近藤君の理由は。――」

近藤は更にむかツと来た。もともと理由よりも、清河の遣り口が癪に觸つて堪らなかつたのだ。「我れわれは幕府に直轄してをる者だ。あんたの差圖で行つたり來たりは出來ぬ。」清河は薄笑ひを浮べた。

「それが理由か。」

「理由も何もない。事毎にあんたの差圖は受けんといふのだ。」

清河は一人には取合はぬといふ風で、不氣味な薄笑ひのまゝ、一座へ辯明するやうにいつた。「僕は關白の命によつて、差圖をしてをるのだ。」

近藤は坐つたまゝであつたが、歴えられてはゐなかつた。

「たとへ關白の命があつても、將軍家から何分の御沙汰があるまでは、斷じて京を去るわけには行かぬ。第一我れわれには、將軍家御警衛といふ役目がある筈だ。その將軍家は現に御滯京中ではないか。去るべき理由はない。」

芹澤が例の鐵扇を颯と揮つて吹鳴つた。

「近藤君、問答はいらぬ。退席しよう。」

近藤が立上ると、試衛館派も一齊に立上つた。同時に芹澤一派も立上つてゐた。すると誘はれるやうに一同がこれに續いて、はては總立となつた。

この形勢を見た清河は、火を吐くやうに叫んだ。

「待てッ。」

「なにッ。」

芹澤が振り返ると、兩者を隔てゝゐた人数は颯と左右へ避けてしまつて、一人の遮る者もなくなつた。清河は三尺もある大刀の柄に手を掛けると、満面に朱を注いで、そこ動くなとばかり芹澤と近藤を等分に睨んだ。

「盡忠報國とは朝廷を指すか、幕府を指すか。尊攘は天地の大義だ。私情に捉はれて朝旨に背かうとするか。うつけ者。」

「うつけ者とは何だ。」

「貴様、赦さんぞ。」

嚇怒した芹澤と近藤は、期せざる攻守同盟を結んで居合の腰になつた。

清河の一派と、芹澤一派、それに試衛館派を除いた一同は、遙かに退いて本堂の周圍一杯に圓陣

を作つたまゝ、頬を硬ばらせてなりゆきを凝視してゐた。

「おちちりと時が移つた。一刻が数刻の長さを保つて見えた。そこだけ空気が凝結したやうに、微

動だもしない。殺氣が嵐を孕んで息詰り、危機は一瞬に迫つた。

「待てッ。」

突如、烈しい一聲が動かぬ時を叩き破つた。同時に三派の中央へ飛び込んだ山岡鐵太郎が、巨木の如く突ツ立つてゐた。

「話はわたしがする。一應引いて貰ひたい。」

底力のある聲であつた。役人は今や巍然たる劍客になつてゐた。

ふうツと深い溜息が流れて、一同の姿勢が漸く舊に復した。

「清河君から退いて頂かう。芹澤君と近藤君とは、わたしの宿舎へ来て頂く。」

大事を控へてゐる清河は、黙つてゐたが素直に肯いて、二人を一睨して去つた。額に汗が光つた。誰の額にも汗が滲んでゐた。

その夜、山岡は不服派と清河とを、別々に招いて懇談した結果、不服派の斷乎たる殘留希望の意志を容れて、止まる者のために、守護職との間の斡旋の勞を執ることを約した。

清河も分離を諾した。多少の動搖のあることは、彼ももとより期してゐたところであつた。しかも彼が捨身の一喝は、能く動搖を食ひ止めて、不服派の十三名を除く全員を率ゐ、再び東下の旅に發つことにまで漕ぎつけた。

一行が既に出發してしまつた後、山岡は午近くになつて、風の如くに殘留派の宿舎たる八木源之丞方へ現れた。

「諸君のことに就いて、板倉殿と會津侯に會つて來たが、その結果は向後守護職預りといふことに決つて、會津侯の支配になつた。しかしこれは内諾であつて、表面には諸君が聯名で、粉骨碎身を誓つた嘆願書を守護職へ提出し、それを聽許するといふことになつてゐるから、左様御承知願ひたい。分離とはいへ、脱退浪々であるから、一應この手續を踏むことは止むを得まい。」

芹澤も近藤も、山岡の心入れに對して交々禮を述べた。

「拙者は今から、浪士隊の後を追つて江戸へ歸る。目下政局は多端、朝暮關係も將軍家の御入浴によつて、好轉する模様は見えません。政令は二途より出て、政治は悉く裏から行はれ、何時火を發するか知れない有様。この噴火山の底のやうな京に残つて、土道を全うし、身を全うするのは容易ではござるまい。充分の戒心を以てお暮らし下さい。」

それは芹澤に對する忠告であり、近藤に對する期待であつた。近藤はこの人に別れるのが如何にも残り惜しかつた。

「御注意は膽に銘じます」とだけいつて、眼に感謝と心服とを罩めた。

山岡は倉皇として駕で浪士隊を追つた。寸刻をも許さぬ不安が胸に溢れてゐたのであらう。

浪士隊の出發直前になつて、泥舟高橋伊勢守が鶴殿と共に浪士取扱を任命され、講武所劍術

教授方佐々木唯三郎他五人が、浪士出役に任じられたといふ發表があつた。

(板倉勝靜が内意を含めて、清河を暗殺するつもりかも知れぬ。——)

さう山岡は懸念した。

果然山岡の推測は當つた。途中こそ清河にもそれだけの心構はあつて油斷がなかつたが、横濱

進撃の一擧を翌々日に控へた四月十三日、清河は遂に佐々木等の兇刃に斃れることゝなつた。

しかし、晩春の夕影迫る赤羽橋畔に、空しく消えるおのれの運命を知る由もない清河は、希望に

充ちた雄圖を抱いて、琵琶湖のほとりを闊歩しながら、江戸への土を踏んでゐた。後年、自己の主

義を暴風の如く蹂躪して廻つた新選組の母胎を、おのれの手で作り残した皮肉な運命をも知らず

に……

壬生青嵐

—

壬生村の豪家八木源之丞方の表門に「壬生浪士屯所」と大書された眞新らしい檜板が、更に「新選組屯所」と墨痕鮮かな文字に書き變へられて間もない八月十三日の灯ともし頃、近藤勇はひと風呂浴びて自室に歸つて來ると、戸外にごろ／＼と恰も大砲を曳き出すやうな音を聞いて、何心なく窓の障子を開けて見た。土塀に遮られて、物音の何であるかは見極められなかつたが、朱色の大きな月が、繪のやうに東山の眞上に懸つてゐるのが見えた。仲秋十五夜を二夜の後に控へた微風も絶えた京の町は、黝々と穏かな夕闇に浸されつゝあつた。

近藤は縁側へ出て、「土方君——土方君」と呼んだ。隣室の障子の中から「おゝ」といふ返事が聞えて、手紙でも書いてゐたらしく、ことりと筆を置く音がしたが、間もなく土方は障子を開けて縁側へ現れた。

「外が少し騒がしいやうだな。」

「僕も書き物をしてゐましたが、妙な音がするので、出て見ようと思つてゐたところです。」

「大砲を曳出してゐるやうだが、出て見ないか。」

二人は一旦太刀を取りに這入つてから、連立つて門外へ出た。

明りらしいものは提燈ひとつ見えませんが、新徳寺の門前にあたつて、宵月の仄明りの中に影繪の如く人影が去來してゐた。

「また芹澤さんが、何か始めるのではないかな」と土方が呟いた。

近藤は黙つて新徳寺の方へ歩いて行つた。案の條門外には大砲が曳出されて、隊士が十人ばかりその周圍に群れてゐた。

「おい、どうしたんだ」と土方が訊ねた。

「はア。」

「大砲を何處へ持つて行くんだ。」

隊士は土方に氣づいて、「副長ですか。芹澤局長の御命令ですが、何處へ行くのかまだ判りませぬ。」

「芹澤さんは何處だ」と近藤が後ろから口を挿んだ。

「中にをられます。」

近藤と土方は、黙つて門内へ這入つて行つた。廣庭に五十人ばかりの隊士が勢揃をして、庫裡には「誠」の字の浮出た隊の高張提燈が掲げられ、その下にすぐ眼につく芹澤の巨軀が、四五人と一緒に立つてゐた。

近藤と土方は傍へ行つた。芹澤をはじめみんな頭巾で顔を覆つてゐたが、新見、平山、平間、野口の一黨であることはすぐに判つた。

「芹澤さん、何事です。」

「やア近藤さんか。なに、大したことではない。一條葎屋町まで行つて来る。」

「大和屋ですか。」

「あんたも御存知か。不埒な奸商だ。朝廷へ萬金を獻じ、不逞の浪人共へ千金を出して、おきながらわれ等洛中の治安に任ずる者が、隊費の借用方を申込んで一文も出さん。このまゝ放置しては隊の威信に關するのではな。」

「誰が、隊費の借用方を申込んだのです。」

「僕が行つた。先刻にべもなく刎ねつけをつた。」

「それは困る。隊規もあることだから、協議の上で遣つて貰はないことには、局中への示しがつきません。それに大和屋の献金は、噂だけで確證がありません。威信は先方が傷けたのではない。こちらが招いて求めたも同様ぢやありませんか。」

これも局長の新見錦が、むつとして口を挿んだ。

「近藤君、局長筆頭が自ら断じて行ふことは、即ち隊の總意だらう。」

「馬鹿をいつちやいかん。隊規は法だ。公儀に大法ある如く、局中は隊規が最高の支配をするのだ。法の禁ずる處、幹部も平隊士もない。」

「わはゝゝゝ」と巨軀を揺つて芹澤が哄笑した。「近藤君、すると勝手に金策した廉で、芹澤が切腹するのか。五月になつても冬着のまゝ、汗だくで弱つてゐる時、僕が鴻池善右衛門に談じ込んで、二百兩の隊費を借用して來たのはどうなんだ。あれで隊の貧乏が守護職の耳に達し、借金も拂つてくれる、隊費も下る、武器武器も揃へてくれれば、君も小ざつぱりした装をしてゐられる。隊の恰好がついたのはあれ以來だ。隊規のおかけではあるまい。」

「それは話が違ふ。が、議論は後の事にして、今夜の出動は一と先づ中止して下さい。」

「さういふわけには行かん。懲すべき者は懲らしておかんと、禍根を残すからな。御覽の通り新選組の出動ではない。隊族も提燈も持つちや行かん。僕は個人の資格で出掛けるんだ。――さ、行かう。」

一黨を振り返つた芹澤は、廣庭の方へ歩み出した。

「芹澤さん、大坂で角力を斬つた時のやうな尻拭ひはしませんぞ。」

「よろしい、あなたに迷惑はかけん。」

うるさいといふ風に傲然と答へて、芹澤はむしろやくしや腹を、雷のやうな號令に爆發させた。

「出動ッ。」

隊は霜を踏むやうな、草鞋の音を殘して出て行つた。

近藤は苦り切つて見送つてゐたが、「今夜は隊を空けよう」といつて歩き出した。

朱から橙色に變つた月が次第に高くなつてゐた。本部の近くまで來ると、山南、沖田、永倉、原田、藤堂、井上等が、矢張り騒ぎに驚いて飛出してゐたが、近藤を見つけて駆け寄つた。

「近藤さん、何の出動です。」

「なに、鴨さんの悪戯だ。」

近藤は苦笑を洩らした。

「大砲を曳いて行きましたよ」と山南がいつた。

「あの人の悪戯は、いつも度が過ぎるんだ。どうせ今夜は尻が来る。面倒だから我れわれも雲隠れに出動だ。——來給へ。」

近藤は先に立つて屯所の前を通り抜けた。

この時分、新選組の人数は百人餘に達してゐた。江戸の浪士隊が分宿した所を、そのまゝ隊士達の宿舎に借り受けて、建増をした本部の八木方には、各一室宛を占めて幹部だけが住んでゐた。

芹澤を筆頭に局長が三名、即ち芹澤、近藤、新見。副長が山南、土方。副長助勤が沖田、永倉、

原田、藤堂、井上、平山、平間、野口。それから後に入隊した明石浪士の齊藤一、熊本浪士の尾形

俊太郎、大坂浪士の山崎蒸、谷三十郎、松原忠司、京都一月寺の虚無僧安藤早太郎。その他調役並

監察三名、勘定役並小荷駄方四名。しかし最初の十三人以外は本外部に分宿してゐた。

右の中、谷三十郎は原田左之助の師で、千石ものと稱された寶藏院流の槍術家であり、齊藤一は劍道、山崎蒸は香取流の棒の達技を、いづれも入隊試合で認められたものであつた。松原忠司は柔術に秀で、尾形俊太郎と安藤早太郎は隊に稀な學者として、いづれも隊士の指南に當つてゐた。

残留組の提出した歎願書が即日聽許になり、守護職檢察隊の別働隊に就任して、會津中將松平

容保の直配となると、新たに隊士の徵募が許されたのであつた。

文久二年七月二十三日、九條家の諸太夫島田左近の斬殺に始つた天誅と稱する過激浪士の暴行は、京都守護職として容保が着任してからも一向に衰へず、その跳梁振りは神出鬼没を極め、守護職の威信を傷けること甚だしかつた。肝腎の所司代と町奉行の手の者は、身邊の危険感に慄かれて、探索どころか、むしろ廻避する傾向にあり、精悍を以て鳴る會津武士の檢察隊は、地理に疎く、跋扈する過激浪士を取締るためには、幾ら人数があつても足りなかつた。

その上容保は朝暮關係の調整と、公武一和の高等政策に日もこれ足らぬ有様で、壬生浪士が檢察隊に協力献身してくれば、市中のことは委せきりにもしたいくらゐるの料簡であつた。

募集に應じて浪士は續々と新選組へ入隊した。人数が増加し隊の編成が成ると、間もなく隊規として局中法度書が壁間に掲示された。これは近藤が芹澤に説いて、新らたに土方の起草したものであつた。

一、士道ニ背ク間敷事

一、局ヲ脱スルヲ不許

壬生青嵐

- 一、勝手ニ金策致不可
- 一、勝手ニ訴訟取扱不可
- 一、私ノ闘争ヲ不許

これに近藤が左の罰則を加へた。

右條々相背候者切腹申付可ク候也。

更に數ヶ條の内規があつたが、處罰は一切切腹と斷首であつた。

芹澤は苦笑しただけで承認した。

實はこの法度書は、局中に嚴に適用することは勿論だつたが、近藤と土方とが相談の上主眼とした處は、芹澤の暴慢を矯めようとする點にあつた。眼に餘る芹澤の暴行は、實に枚擧に違がなかつた。

守護職檢察隊の別働隊で、會津侯御直配といふのが利いて、所司代でも町奉行でも、新選組のすることは見て見ぬ振りをする。それに乘じて芹澤は隊士を引連れ、商家を訪ねては隊費借用の強談をして廻る。茶屋料理屋に難辭をつけて、亂暴狼籍を働く。訴へを聞いて與力同心が駈けつけて來ると、逆に役人の取締が手緩いからだと喚き散らす。實に芹澤が暴れ出すと手のつけやうがなかつた。

た。

過激浪士の所業には、曲りなりにも條理が立つてゐて、良民を慄え上らすことはあつても、直接危険を感じさせることはなかつた。よしんば酒席での暴行があつたにしても、役人の聲を聞くと忽ち退散してしまふからだ。が、新選組の横行は、何の關係もない良民に被害を豫想させると同時に、役人側と聯絡があるので質が悪かつた。俄然尊攘浪士に市民の人氣は集り、壬生浪士の存在は蛇蝎の如くに忌まれ出した。

會津侯は突然新選組に大阪出張を命じた。過激浪士が危険な浴中を避け、比較的取締の行届かない大坂に潜んで、不穩な計畫を廻らしてゐるからといふ理由であつた。しかし近藤は、新選組が不意に大坂へ追ひやられた理由を、もつと正當に理解してゐた。然るに芹澤は、こゝでもさしたる功績を擧げないうちに、大關小野川喜三郎部屋の力士を斬つて大喧嘩を始め、數人の死傷者を出すといふ不祥事を惹起した。山南、沖田、永倉達も居合せて、餘儀なく闘争に加はつてゐたために、宿舎に於て喧嘩に關係のなかつた近藤が、奉行所へ行つて尻拭ひをしなければならなかつた。

至誠、忍耐を旨として、隊を秩序ある取締團體に仕立てようとする、近藤の理想と苦心とは、芹澤によつて尻から破壊され、隊の存在は重きを成すどころか、却つて敵からも味方からも、更に市

民からも毛嫌ひされる暴力團體としての、印象を強めて行くばかりであつた。
 新選組の不在中、佛光寺高倉の油商八幡屋卯兵衛といふ者が千本西ノ京に斬られ、三條橋畔の
 制札場に首の晒された事件があつた。その時の捨札に、絲商大和屋庄兵衛の名が他の二豪商の名と
 共に併記され、「私慾を以て暴富を積む奸商たるにより、今にして改悟せずんば、八幡屋同様追て天
 誅を加ふ」といふ意味が書かれてあつた。
 縮み上つた大和屋では、傳手を得て莫大な金を朝廷に獻じ、浪士へも攘夷資金として、多額の金
 を差し出したといふ専らの噂であつた。

八月に這入つて、大坂から壬生に歸つて來た芹澤は、これを聞き込むと直ちに一黨を引連れて大
 和屋を訪ひ、「不逞浪士に資金が廻ればそれだけ洛中の暴行率が膨脹する。従つて取締にも多額の費
 用を要するからそれを補へ。嫌應はいはさぬ、當然の責任だ」と談じ込んだ。大和屋では莫大な要
 求額に驚いて、主人庄兵衛の旅出を口實に、取計へぬと刎ねつけてしまつた。そこで沸然色をなし
 た芹澤の手段を揆ばぬ癩癩玉が、大砲の筒に込められようといふ結果になつたのであつた。

土方の提言によつて、雲隠れは近くの島原やいつもの祇園を避けて、三本木へ駕を連ねた。
 駕籠屋の案内に委せて上つたのは「小柳」といふ、小ぢんまりした入口の割に奥深い家で、廊下
 を幾曲りして、河原に面した二階の奥座敷へ通された。月影が加茂川の流れに碎けては散る風情は、
 川下のやうな賑ひがないだけに、どこか田舎の温泉町へ來た感があつた。

「これはいゝ。土方君、祇園よりも情趣が深いぞ。」

「お氣に召しますですか」と、案内して來た年増の仲居は、近藤を見上げて愛想笑ひを浮べて見せ
 た。水色の縮緬に黒で小柳と染め抜いた前垂が、いかにもすつきりして見えた。

浪士には見えす、藩士らしくもなく、さりとして役人とも受取れぬこの一行の身分の判断に、仲居
 は迷つてゐる様子であつた。それだけに用心して、妓を呼べといはれると、「お名さしがをすやろ
 か」と訊いた。

「聞く通り始めてだ。ひとつ三本木自慢の妓を見せてもらひたいもんだな。」

近藤の言葉の尾について、山南が土方を眼縁で指した。

「この人は女嫌ひで、手数が掛つて困るんだ。ちと綺麗なところを並べて、骨を抜いてくれ。」

一同にとつと笑はれて、土方は苦笑した。土方の女に接しないことは、禪僧の如く堅く、隊でも

評判を通り越して、煙たがられてさへるたくらるであつた。

「鴨さんは近頃、一向君達を引張り出さんようだが、どうした風向かな」と仲居が去つた後で近藤がいつた。

「あれ以来」と山南が沖田を顧みた。

清楚な白哲の顔に薄紅が射して、いかにも病的な美しさを見せてゐる沖田は、どうかたといふ風に、笑を含んで小首を傾けた。

「原因があつたのか」と土方が好奇の眼を向けた。

「鴨さんが警戒しとるんだ」と山南は答へた。

「警戒だ」と。

「あれは大坂から歸つた翌晩だつたから、四日かな。僕と沖田が引張り出されて、新見、平山と五人、隊士を十人連れて、暫く留守にしたから、見廻りをやらうと鴨さんがいひ出した。出かけて見たが、別に變つた事もないので、祇園の山絹へ上つてやらかした。相當に飲んだな。山絹を出たのが、九つを過ぎてをつたかな。石段下を真直ぐに、四條の橋まで戻つて來たが、そこで沖田のゐるのにな気がついた。すると後の方で、何か吹鳴る聲を聞いたといふ者があるのだ。一同すぐに引返

して見ると、繩手で沖田が斬合をやつてをる。」

ここで沖田が説明を挿んだ。

「僕は少し飲過ぎたので、皆と離れて、後から歩いてゐたんだ。すると建仁寺へ曲る角の所から、急に飛び出して來た奴があつた。隊の方を見送つてゐたから、隊の提燈を見て、身を潜めた奴に相違ないのだ。胡散だと思つて、何藩だ、と誰何すると、いきなり抜いて來た。居合の出来る奴だ。危なかつたな。何か答へるだらうと思つてゐたところが、返辭の代りに抜討だ。すんでのことに一太刀食ふところだつた。それが癪に觸つたから、みんな寄つて來たが寄ると吹鳴つた。」

「さうだ」と山南は頷いて、「寄るといふから、我れわれは逃路を塞いで、遠巻にしたんだが、何しろ沖田を相當持耐へる奴だ。固唾を吞ませやがつた。沖田のことだから、萬間違ひはあるまいと思つたが、鴨さんも我れわれも、みんな抜いて見物した。多勢來たことを知つて、相手はもう覺悟したんだな。斬つて死んでやらうといふ捨身の構へだ。危いと思つたので、僕は思はず飛出さうとした。その途端相手が必殺の突きを入れた。僕ははッと立竦んだよ。沖田が倒れたんだ。同時に相手が横に泳いで來た。この野郎とみんなが一太刀づゝ浴びせて、沖田の傍へ駆け寄ると、ぬつと立上つて刀を拭つてゐる。怪我はないかといふと、ないといふ。をかしいので倒れてゐる奴を

調べて見ると、何のことはない、沖田が胴輪に捲いでゐたんだ。……沖田でなかつたら、斬つては
るても斬られてゐる。何とも凄かつた。……」

「相手は何者が判らんのか」と藤堂が訊いた。

「後で町役人から聞いたが、土州の豊永伊佐馬といふ者だ。武市派の脱藩者だらう。」

「うむ、武市瑞山以来、桃井道場の秀才は土州人に多いといふからな。隊の提燈を見て避けたとす
ると、或は暗殺一味の奴だつたかも知れんぞ。」

「それで鴨さんの警戒といふのは。」

土方が山南を促した。

「それだよ。鴨さんが歸り途、口を極めて沖田を褒めた。竹刀を見てをると負けるとは思はないが、
眞剣の沖田には勝負がない。自分ばかりではない、誰も駄目だらう。みんな努力で鍛へた腕だが、
沖田のは違つとる。度胸でもなければ腕でもない、天稟の神技といふやつだ。沖田君を敵に廻すと
危いぞ、といつて笑つた。あれ以来鴨さんは、こつちの者を誘はなくなつた。察するに例の大坂の
角力の件以来、事毎に近藤さんの機嫌が悪い。そこで鴨さんも沖田の所謂神技を見てからは、こつ
ちの者を敬遠してをるらしいのだ。」

近藤は黙つて聞いてゐるたが、苦い表情をした。

「山南君、それは君の想像だらう。」

「想像といへば想像ですが、當らずと雖も遠からずといふところでせう。」

「妄りに口にしないがいゝな。疑心暗鬼を生ずだ。そこから局中が亂れないとも限らん。」

この時、迅雷のやうに山々にこだまして、大砲の音が轟き渡つた。はつと緊張した一同の視線は、
期せずして近藤の面に集つた。近藤は音のした方角を睨むやうに眼を上げたきり黙つてゐた。と、
續いてまた一發。……

「たうとう始めたな」と土方が呟いた。

それから酒になつて妓達が來た。酒宴のうちにも砲聲を三度聞いた。

「えらい音どすえな。何どすのやろ。」

きらびやかな襦袢の帯をだらりに結んで、人形のやうに坐つた舞妓は、不安に背えて黒腫ばかり
をくるくる輝かした。

近藤は例の鬚を深めて、舞扇を細い膝へ置いたまゝ外から動靜が見えるほど脅えてゐる舞妓に、
勦るやうにいつた。

「心配するな。何處かの藩が調練をやつとるのだ。」
「さうどすやろか」と、先に來てゐた妓が、納得の行かない表情をした。「夜分でも、大砲のお稽古おしやすのどすやろか。」

「そやつたらえゝけど、ほんでも無茶どすえな。こないに人をびつくりさせはつて。……」

「あて、どうもお稽古にしては、音が近すぎへんかと思ひますえ。あれは近所で撃たはつた音どす。慥かに。……」

妓達は酌も忘れて、一頻り砲聲の噂を始めた。近藤は、影響する處の大きいのを思はずにはゐられなかつた。

そのうちに、風のない空に半鐘が冴えた音を刻み出した。

「火事やわ。」

舞妓が頓狂な聲を擧げた後は、一瞬しんと鎮まつて、規則的な半鐘の流れに心を運ばれた。

やがて半鐘は半鐘を呼び、町の八方の隅々から、慌しく人を呼び立てるやうに鳴り出した。遠く近く、高いは高いながらに、低いは低いながらに、冴えて呼應する音には、自然に成つた音曲の妙味があつた。

「いやゝこと、大砲やら火事やら。……今夜に限つて何どすのやろ。」

「ほんまにけつたいな晩やわ。」

一樣に眉を暗くした妓達が、交々落着かぬ態で沈黙を破つた時、漸く附近にもざわめきが高まつて來た。

「當家の屋根には物干があるか」と土方が仲居に訊いた。

「へえ、おます。」

「ちよつと方角を見て來ます」と土方が近藤にいつた。

「酒の肴に火事見物か。僕も土つて見よう。お前達もどうだ。」

妓達を誘つて近藤が立つと、一座悉く立上つた。仲居が急いで手燭に灯を移さうとした。

「月夜だ、手燭は要るまい」と近藤が制した。

藝者を交へて一同ぞろぞろと屋上へ出た。十三夜の月下の屋根では、あつちこつちの物干に人影が影繪のやうに蠢いて、高く響く割に、意味の聞き取れぬ聲が話合つてゐた。

長い裾をたくしあげた妓達の騒ぎに挟まれながら、賑やかな近藤達の一團が上つて行くと、それと入代るやうに、隣家の物干から二人の妓を連れた武士が、急いで降りて行つたが、その様子は近藤が

月光に透して、ちらりと見ただけだった。誰も火事に氣をとられて、方角を探すのに急であつた。遙か乾の方角に御所の繁みを隔て、薄紅の霧が立騰るやうな明るい部分が見られた。晴れた月夜の空に煙が炎の色を映して、呼吸のやうな火の閃めきが繰返された。

(案の定。——)

男達は一樣にさう思つた。

「あれどすえな。」

「どこら邊どすのやろ。」

妓達は口々に騒ぎ立てたが、男達は黙つてゐた。近藤は井上源三郎の耳に口を寄せて何か囁いた。井上はすぐに降りて行つた。

「大分遠いようだ。風がないから大したことにはなるまい。——では降りるぞ。」

近藤は先に立つて降りはじめた。

三

座敷に戻つて見ると、四人の藝者が五人になつてゐた。

「あ、こゝの旦那はん、どうおしやしたんや知らん。」

舞妓が井上のゐないのに氣がついた。

「おゝちよつと消えた。その代り女の方が、いつの間にか一人増えとるぢやないか。」

近藤が新しい妓を見ていふと、妓は髪をかしけるやうにして近藤を見上げた。

「いつの間で、いけづおいひやすわ。物干で火事見とおいやすと聞いて、わざわざ御挨拶に上つて行きましたやおへんか。旦那はん来いといやした辯に。——」

皎い綺麗な齒並を見せて、無視されてゐた抗議をした。

近藤はその妓に不思議な魅力を感じた。たとへば片田舎の町に、人眼には觸れず、ひとり美を加へ、ひとり成熟して、しかも自らそれを知ることなしに育つたやうな女であつた。

「それは氣附かなかつた。氣がつけば火事に見惚れるより、おまへに見惚れたかも知れんぞ。」

「まアお上手やわ、お黠りやして。——ほんなら御挨拶の仕直し、駒野どす。」くるりと座中へ控へがちの視線を移して「どうぞよろしう。……」

愛嬌を見せてゐる善の眼が、愁訴してゐるやうな感じであつた。

「まだ半鐘が鳴つとるのに、三味線でもあるまいな。とすると……おい、何か面白い遊びはないか。もう酔眼になつてゐる山南が妓達にいつた。

「さうどすえな」と受けた仲居が「かうつと……」と、小首を傾けながら妓達を見廻してゐるうちに、駒野に眼をとめると、ふと思ひついたやうに小膝を叩いた。「なア駒野はん、またあれを持つて参じまへうか。」

「何どすいな姐はん。」

「ほれ、お魚摘み。」

すると駒野はやにはに手を振つた。

「いやいや、そんな行儀の悪いこと出来ませうかいな。」

「何だ。面白いことがあればやらうぢやないか」と近藤が興ありけに、にやにや笑ひながら駒野を促した。

「物はためしどすがな。旦那はん方にも、食つてもらはつたらよろしやおへんか。」

仲居は自分の思ひつきに客の喝采を豫期して、早くも座敷を出て行つた。

「ほんまにいけつやわ。」

駒野がふんとすねて見せるのを、妓達が囁し立てた。

間もなく仲居が運んで来たのは、大きな清水焼の鉢であつた。中には満々と水が張られて、一寸から二寸ほどの小魚が十匹あまり、見るからに氣持よく泳いでゐた。

「これはなんだ。」

「あてとおみやす。」

「川魚だな、鮓か。」

「鯛だらう。」

「いゝえ、琵琶湖名物のひがいですがな。」

仲居を中心に、鉢を覗いて口々に小魚の品評が始つた。

「これをどうするのだ」と山南が訊いた。

「駒野はんが、お食りやすのどすがな。」

「生きたまゝをか。」

「へえ、お上手どすのえ。」

「ほう、それはひとつ、手際を拜見するかな。」

相手が美しい女だけに、男達は妙に生理的な興味を唆られた。

駒野はその場で先鞭をつけるのを拒んでゐたが、毒見だといふことで口説き落されると、たうとう箸をとつた。

「ほんならお毒見、行儀悪おすけど、ごめんやす。」

朱塗の箸が華奢な指に繰られて、暫く清々しい水の面を紅色の觸角のやうに窺つてゐたが、やがてついと水を潜ると、銀色の腹を見せた小魚を摘み上げた。それをそのまま靜かに小皿の醤油に浸して、左手で受けながら軽く唇へ運んだが、間もなく口の中でかりつと噛み切る。快い音がした。食べ終ると駒野は美しく微笑んだ。

「おいしをすわ。食つとおみやす。」

「なる程、これは美味さうだ」山南は感嘆して、「よし、僕が先づ試食をやる。」

武骨な手に箸をかざして、泳いでゐるひがいを狙つたが、一度はしこく逃げられると躍起になつた。呼吸を計つて、えいといひ、ヤツと氣合をかける賑かさに、妓達は手を拍つた。四度目にたうとう捕へた。摘み上げられた小魚は、銀色に輝いて箸の先でびちびち刎ねた。山南はそれを小皿の醤油に漬けたが、忽ち小魚の跳躍に醤油が邊りに飛び散つて、妓達は悲鳴を擧げながら飛び退いた。

漸く口の中へ抛り込みはしたものの、顔中醤油の斑點だつた。山南は懐紙で頬を拭ひながら、口を動かした。

「うむ、これは美味い。」

「は、美味いはいいが、技たるや拙劣極まるではないか。よし、こんどは僕だ。」

土方が箸を持つた。慎重に狙つて首尾よく一度で摘むことには成功したが、水を刎ねかえした上に、醤油の飛沫を撒いたことは、山南同様であつた。大騒ぎをした上で藤堂が代り、原田が代つたが、いづれも同様敗退して冷やかされた。その度に仲居は膳や疊を拭いて廻つた。

引寄せた舞妓の肩に手を廻して、にやにやしてゐた近藤は、沖田の方へ視線をやつた。

「沖田君はどうだ。」

「掴みどころがあるんだな。」

片手を懐中に突込んだまゝ、片頬に微笑を浮べた病劍士は、そこまで見届けてゐたが、矢張り魚に刎ねられた。

「さ、旦那はんの番どつせ。」

舞妓に促されて近藤も箸を取つた。稍暫く靜かに狙つて一匹を摘みあげると、そのまま刎ねない

小魚を差出して見せた。

「どうだ、動くまい。」

にやりと笑つて醬油に浸すと、むしろむしろ食つた。

「旦那はんお上手やわ。魚やかて生きてるのどすさかい、紫を飲ましたら苦しいに違ひおへん。食べるのやつたら、一思ひに食べてやらな可哀さうどすわ。」

駒野はさういつて、一同に前鰯のあたりの摘みどころを教へた。呼吸を窒められた小魚は勿ねなかつた。みんなは交る代る鉢から引上げては食つた。

近藤は少年の日、武州玉川で鰻を擱んで、魚の急所を心得てゐた。——ふと胸の底に川遊びの記憶が懐かしく蘇つた。ひがいを噛み切る時、口中でびちりと剝ねる齒觸りは、川原に圍つた小魚の跳躍を憶ひ起させた。ほろりと苦い新鮮な味には、故郷の川の匂ひがあつた。武蔵野の雑木林、丘陵の起伏、遙かに眺望された富士の雄峰。……

ゆくりなくも料亭の座敷の、陶器の鉢に泳ぐ小魚は、武州多摩の上石原の風物を、まさまざと頭の中に映し出した。豫期せぬ回想であつた。——上石原の百姓の子が、どうして京の料亭にゐるかを、はしなくも一瞬の壓縮の中に回顧させた。……旗本を志した百姓の子は、未だ漸く浪士團の

隊長だ。それも自己の意志通りに全隊を支配することの出来ぬ、一方の隊長に過ぎぬのだ。……芹澤の暴虐を告げる半鐘の音は未だに聞えてゐる。

近藤は同じ百姓の子の土方を見た。それから視線を駒野に移した。ひと思ひに——か、駒野の言葉が反響して、氣持のよいやつだ……とじつと駒野を見詰めた。生きた魚が口中で剝ねる新鮮な魅力が、遊びでない強さを以て、駒野の姿から活々と迫つて来るのを感じた。

明日のひと嵐を豫想させる半鐘の亂打の中で、近藤は靜かに故郷を偲び、女の魅惑に心を委ねることの出来る男であつた。

「局長はんにお眼にかゝりたいお言ひやして、山崎ちうお人がお越しどすけど、こちらのお座敷でございますやろか。」

別な仲居がこんな取次をした。一頻り賑つたひがいが掴みも終つて、座が元の酒宴に還つてゐた。近藤の耳打を受けて物干から姿を消した、井上源三郎が戻つて来る以外、こゝへ来る者はない筈だ。一同は不審さうに幾分緊張の色を見せて近藤の顔を見た。

「通してくれ。」と近藤は事もなげにいつた。

香取流の棒の名手で副長助勤の山崎蒸は、間もなく黙禮して靜かに微笑しながら還入つて來た。

頭と衣服を改めれば、そのまま關西風の町家の若旦那か手代といった感じの、小づくりな色の白い男だった。

「山崎君、現場へ行って来たな。」

近藤からいきなり先手を打たれると、山崎は覺えず坐りかけた膝を宙に浮かせてしまった。見事に足を掬はれた驚きの、一瞬の戸惑ひであつた。

「女達は暫く遠慮して貰はう。」と近藤はいつた。

武士が二人以上の座敷なら、必ず一度は遠慮を命ぜられる慣習には、茶屋料理屋の者も馴れ切つてゐた。それが座敷の勤めの一課目かのやうに、鮮かに颯と引揚げて行つた。

「局長は御存知でしたか。」と、山崎は意外さうな眼をあげた。

「先刻隣の物干から降りて行く姿が、確かに君だつたと思つたのだ。——何處から我れわれを尾けた。」

「實は新徳寺で芹澤局長とお話を聞いて、僕はそつと人数を脱けたのです。それから駕籠で後を尾けて、當家へお遣入りになるのを見届けると、隣りへ上りましたが、暫くすると火事の半鐘です。方角を見ると案の條芹澤局長の出動された方角なので、それからすぐ葭屋町へ駆け着けて、

様子を見てまゐりました。しかし尾けたのを局長に看破られてゐたとすれば、現場の報告も、大したお土産にはなりませんでしたな。」

「いや、大いに土産になる。井上君を現場へ遣つたが未だ戻つて來ないのだ。——どんな様子だつた。」

「何ともひどい騒ぎです。何しろ乾御門へも、中立賣御門へも十丁餘の所ですから、所司代、月番大名、町奉行等が、それぞれ火消人足を連れて出張つて居りますが、消口に當る所は悉く隊の者が固め、近寄ればぶツ放すといつて鐵砲を構へてをります。それで役人も火消人足も手をつかねたまゝ、彌次馬と一緒に、焚火でも圍んでゐるやうな工合に、傍觀してをる始末です。幸ひ風があまりませんから、大事には至るまいと思はれますが、目的の大和屋よりも、先に隣接の町家が焼けはじめたものですから、隊の者は大和屋の土蔵に火の廻るのを待つて、消火を遮つて居る按配です。」

「芹澤さんはどうしてゐる。」

「芹澤局長は、大和屋の前の家の屋根へ上つて、例の鐵扇を振りながら、水一杯でもかけて見る、たゞではおかぬぞと、凄じい劍幕で吹鳴つて居られます。」

「うむ。……」

瞬間、近藤の眼は炎を吐くやうに輝いた。その瞬に、本庄宿の屈辱の夜が、稻妻のやうに、鮮明に蘇つたからであつた。

「未だ燃えてるか。」

「盛んに燃えてをりました。風かないだけに火は延びませんが、そのかはり燃え盡きるまで、燃えるといつた按配の火の手です。何でも最初大和屋の土蔵を狙つて、どんどん焼玉を射ち込んだといふことですが、肝腎の土蔵よりも、他へ火が附いたために、一氣に遣る手筈が狂つた様子です。——道路の真中に立札が打込んであつて、黒山の人がかりがしてをります。」

山崎は懐紙を取出した。

「こゝに寫してまゐりましたが、お聞き下さい。——當家ノ主人ハ大奸物也、諸民ノ困難ヲ厭ハズ利慾ニ耽リ、外國ト交易ナス、大罪人ノ所有物焼拂フベシ、是レ天命ナリ。——」

「それが尻の來た時の言譯だな。」

かういつた時の近藤は、もう動ぜぬ表情に返つて笑つてゐた。
土方以下は意外な山崎の出現の利那から、呆氣にとられ氣味だつたが、近藤との應待を、丁度名優同士の名演技でも見てゐる心持で眺めてゐた。俳優とすれば、修羅の現場を報ずる山崎の臺詞に

は、才能と膽力を併せたすぐれた觀察が閃めいてゐた。大坂浪人で京攝の地理に明るいこと、棒の名手であるといふ特技とが、役附に撰ばれた主な理由であつたが、それ以外に、この町人めいた優男には、特異な才能と落着のあることを、人々ははじめて知つた。更に一同が、この男を好感を以て眺めたのは、今宵の行動が、芹澤派と近藤派の對立を察した上、近藤派に服さうとする意識から出發してゐることを、明らかに表明してゐる點にあつた。

「御苦労だつたな。今夜は一同で飲み明かすんだ。君も一座してやりたまへ」と近藤はいつた。かうして山崎蒸は、その夜の近藤派の、雲隠れの座に加はることになつた。

四

翌々十五日の夕方、黒谷の守護職邸を辭して壬生へ歸る町駕籠の中に、近藤の顔は興奮に蒼さめてゐた。すこし眼が潤んで、非常に呼吸が迫つてゐるのは、唯ならぬ感動の直後であることを語つてゐた。

事實今日ほどの深い感動は、生涯中に屢々あることではあるまい。それは芹澤一派を處斷せよ

といふ内密の命を受けたことによるのではない。芹澤一派を處置するか、分離するかは、松平容保の内命に俟つまでもなく、既に自ら肚裡に決断を促されてゐる免れ難い情勢であつた。そのことではない。

この頃容保は、病に衰へて閉籠りがちであつた。この日も容保は病床にあつたが、召命に應じて参邸した近藤は、いきなり病間へ通された。恐縮してゐると、容保は床上に起直つて枕頭近く近藤を招いた。これまで公用人を通して諸般の指揮を受けてゐた近藤には、破格のことであつた。

容保は寝れて背の伸びた蒼い顔をしてゐたが、それでも廣い額から長く通つた鼻筋には、犯し難い品位と聰明な感じが溢れてゐた。近藤が初めて謁した時の、眼光から受けた剛氣な氣魄は、何故か尋問に委つて見えるものゝ、しかもそれは病のせるでないことが判つた。御慮なされてゐるな、と直感すると、近藤は自然に頭が下つた。

容保は、禁裡近くを騒がした芹澤の亂暴に對して、所司代、月番大名、町奉行等から抗議が來てゐることを靜かに語つて、新選組がこのまゝの有様であるては、守護職の支配から除く他はないが、それに就いて、その方には何か斷案がついてゐるかと思ねた。

「御所勞中、御心配をおかけいたしましたして、申譯がございません。局中法度を侵す不逞行爲ある者は、速かに處断して、償ひを仕ります。」

近藤は恐縮して即座にかう答へたが、答へる瞬間に、彼の最後の肚は決つた。容保はその決断を促すやうに深く頷いた。それから脇息の上に腕をおいて、すこし乗身になりながら、あらためて「近藤」と呼びかけた。

將軍家の親藩であり、江戸にあつては溜の間詰の雄藩として、名實共に聲望高い會津中將が、こんなに近く、こんなに親しげに、自分に言葉をかけてゐるといふことが、近藤には信じ難い氣がして、全身が熱くなつた。自らの位置を自ら疑ふやうに、顔をあげて床上の容保を窺つた。

「この度仰せ出された、大和行幸の儀は承つてをるか。」
友達にでも對するやうな調子で、容保はかういつた。

「はい、攘夷御祈願のため、大和御駐蹕の由に承つてをります。」

「勅書に御親征軍議、神官行幸の文字がある。近藤、これは攘夷に名をかりた、討幕御親征の意だぞ。」

容保は近藤の言葉を待つてゐられないものゝやうに、押被せていつた。

近藤は理解に戸惑つて、容保の顔よりも言葉を讀めた。

「朝廷の御督促に對して、幕府は五月十日を攘夷期限に奉答してある。しかし、實情は攘夷など思ひも寄らず。その間にまる二ヶ月経過した。そこで朝廷におかせられては、御委任を幕府からお引上げになり、幕府へは違勅問罪の師をお差向け遊ばされる運びになつた。ところが近藤、これはすべて長州藩と、長州藩に同意の堂上公卿の畫策より出でたものだ。中川宮、攝家の御慰留があつたにもかゝらず、將軍家が六月はじめ、倉皇と御歸府になつたのも、長州と長州派の、參政寄人の策によつたものだ。かうして朝廷には長州派、堂上公卿の勢力が強く、毛利父子は國表に於て勅を楯に、外船を砲撃して攘夷の實行だと稱してをる。問責すれば、勅を奉じ幕命に應じてをるのだと、逆捻じを喰はせる。しかも長州はこの度の大和行幸を機會に、幕府の違勅を責めて、大義名分を分明にした上、一舉に討幕の師を起さうと謀策してをる。」

容保の眼は、悲憤の潤みを見せてゐた。

「近藤、この大和行幸が實現した。曉には、國內は拾收し難い戦亂に陥るぞ。そればかりではない。外交上の難問題が多い時、それこそ外夷に乗せられて、我國は獨立の面目まで奪はれぬとも限らぬ。それにも拘らず、かういふ勅が發せられるのは、偏に外國の力を計ることの出来ない下層

の、尊攘浪士の支持があるがためだ。參政寄人の腰の強いのも、學習院出仕の、長州派浪士が控へてゐるからだ。」

「御道理……」

近藤は感極つて言葉を呑んだ。納得が行くにつれて、全身が汗ばんで来るやうな公憤を覺えた。同時に話が身邊へ近着いて來ると、自分の職分が沸々たる使命感となつて自覺されずにはゐられなかつた。

「予は洛中守護に任ぜられて以來、浪士には努めて寛容を以て臨んだ。安政戊午の井伊大老の掃蕩策が、却つて時局の窮迫を招いたのを見て、その轍を踏むまいと思つたからだ。しかし今日の浪士は、當時の浪士の如く、おのれの意見を扶植するだけではない。すべて實行を旨とし、そのためには手段を撰ばぬ不逞暴行を敢えてする。しかも予の寛容策を理解せず、却つて會津恐るゝに足らずといたしてをる。予はもう斷じて假藉すべきではないと意を決したぞ。」

容保の烈しい語氣が、熱く頬に觸れるやうに感じて、近藤は思はずはツと頭を下げた。

「暴行には如何なる道理も挫かれる。暴は暴を以て制する他はない。その方一命を捨て、御奉公をしてくれぬか。今日下層浪士の掃蕩を行ふことは、ひとり守護職を扶けるばかりではない。幕府

の窮境を救ひ、將軍家へ御奉公の誠を盡し、同時に朝廷へ盡忠をいたす結果になるのだ。これは或は、現今第一の大役であるかも知れぬ。所司代も奉行も、現に守護職の予に於てさへ、手の届き兼ねてゐる程の大役だ。」

近藤は頭を下けてゐるうちに、感激で眼頭が熱くなつてゐた。その眼をあけてじつと容保を見詰めた。

「身命を賭して、微力をいたします。ですが、大和行幸の儀は……」

容保は、生一本の壯漢を頼もしさうに見やつた。

「成案がある。成るか成らぬか、予もまた身命を賭して、参政寄人長州の謀策を堰いで見る。しかし今日のことは、決して他言はならぬぞ。」

「御信頼には背きません。」

「その方の努力が、今後の予を樂にしてくれることを望んでをるぞ。」

「誓つて御奉公仕ります。」

別間へ下ると款待の酒肴が出たけれど、近藤は何も喉に通らなかつた。一介の浪士が會津中將の枕頭に引見されて、友達のやうに信任されたといふ感激で、暫くは感涙が歇まなかつた。

藩邸を辭して駕籠に揺られながらも、容保の一語々々が蘇つて、近藤の感激は昂つて來るばかりであつた。

近藤は土方に含めて、十六、十七の兩日、芹澤を狙つたが果さなかつた。そして八月十八日の大政變となつた。

文久三年八月十七日の深更、正確には十八日の子の下刻、中川宮の参内に始つて、淺華洞の會津陣から一發の號砲が味爽の天を揺がすまでの二刻の間に、未曾有の革新は成つてゐたのであつた。

大和行幸は御延引の勅諭となつた。参政、寄人の職は廢せられた。會津二藩の聯繫が成立した。そして長州藩は堺町御門の警衛を免ぜられてゐた。在京諸藩の兵は密々に徵せられて警衛に任じ、

九門は固く閉ざされて、勅許なき公卿堂上の参内は一切禁止された。實にこれ程の朝廷改革の事が、深更から拂曉かけて、電光石火的に行はれたのであつた。長州人が自ら稱して、長州人たらざれば人にあらず、と豪語した前夜までの聲威と自負は、正に一朝の夢と化した。

新選組が、會津の公用方野村佐兵衛の急達に接したのは、夜が明けてからであつた。既に曉天の砲聲を聞いて騒ぎ立つてゐた屯所は、御所に急變ありと知つて、半刻經たぬ間に人員を整備し、出勤には移つたものゝ、芹澤以下誰一人何事が起つたかを知る者はなかつた。

近藤だけが、さてはと直感した。ことによれば長藩と一戦しなければなるまい。——近藤は黒谷へ参邸した時の感激を新たに、ひそかに奮ひ起つた。隊士一統武装を命ぜられ、會津藩の合印たる黄櫨まで配給されて、誠の一字を染め抜いた六尺四方眞紅の隊旗を翻した時には、等しく出陣の気分が漲つた。

空は不気味に曇つてゐた。大路は不気味に静り返つてゐた。不安に脅えた審るやうな顔が、大戸を降した町筋に黙つて並んでゐるばかりであつた。二列に並んだ八十餘の隊士は、先頭に近藤、中央に芹澤、殿に新見の三局長に統率され、ひたひたと烏丸通を上つて、蛤門へ向つた。氣壓が低いせるか、しめつばい朝の土の匂ひが強かつた。

堺町門には退京の命を拒む長州兵が屯集して、會津二藩の兵と睨み合つてゐる最中であつた。蛤門へ着くと、三局長は先頭に立つて参入しようとした。

「止めッ。」

殺氣立つた凄じい制止の聲と同時に、突如として穂先を揃へた槍叢が作られた。前面に立塞がつたのは、何れも殿めしい甲冑の武士であつた。これ程に殺氣立つた嚴戒を豫期してゐなかつた近藤と新見とは、あまりに不意に眞槍を眼の先に受けて、覺えずたじろいで後退りをした。

「何藩だ、名乗れッ」と警衛の鎧武者は吹鳴つた。

芹澤だけは、最初に立停つた位置に突立つたまゝでゐた。覺悟をして來た自分よりも、事情を知らぬ芹澤の方が、神色自若としてゐる姿は、近藤を感嘆させた。何を思つたか芹澤は例の大鐵扇を颯と展くと、芒の穂のやうに並んだ數十本の槍先を、ばたばた煽り返す眞似をした。

「引け、引け。われ等は會津侯御直配の新選組。公用方よりの急達によつて、お花畑まで罷り通るのだ。」

「成らん。左様な達しは受けて居らん。」

「黙れ。われ等は御召によつて推参したのだ。通さぬとあれば蹴破つて通るぞ。」

鐵扇を疊んで腹帯に差した芹澤は、右脚を踏み出すと中腰になつて、もう抜討の構へになつてゐる。一言誤れば血を見る他はなかつた。相手はいづれも少し氣を吞まれた形であつた。芹澤の豪膽は遂に功を奏した。一人が不意に槍を引いた。

「壬生浪士の方々ですな。」

「左様、通りますぞ。」

ぐいと身を起した芹澤は、そのまゝ悠々と門前へ這入つて行つた。隊士は續々と芹澤に續いた。

(惜しい男だ)と近藤は思はず溜息を洩らした。

新選組は日中仙洞御所前の警衛を命ぜられ、夜は南門を固めた。

さしものに殺気天を衝いた對峙も、長州兵の退陣と共に、夕暮に至つて砲聲一つ聞かずに終つた。

しかし火のつくやうな堺町御門の緊張が解けたといふだけで、三千近い長州勢は、大佛の無住の

巨利妙法院に籠つてゐた。まだまだ安心はならない。――折から降り出した雨の一夜を、各藩の兵

は勿論、新選組の警衛は不意の襲撃に備へて嚴重を極めた。

京の町は雨に煙つたまゝ夜が明けた。長州勢は既に妙法院を退去し、激派の公卿三條實美以下七

卿の西下の報が傳はつた。

京は吻と吐息した。大勢は定まつて、ひと先づ戦争の危機は去つたが、しかし危険はむしろその

後に残されてゐた。

昨日の榮譽を思つて悲憤遣る方ない硬骨の藩士が、續々と脱走して市中に潜伏した。朝議を左右

する潜勢力であつた尊攘浪士が、怒髪を包んで腕を撫してゐた。會奸、薩賊の語が行はれた。京の

町は暴發を包んで、音なき噴火山のやうな不気味な震動を續けてゐた。守護職の任務は愈々重大で

あつた。

松平肥後守御預浪士新選組、市中晝夜共見廻候様、肥後守殿より被仰付候條、爲心得相達置候様

被仰渡候事

町奉行からこの布告が出て、市民は始めて「壬生浪」の存在位置を知つた。壬生浪が新選組の名

を持つてゐたことを始めて知つた者も多かつた。

公然皇城の地の治安に任じた新選組は、結成以來初めて陽の目に浴した。

総員十隊に分れ、連日連夜市中の八方を隈なく見廻つて歩いた。浪士脱士の潜伏を密告する者が

あつた。すると隊士は容赦なく踏込んで相手を斬つた。街上でも怪しいと睨めば有無を云はさず斬

つた。一方は要心深く避けようと努めてゐる立場を襲はれるのに反して、一方は時の勢を得て得

意の絶頂にあつた。最初から守勢に對する攻勢であつた。おのおの自分の腕が不思議に思へると同

時に、如何なる強敵に對しても負けないといふ、精神的な自信を強めて行つた。従つていづれも、

捕へるよりも斬りたくて仕方がなかつた。

戦ひと名づけてもいゝくらの衝突が、二十三日の夜、三條坂手で行はれた。土方の率ゐる見廻

隊士が、二十餘名の浪士團に襲はれて苦戦に陥つた。報に接した屯所残留の隊士は、疾風の如く馳

せ向つたが、着いた時には既に戦は終つてゐた。折よく山南敬助の率ゐる巡邏隊が通り合せて、

協力したのであつた。
 相手は新選組の跋扈を憎んで、計画的に襲つたものには相違なかつたが、脱走の長州兵が浪士團かは遂に見定めることが出来ず、しかも三分の一は逸走して行衛が知れなかつた。新選組でも數名の手負を出した。

この夜の激闘を最後に、京の騷擾も漸次鎮靜に歸したので、新選組は非常の警備を解き、平時の巡邏に復した。

二十五日、朝廷より金一兩宛を賞賜された新選組は、この度の働きを嘉せられる趣を拜し、光榮に欣喜したが、重ねて會津侯を通じて、幕府から恩賞の沙汰があつた。局長は月手當五十兩、大御番頭取御扱、副長が月手當四十兩、大御番組頭御扱、副長助勤三十兩、大御番組、平隊士が十兩、大御番組並といふ資格と給與で、新選組は今や守護職支配下の、單なる浪士團ではなくなつた。彼等はこれを血の上に築いた地位だと自負して、凱陣の勇士氣取りであつた。
 「近藤君、ひとつ大和出動を願つて見るかな。」
 功名に酔ひ、精力過剰に陥つてゐる芹澤が、かういつて誘ひかけたが、近藤は應じなかつた。

「未だ洛中は空けられますまい。大和といへば目と鼻の間です。そのうち殘黨が忍び込むに相違あ

るまいから、それにも備へなければならず。おそらく願つても、お許しはありますまい。」

前侍從中山忠光を主將とする、藤本鐵石、松本奎堂、吉村寅太郎等の天忠組が、大和行幸に魁けて討幕軍の先驅をなし、五條代官所を襲撃して事を擧げてしまつたが、八月十八日の政變によつて孤立に陥つた。しかし十津川に遁入つて天の川の天嶮に據り、勢ひ猖獗を極めてゐると傳へられたので、紀州、津、彦根、郡山の四藩が追討に向つてゐた。

「かう暇になつては、鉢が腐るな。」

芹澤は一黨を引連れては飲み歩いてゐるが、ぼちぼち茶屋料理屋での狼籍が目立つて來た。彼の精力は生理的に爆發を要求するらしかつた。蛤門その他、芹澤の豪膽と勇猛には教へられる點が多かつた近藤も、惜しい男だが仕方がないと肚を決めてゐた。が、機會がなかつた。内訌を局中に知らせるのは面白くないし、それに相手が相手だけに、慎重な準備も必要であつた。

九月十日の夜、近藤は三本木の小柳にゐた。土方、沖田、原田、永倉の四人が一緒だつた。が、近藤だけは別に離座敷の四疊半で、駒野と逢つてゐた。

（山岡さんは何とお思ひ下さるだらう。——）

治安が回復して來て、地位も得て、落着いた瞬間にふと過去を思ふと、獨り山岡鐵太郎のことは

かりではなく、手繰り寄せるやうに關東の人々が偲ばれた。
 秋の川風を障子で遮つてゐた障子の彼方に、人の足音が聞えた。すると間もなく、「局長」と庭から呼んだのは、山崎蒸の聲だつた。直ぐに駒野が立つて障子を開けた。
 「お越しやす。」

「お邪魔しますな。」

「お、山崎君か。まあ上れ。」

近藤の聲も朗かであつた。

山崎は座敷へ上つた。

「何かあつたか。」

「他でもありませんが、お尋ねの新見さんが、祇園の山の緒に居られます。」

「一人か。」

「一人です。」

「よし。」
 近藤はすぐに立上つた。あれ以來山崎は近藤の股肱となつて、探偵を要することには、一切山崎

が當つてゐた。

「諸君、新見が一人で祇園にゐるさうだ。」

二階の四人の座敷へ這入ると、近藤は立つたまゝでかういつた。四人は笑つて、頷いて立上つた。

「我れわれだけで澤山です。局長はこゝでお待ち下さい。」と土方は近藤を手で制して、「なアお駒さん、近藤さんを置いて行つた方がよからう。」

駒野は睨むやうに笑ひながら、その眼を近藤に移した。

「そろもう、……祇園は鬼門とす。」

「はゝゝ、では局長、直ぐに歸ります。」

土方等は山崎を案内に立てゝ、遊びにでも出掛けるやうに出て行つた。近藤は素直に残つて下へ降りた。四疊半へ歸ると、駒野の美しい顔が蒼ざめてゐた。

「祇園に何かおすの。」

「何でもないさ。」

「そやかて、土方はんの口振りが。……」

「駒野、我れわれには遊んでゐても、役目がある。役目のためには、今こゝで命を落すようなこと

があるかも知れんのだ。お前もその覚悟があつたら、我れわれのすることは何も聞くな。」

「お侍で詰りまへんえな。」と駒野はすねたやうに小首を垂れた。

「詰らんか。」

「詰りまへんとも。」

「詰らん者と、なぜ一緒になつた。」

「そら……理窟やおへんわ。」

駒野は忽ち媚を見せて笑つて、照れ隠しに三味線を引寄せた。近藤が獨酌で飲んでゐる間に、駒野は膝の上で合せるともなく調子を合せてゐるが、何時の間にか爪弾の音が流れた。

「ほう、唄ふのか。」

へ咲いて牡丹といはれるよりも

ちりて櫻といはれたい

「この唄お好きとすやろ。」

近藤は頷いた。

「お好きな筈とすわ。お侍がお作りやしたんどすもん。」

「どこの侍が作つた。」

「こないだの騒動の、長州のお人。」

「長州、長州の誰だ。」

「久坂はんちうお人どすつて。」

「久坂義助か、お前逢つたことがあるのか。」

「いゝえ、あては出たことおへんけど、偉いお人やさうにおすえな。そやけど、なんぼお偉うても、お侍の覚悟いふたら死ぬこととすさかい、やつぱり詰りまへんわ。女やつたら、ちりて櫻といはれるよりも、咲いて牡丹といはれたいと、反對に作りますやろ。それがいつち女の希ひどすもん。」

かう沁々いはれると、近藤は何か惹かれる氣持になつて、いちらしさうに女を見詰めた。近藤の眞意も實はそこにあつたのであらう。死を口にするのは腰間の刀と同様、武士の常識であり習慣であつた。彼の旺盛な精神は死の意氣のかはりに、生の意慾に支配されてゐた。同時に、生を欲する限り、生一本な性格は虚名と空位を潔しとしなかつた。

彼は全我全身を擧げて事に當つた。盡忠も報國も正義も犠牲も、それ等の觀念はすべて、その旺

盛な烈日の太陽の如き生存意欲の後に打ち樹てられたものであつた。如何なる意味に於ても、死の意義が生を超越しようとは、思ひ及ばなかつた。

しかもなほ駒野に對して、おれもお前同様だと、告白出来ないものは何であらうか。武士は命を鴻毛の輕きにおくとはいふ通念のために、見榮を張つてゐるのは、おのづから異つた氣持であらう。土方等が歸つて來たのは、一刻近く經つてからであつた。一同はニヤニヤ薄笑ひを浮べながら、箱屈さうに四疊半の離座敷へ上り込んだ。

「鴨さんも片腕拂がれましたよ。」

相變らずふところ手をしたまゝの沖田がかういつて、冷たい微笑を浮べながらどかりと坐ると、後を土方が引取つた。

「たうとう註腹を切りました。大分未練があつた様子でしたが、非行の證據を擧げて難詰したところ、どうせ法度書の簡條に照らして、斷首と來ると觀念したのでせう。さすがに、なかなか見事なものでした。」

「新見錦山ももう居らんか。……いや御苦勞だつた。」

近藤の眉宇に一縷の哀愁が流れたが、それも一瞬にして消へると、わざと磊落にいひ放つた。

「酒だ。大いに飲まう。」

それから直ぐに一同は酒宴に移つた。

翌日壬生では、局長新見錦、理由不明の居腹と簡單に發表された。

五

近藤における土方の如き新見を失つた芹澤は、事實沖田の言葉通り、片腕を拂がれた寂しさを感じたらしく、數日の間は外へも出ず、平山、平間、野口等の股肱を呼んで、盛んに酒に終始し續けた。新見の死因を臭いとは感じて、それを究明する何等の手掛りも得られなかつた。

「山の緒」では土方等に感されてゐたので、後難を恐れて口を割らず、まつたく不意の間の出來事といふことになつてゐた。しかも近藤等を疑つて見ても、それは單に疑つて見るといふことだけであつて、形は屠腹だが、他殺か自殺か、半信半疑のまゝに過ぎた。が、それだけに大切なものを落したのか、置忘れたのか解らないやうな焦立たしさが、いつまでも芹澤の胸を暗らさなかつた。

酒宴の部屋からは、晝となく夜となく、若い女の嬌聲が聞えて來た。それは非常巡邏當時、芹澤

が眼をつけた四條堀川の太物問屋菱屋の女房お梅であつて、月の初め、途上に狙つて攫つて来てこのかた、引續き芹澤の侍女の如くになつてゐた。近藤はこれを切りに苦々しく思つたが、何とすることも出来なかつた。

新見が死んでから九日目の、十九日夜の常例幹部會には、芹澤も出席しないわけには行かなかつた。集會は島原の角屋で行はれたが、常例の會議のこととて、一夜を要す程の議題があるわけではなく、話の要點は、——長州の勢力が失墜すると共に、尊攘の潜勢力が文字通り地下に潜んで、京は公武一和派の天下になつた。守護職會津侯も肩身が廣からうが、同時に我れわれの肩身も廣い。それにしても、八月十八日の大政變を前に歸府された將軍家に、今日の目出度い情勢を見せたかつた、といふ風なことに落ちて、座はすぐと酒宴に移つた。

四つ過ぎになると、未だ宴酣な最中に、酩酊した芹澤が珍らしく歸ると云つて駕籠を命じた。「近藤君は例によつてお泊りだらうな。僕は失敬するとしよう。」

大きな團體をよるめかせながら、芹澤は駕籠が來ると直ぐに出て行つた。

近藤も沖田も、女嫌ひの土方までが角屋には馴染みがあつて、泊るのが常例であつたから、芹澤の退座を機會に、いづれもきまりへ引揚げ始めた。芹澤の一派も平間重助が立ち、平山五郎が立ち、

野口健司が立つた。

この時には山崎蒸の姿も見えなくなつてゐた。

壬生寺の九つの鐘を聞いた時には、まったく散會の形で、座に残つたのは近藤、土方、山南、沖田、原田きりであつた。五人は女を退けてしまつて、妙に黙りがちに飲んでゐた。そこへ山崎がどこからか獵犬のやうに歸つて來た。

「どんな様子だ。」と土方が訊いた。

「芹澤局長の外に、平間さんと平山さんが屯所へ歸りました。」

「野口は。」

「茗荷屋へ泊り込んだ様子です。——平間さんは一旦輪違屋へ遣入つたので、泊るのかと思つてゐたら、間もなく糸里を連れて屯所へ歸りました。それから桔梗屋へ行つて、平山さんが來て居るか

と訊いて見たら、これもやつぱり小榮を連れて歸つた後でした。」

近藤はほんの束の間思案したが、直ぐに立上つた。

「よし、今夜だ。殺つてしまはう。」

角屋を出ると、時を移すために、半月が西に傾いて暗い路を壬生まで歩いた。途々近藤が黒い頭

巾を被つて顔を覆ふと、後の五人もそれに倣つた。近頃は近藤の注意で、いづれも頭巾を用意してゐた。本營の八木方に這入つたのは四更に近く、風さへ眠つて凄じ程の静謐が邸内を罩めてゐた。六人は庭で刀を抜いた。雨戸をこぢ開けて、戸袋の所から眞ッ先に縁側へ上つたのは沖田であつた。續いて土方。二人は一番奥の芹澤の部屋へ忍んで行つた。

山南と原田とが上つた利那、平山の部屋から障子を開けて出たのは小榮だつた。居間から來る行燈の薄明りに、大きな男が二人突立つてゐるのが、障子に映つた。

眼の覚めきつてゐなかつた小榮は、叫びをあげようとしても、夢の中の驚きのやうに瞬間には聲が出なかつた。矢庭にその口を塞がれたかと思ふと、いきなり耳朶に熱い息が觸れた。

「外へ出る。」

小榮は縁側から突落されたが、恐怖に躰が硬ばつてゐたので、却つて轉ばなかつた。今は聲を立てるところではない、硬ばつたまゝ、がたく顛へて、呼吸が窒りさうだつた。

山南と原田とは、別々に平間と平山の部屋へ這入つた。

山崎は小榮の腕を掴んで「危いからすぐ屋形へ歸れ。」と嘯くと、そのまゝ引張つて行つて木戸から外へ出してやつた。小榮は啞のやうに一言もいはず、本營を出ると素足のまゝ、長襦袢一枚で宙

に釣られた人形のやうに、ひた走りに島原へ走つた。

近藤は植込の繁みに身を寄せて、内部の様子に耳を敏てゐた。

どの部屋からも、肚の底へ傳はつて來る呻きが聞えた。女の叫びがそれに混つた。物の倒れるやうな響きは一番遠い芹澤の部屋らしかつた。更に呻きが斷續した。が、氣合らしいものはひとつも聞えなかつた。

近藤は覆面の中でにやりと笑つた。やがて物音も呻きも森と途絶えて、異様な沈黙の中に、あたりは相變らず深々と静まり返つてゐた。

四人は刀を掲げて、影のやうにひらりひらりと飛び降りて來た。

「みんなやつた、もういゝ。」と呟くやうにいつたのは沖田だつた。

それから打合せの通り、六人は木戸から外へ出るために庭を歩き出した。すると後ろの方で、雨戸の倒れる烈しい音がして、それに加へて何かづしんと弾力のある地響がした。期せずして六人は闇を透して見た。

光は射さないが、まだ月が沈んでゐないと見えて、庭には極めて微かな、冥府めく幽明があつた。雨戸と一緒に轉落したのは芹澤であることが判つた。芹澤の巨體はのめつてぐんと倒れた。見て

みるとまたむくむくと起上つた。が、すぐに這ふやうに斜めに伸びた。

また動き出し、また倒れた。それを繰返しながら、巨軀は母屋の方へ近づいて行つた。呻きはおろか、死のやうな静寂の中に、呼吸らしいものさへ聞えては來なかつた。……

まつたく息ある者の姿ではない。死後にもなほ剩された恐るべき精力が、既に息の絶えた肉體を運んでゐるとしか思はれなかつた。

「呆れた奴だ。まだ動いてやがる。……」

低い聲で沖田が呟いたが、誰も何もいはなかつた。近寄らうとする者もなく、固唾を呑んでこの異様な死後の運動を、薄明に透し見てゐるばかりであつた。

すると、近藤がつかつかと歩み出て行つた。

俯向きして庭を横切つた芹澤は、母屋の雨戸にへばりついた。近藤は黙つて片手降しに背から一刀、袈裟掛けに斬り下げた。抵抗も氣力もない芹澤の巨體は、黙つてくたくたと崩れて行つた。

六人は急いで木戸の外へ出て行つた。

X

X

X

朝になつて局中は鼎の沸くやうな騒ぎになつた。急報に接して近藤達は鳥原から馳せ戻つた。

點検して見ると、第一の部屋に副長助勤の平山五郎が、仰臥したまゝ二刺刃を刺され、自らの血に浸つて行儀よく死んでゐた。

第二は外泊した野口の部屋で無事。第三室の平間重助の部屋は、臥床が血に塗れてゐるにもかゝらず、平間の姿も、一緒に寝てゐたらしい女の姿も見えなかつた。たゞ媚めかしい女の衣類が散らばつてゐるばかりであつた。

原田はひそかに小首を傾けた。随かに平間の吭を二刺、眼を覺ました女を一刀に仕止めたはずだが。……死んだふりをしてゐたか、それとも一旦は氣を失つた後、息を吹返して逃げ出したのか。

(——しまつた、刺客の正體を氣附かれたかも知れない。)

原田は眉を蹙めたが、仕方がなかつた。

新見錦のゐた空室を置いて、芹澤の部屋は血の海だつた。お梅が背中に一刀を浴び、更に一刀を、丁度斷首の刑を受けたやうに、頸は皮一枚でつながつてゐた。

倒れてゐる屏風に刀痕が無數に残つてゐた。芹澤は泥酔して眠つてゐた上へ屏風を被せられて、その上から滅多突きにやられた後、庭へ出たのであらう。が、さすがに手には脇差を握つてゐた。牀には無數の刺傷があり、頸にも小鬚にも裂傷があつて、背中には見事な深い一線が、斜めに割り

つけられてゐた。

かくして一代の梟雄も、上洛以來僅かに半年を以て、兇刃に殞れるところとなつた。

局中へは、熟睡中を賊刃に斃れたと發表され、守護職へも同様の理由が届けられた。お梅の遺骸は即日菱屋へ下けられ、局中では新選組創設の功勞者に對する禮を以て、芹澤と平山の遺骸を安置し、總員で通夜を行つた。

翌日の葬儀も鄭重を極めたもので、盛大に壬生の地藏寺内に埋葬された。

六

新選組は今やまつたく、近藤と試衛館派の手中に落ちた。幹部の編成が更められて、近藤が従前通り局長、山南が推されて總長に就任し、副長は土方一人になつて、山崎蒸が従來の助勤に國事探偵方を兼任した。

平間重助と輪違屋の糸里はその後杏として行衛が知れず、唯一人残つた芹澤派の野口健司は、あまり本營には姿を見せず、分營を廻り歩いて憂鬱な顔をしてゐた。

九月下旬の或午下り、近藤と土方が縁先で日向ぼっこをしてゐる前に、佐伯亦三郎といふ隊士が佇つてゐた。少し隔つた所に山崎が腰をかけてゐた。他の幹部連中は、天氣が良いので外へ出拂つてしまひ、本營は閑散な秋の眞晝だつた。

主として佐伯を相手に話してゐるのは土方であつた。近藤は黙つて、顎の下に刺り残した一二本の髯を撫でてゐた。

「すると、久坂も桂も來てゐるといふんだな。」

「表向き藩邸には、留守居その他の者數人が残つてゐるといふ、御沙汰通りの謹慎を装つてをりますが、事實は桂、久坂の外に、佐々木、寺島などをりますし、頻りに藩邸へ出入りしてゐる者もあつて、相當の人數に達してゐる様子でした。」

「君が行つたのは何日だ。」

「一昨日です。」

「さう續々と入京してゐるところを見ると、何か魂膽があるに相違ないが、それらしい手掛りは掴めなかつたか。」

「何しろ桂や久坂の在邸さへ、嚴秘にしてゐる程ですから、それを嗅ぎ出すだけがやつとでした。」

近藤が頷いて應揚に口を挿んだ。

「御苦勞だつた。今日は骨休めに行つて来るがいよ。——土方君、慰勞費を出してやりたまへ。」

土方はすぐに立つて、部屋から金一封を持って来た。これは會計方を通さずに、直接局長の手許から出る、特別功勞賞ともいふべきものであつた。佐伯は大喜びで出て行つた。

佐伯亦三郎はこの七月、新選組の大坂出張の折入隊した男だが、それまでは長州を脱藩後大坂を浪々してゐた。これも風雲を指す流行脱藩者の一人で、確たる思想的根據があつて自由を欲したのではなく、従つて入隊後は組の走狗となり、長州藩邸に出入りして、自藩の悲境を他所に、舊同藩士の動勢を探索するといふ、國事探偵方山崎蒸の配下に屬してゐた。

「この分では、長州系の諸國の浪人も、相當入込んでゐるでせうな。」と土方が近藤にいつた。

「巡邏だけではいかん。餘り入込まないうちに洗つてみよう。山崎君、ひとつ手厳しく浪人改めをやつてみてくれんか。」

「承知しました。それにしても、一ヶ月経つや経たずで、もう潜入して來るとは呆れたやつ等ですな。」

こんな話の中へ、新徳寺に詰めてゐる隊士が二人這入つて來て、入隊志願者があるといふことを

告げた。門前に待つてゐるといふのですぐに通された。志願者は四人、御倉伊勢武、荒木田左馬之

亮、越後三郎の三人が京都浪人、松井龍三郎といふのだけが宇都宮脱藩と名告つた。主として御倉

伊勢武が土方に應答した。

「我れわれは従來、長藩關係の勤王黨に加盟してをりましたが、黨の過激論と衝突して、脱盟したものです。以來先月十八日の政變を見て、我れわれの先見を些か自負してをりますが、今日歸屬するところを持ちません。新選組は會津侯に屬して、勤王の事に盡粹されると聞いてをりますが、我れわれも事局に添つて、溫和に勤王の實を擧げたいと望み、相談の上推參 仕りました。」

「なる程。——入隊志願の方々の既往は、詳しく伺はないことにしてをりますが、巡察に任じてをる立場から、あなたの方の舊盟友を、殺傷しなければならん場合があるかも知れん。御承知でせうな。」
「情に於て忍びない場合もありませうが、入隊をお許し下されば隊規なり、立場に服して、獻身するつもりでをります。」

御倉は豫め質問を心得て、それに對する答へを準備して來たやうに明快に答へた。

土方はちよいと皮肉な微笑を浮べた。

「隊規は居存知ですかな。」

「まだ拜見してをりません。」

「山崎君、局長の部屋にあるのを。」

山崎は直ぐに立つて、近藤の部屋から大きな美濃紙の巻いたのを持出して来て、縁側に展げた。四人は立つたまゝ暫く眼を移してゐたが、御倉が微笑んだ。

「罰則は一切切腹と断首ですな。」

「左様、嚴酷に過ぎるやうですが、隊士はそれ自體、生きた隊規を組織して居るのですから、その意味で罰則の適用されることは有り得ないわけです。しかし一旦入隊されると、理由の如何を問はず、脱退は切腹或は断首といふことになりますから、入隊以前に充分肚を決めて頂きたい。」

「我れわれは既に意を決してをります。隊規の嚴酷は寧ろ望むところで、今更躊躇する心は毛頭ありません。」

「では、しかと御承知ですな。」

念を押した上で、土方は眼顔で近藤に語つた。

「よろしい、入隊して頂かう。しかし正式に守護職へ届けるには、一應隊務上の功勞を俟つのが規則であるから、それまでは假隊士として山崎君の手に屬し、國事探偵方を勤めて貰ふことにしよう。」

「山崎君、君の方で萬事の指圖を頼む。」

承知の旨を黙禮で答へた山崎は、四人に向つて、町家の若旦那めいた顔に、底氣味悪い微笑を見せた。

「従來の關係を活用して、功を樹て貰ふんですな。」

改めて挨拶をする四人を連れて、やがて山崎は本營を出て行つた。その後で、近藤と土方は顔を見交して微笑したが、別段何の話もしなかつた。

それから一ヶ月後、佐伯亦三郎の慘殺事件が起つた。前日まで何事もなく、山崎と探索の打合せをしてゐたのが、夜に入つて姿が見えなくなつたのであつた。

國事探偵方配下の隊士は、門限に差構えがなかつたから、無届外泊が自由になつてゐたので、山崎は別段氣にも留めてゐなかつたが、朝になると、北野天満宮に近い千本北野の原に、佐伯は眞ッ裸の慘死體となつて現れた。

下手人を突止める、何等の物的證據は得られなかつた。が、前夜島原の角屋へ、長藩の久坂義助が遊びに来てゐたところへ、佐伯が長州藩士に伴はれて來ると、間もなく三人で出て行つたといふことが判つた。

山崎からこれだけの報告を受けた近藤は、いつになく苦り切つて、黙つて眼を据ゑた。

「久坂が……」と山崎にも聞えぬ程低く口の裡で呟いた。どんな大事にも例の醫を深めてにやりと笑ひ、笑ひの中から戦慄するやうな決断を洩らす近藤としては、珍らしく憂鬱な表情であつた。佐伯を惜しんだからではない。むしろ佐伯のかうなる運命の必然は、佐伯自身よりも近藤の方がよく知つてゐた。

それよりも近藤を憂鬱にしたのは久坂の名であつた。三本木で、駒野から久坂が作つた唄を聞いた時の氣持が、近藤の心に蘇つてゐた。新選組の存在が政治的威力を加へて來るにつれ、且また時局認識の必要が、必然的に要求されて來るにつれて、近藤は自己の無學が秘かに憂鬱だつた。その憂鬱の前に、ひらりと舞ふ花薺の明るさを見せて、久坂の傑物たることを讀へる噂が折々耳に觸れた。筑前の眞木和泉、平野次郎、肥後の宮部鼎藏、轟武兵衛等、また同じ長州の高杉晋作、桂小五郎等、反對派の傑物の噂は久坂のみに限らなかつたが、何故か久坂の名のみが近藤の心に反撥を唆つた。

單に學問と武力が看板のやうな志士と稱する人間には、人物の大小に拘らず、十把一からけに憎惡を感じこそすれ、一々名を聞いて敵愾心を覺えるやうなことはなかつた。が、久坂だけは反對派

としてよりも、一個人として、變に近藤の精神を壓迫する存在であつた。その理由が近藤にはよく解らなかつたし、自己が壓迫を感じてゐると思ひたくなかつた。それにもかゝはらず、風流人たることに於て、久坂の名は時に近藤に自ら豪遊の資格を疑はしめ、死の意義に徹した輕妙な微笑で、足許を眺められてゐるやうな思ひをさせた。

その久坂が、謂はゞ新選組の本據にも等しい角屋へ現れて、しかも佐伯を拉し去つた上、始末をつけてしまつたのだから、近藤は事件の後に、捕へどころのない風が渡つてゐるやうな感じがすると同時に、その風に乗つて、久坂の行ひ澄した冷笑が流れて來るやうな氣がしてならなかつた。

「局長、こつちでもやりませう。」

山崎は煽られたのと媚びるのと、二重の感情を露骨に見せた。

黙つて近藤は山崎を見た。

「證據は上つてをります。この間四人が揃つて、大原三位卿の邸へ這入つたところを握りました。」

山崎の意氣込みにもかゝはらず、近藤は無感動に答へた。

「沖田がゐるだらう。相談したまへ。」

山崎は佐伯をやられた腹癢せをしたかつたので、沖田の部屋へ飛んで行つた。そこには助勤の齋

藤一、調役並監察の林信太郎の外に、永倉、藤堂、原田、井上などが集まって、賑かに話込んでるが、山崎の言葉を聞くと一齊に立上つた。

「行つてヤツつけよう。」

山崎が近藤の部屋へ報告に来たのは、それから一刻の後であつた。近藤は濃茶を飲みながら、山崎の報告を聞いた。

「局長、ヤツつけて来ました。御倉と荒木田は、廻り髪結に月代を剃らせてゐるところを、永倉、齋藤、林の三人でやりました。が、残念ながら隣りに居つた越後と松井は、沖田さんと藤堂さんが踏込んだ途端に、窓を破つて逃げました。」

「なんだ、逃がしたのか。」

「追へば捕まつたでせうが、沖田さんが追ふ程の奴ぢやない、といつたので止めました。その代り以前から、どうも臭いと思つてゐた楠小十郎と松永主計が、案の條顔色をかへて逃げようとしたところを、楠の方は原田さんが引捕へました。松永には、咄嗟に井上さんと僕が一太刀浴せましたが、間が延びて、着物の背を割いただけで取逃がしてしまひました。——しかし逃がしておくのも手でせう。これで尊攘派が、迂濶に隊へ入り込まなくなりませう。」

「うむ。」

「早速楠を引出して、お調べになりますか。」

「調べることもあるまい。誰かまだ真剣を使つたことのない者に斬らせたまへ。」

この事件は局中を縮み上らせた。芹澤の暗殺を臭いと思ふ者が無いではなかつたが、白晝屯所内に於て、かくも堂々と處断が行はれては、愈々隊規が空文でないことが證明されたのだ。

芹澤派唯一の残存者野口健司が、同じく屯營の前川方で原田左之助の槍に斃れたのも、それから間もないことであつた。秘かに御倉達四人に通謀して、隊の機密を外部へ洩らしてゐたといふのが理由であつた。局中は益々緊張の度を増した。

それに加へて、深夜土方に指揮された幹部組が、突如真剣真槍を揮つて、隊士達の寝込みを急襲することがあつた。局中の心身を鍛錬するために、土方の立案は斯くの如く峻烈を極めた。

しかし近藤は、御倉達四名に最初入隊を許した時の意圖通り、充分四人を利用して、肅正防禦の實を擧げたにもかゝらず、果してこれで久坂に酬ひたであらうかと考へると、何か納まらない一抹の不快を感じずにはゐられなかつた。

祇園囃子

一

長藩勢力の敗退後、翌文久四年正月の將軍再度の入洛は、公武一和の頂點を示すものであつた。

家茂に對する朝廷の御待遇は極めて厚く、改めて諸政御委任の優渥な勅を賜り、且つ右大臣に任ぜられ、從一位に推叙せられた。依然たる攘夷の毅慮が難關といへば難關であつたが、朝幕關係は圓滿に進展して、君臣一如の實を擧げるまでに運び、しかも政務參與の有力諸侯は、悉く開港の止むなき情勢を察知してゐる開國論者であつた。即ち後見職一橋慶喜、越前中將、會津中將の兩親藩、土佐侍從（容堂）伊達前侍從（宗城）島津少將（久光）等と國事を議して、難局打開の方策を見出すには絶好の條件に恵まれてゐた。

然るに幕府の誤算は、この唯一無二の公武一和状態を、自ら崩壊させる結果となつた。誤算は朝幕關係の好調に甘えたところに端を發してゐた。參與諸侯の勢力が幕閣を壓する有様を見て、幕府は何よりもこの機會に失墜した權威を、挽回しなければならぬといふ體面論に捉はれた。

目指すは藩州であつた。長州に取つて代つた薩州の勢力は日に強く、その開國論も漸く高調にあつた。幕府は嘗て長州が、朝廷に攘夷論を入説した折、實行不能を知悉しながら、賛意を表して苦盃を嘗めてゐる。今また薩州の開國論に無條件に同意して、その都度外様雄藩の意見に左右される弱體振りを、曝露するのを恥辱とした。そこで無謀にも鎖港攘夷説を以て會議に臨み、朝旨を奉ずると主張した。諸雄藩の救ひの手を振り放つて、強引に廟堂の主權者たらうとしたのであつた。

しかもこの苦肉の策は見事に失敗した。諸侯は幕府に愛想を盡かし、二月廿五日山内容堂が暇を賜つて歸國したのを最初に、三月から四月にかけて諸侯は悉く京都を退去してしまつた。幕府は體面保持と權威誇示を焦つて、結局諸侯から離縁狀を叩きつけられたのに等しい醜體を曝すことになつたばかりでなく、當時朝廷の黒幕であつた薩州が、幕府の尊大振りに露骨な反感を示しはじめた。

折も折、薩藩の開港溫和派の主領たる中山三左衛門が急逝し、實權が西郷吉之助等急進派の手に移るに及んで、幕府への反感は單に反感たるに止まらず、秘かに倒幕論となり、昨日の政敵たる長

藩と幕府の必要さへ意識しはじめた。たゞ時機未だいたらず。遠望を抱いて形勢觀望の態度を
持してゐるが、幕府の政策に對するよそよそしさは蔽ふべくもなかつた。

この間、長藩の七卿並に自藩の冤を提訴せんとする運動は熾烈を極め、また藩士並に尊攘浪士
の形勢挽回を目指す暗中飛躍は猛烈を極めた。水戸、因州、備前の三藩は長藩への同情的態度を明
らかにし、朝廷内にも同情の聲は汪然と高まつて、勸勤を蒙る身とはいへ、長藩の隠然たる聲望は
侮り難いものがあり、有力諸侯の支持を失つた幕府としては、迂濶に手出しがならなかつた。

家茂の在京が無意味となつて來た折から、元治と改元された四月、水戸浪士の筑波擧兵が傳はり、
將軍の不在中藤元の關東に騒がれた幕府は、懸案たる長州問責の師のことも一時抛棄の己むなきに
至つて、ひたすら將軍の東歸を急いだ。家茂は五月朔日参内して暇を賜り、倉皇として京都を去つ
た。

かくて政局の數ヶ月は、數ヶ年に相當する複雑な推移を見せてゐたが、壬生に在つた近藤勇は憂
鬱でならなかつた。最初の好調にも似ず、參與會議は崩壊し、征長の師は有耶無耶に延期されて、
筑波擧兵の報を機會に、逃げるやうに去つて行く將軍を見送ると、近藤は地太ん駄踏んで口惜しが
つた。

が、近藤の憂鬱も焦慮も、事局の展開が幕府の運命に如何に作用するかを、明快に見通してこ
とではない。局面の事態に就いて、いろ／＼な疑問は必然的に起つて來るが、自らそれに解答し得
る材料を缺いてゐては、判斷の下しようがなかつた。謂はゞ近藤の憂鬱と焦慮は、頰冠りをされた
猫の足搔きであつた。

稀れには事局を憂へた隊士が、本營の庭に立つこともないではなかつた。

「局長、鎖港問題が尻切蜻蛉で終つたやうですが、これでどういふ結果になるのでせうか。」

答へれば、曲りなりにも一家の意見が必要だ。が、土方は時局問題に就いては、近藤に口を開か
せなかつた。

「安政以來の大問題だ。濫りに我れわれの口にすべきことではない。殊に局中から出た時局に對
する意見が、斯う斯うだといふふうには困る。巡邏の折または屯所に於ても、朋輩同士で
時事を語ることは控へて貰ひたい。それより大和以來、但馬生野といひ、今度の筑波といひ、過激
派の行動は暗殺から團結擧兵に移つて來たやうだ。この傾向がそのまゝ洛中へ持込まれないとも限
らない。君等は専心、その方の警戒に意を用ひて貰ひたい。殊に今度は、見廻組といふ競争相手が
あるんだ。洛中警備に後れを取つては新選組の耻だぞ。」

土方はまづ近藤を救つておいて、それから策を獻するが常であつた。
「局長、かういふ折には局中の者に、物を考へる餘猶を興へてはよくありません。事態が複雑であればあるだけ、どんな淺はかな考へを起して、動搖せぬとも限りません。ちと過激に隊士を動かすべきですな。」

臨機應變の辯舌と器略とは、土方をして、近藤の世話女房たらしめすにはおかなかつた。殊に近藤の沈黙の威嚴を護るために、影の形に添ふが如き存在たらしめすにはおかなかつた。

見廻組に對する新選組の面目を名として、局中の武道錬磨と、警戒巡邏とは苛辣を極めた。文字通り隊士には、物を考へる寸暇もなかつた。

京都見廻組は、江戸の旗本御家人の二男三男から募られた、劍道達人者によつて編成されてゐた。四百人の定員豫定が、二百人にしか満たないまゝで着京して、不足人員の召抱えを、取締役蒔田相模守から、會津藩を通して壬生へ申込んで來た。希望者をといふ名目であつたが、たかの知れた浪士團であるから、見廻組へ包含してしまへといふ肚であつたかも知れない。が、新選組では隊規と面目にかけて、きつぱり加入を斷つてしまつた。

そこに功を争ふ嫉視反目が孕胎した。この意地と面目の犠牲になるのが、尊攘派の志士達であつた。更に馬鹿を見るのは、志士だと感違ひされて瘡される犠牲者達であつた。

尤も、さうした誤りのあるのも無理ではなかつた。幕府は長藩の暗躍に備へ、官家寺院に對しては、不逞浪士の潜伏を禁する旨を沙汰し、諸藩へは公用なき藩士の滞京差留めを、命ずるといふ要心振りであつた。その結果、所屬所用曖昧の武士は悉く過激派の不逞浪士だといふことになつた。

幕府の嚴戒はそれのみに止まらず、洛中警備に屋上屋を架して、三層のものにしてゐた。即ち先に見職を辭した一橋中納言慶喜を、守護職の上に置いて禁裡御守衛總督とし、所司代を交迭して稻葉長門守を免じ、會津容保の實弟松平越中守定敬を任命した。兄弟相並んで洛中の治安に任ずるといふ緊張を見せた。

總督の兵八百人、一橋家の槍隊百人、守護職の兵六十人、所司代の兵三十人、それに見廻組、新選組が加はつてゐるのであるから、實に洛中は水も洩らさぬ嚴戒振りどころか、前後左右、どちらを向いても、巡邏兵に額をぶつつけるばかりの有様であつた。

しかも尙、佐幕派公卿邸への投文があり、落首があり、流言を放つ者が相次ぐ有様。——五月二十二日には會津家の臣、松田鼎が浪士の天誅に遇つて、首を大佛前に晒され、二十七日には中川官

家の臣、高橋健之丞が大坂本願寺前で暗殺された。浪士の暗躍は呆れるよりも不思議であつた。「をかしい、土方君、どう思ふ。」

躍起になつた守護職からの逮捕令に、全身脂汗を感じる思ひで、さすがの近藤も首を傾けた。

「浮浪の浪士ではないかも知れませんが、藩邸に潜んでをるやつ等の仕業でせう。長州か土州か、土州も大和の吉村以来、脱藩者が急増してをるといふ噂ですし、長州落の七卿に随従してをる、僕と同姓の土方楠左衛門が、土州脱藩者の糸を曳いてをりますから。……それに留守居が黙許の形で、脱藩者を藩邸に匿ふ様子があつて、なかなか油断がなりません。」

すると山崎が口を挿んだ。近頃は山崎を加へた三人で、密議を凝らすことが多かつた。

「副長、その他に大坂から潜入して来る者と、變装して市中に潜伏してゐる者とが考へられます。大坂は京に比較して取締が手緩い。そこをつけ込んで、大坂を本據に策謀しては洛中に潜入し、仕事をすると颯と引上げてしまふ。これが一つ。また洛中に潜伏してゐる者は、全然風態を變へて、我れわれが擦れ違つても、判らぬといふ手を用ひる、この二つです。——僕はこちらも變装の手を用ひて、彼等の變装に對應して見ようと思ひますが、大坂の方を何とか抑へないことには。……」
山崎の提案は即座に近藤を動かした。

「よろしい、大坂の手薄なことは、豫て考へてゐたことだ。山南君に一隊を連れて、出張して貰ふことにしよう。それから洛中の方は、御苦勞だが山崎君に一骨折つて貰はう。」

山崎は満足さうに頷いた。

「同時に局中からの巡邏は、少し派手に遣つて頂きますせう。下層へもぐつた僕等が感附かれないやう、注意を表面に奪つて、掩護して頂くのです。」

翌日からの巡邏には、近藤自ら出馬した。遅しい白馬に跨り、例の制服の羽織を一着に及んで、抜身の槍を携へた隊士十人近くを従へ、悠然と行く姿は、威風あたりを拂つて、まことに堂々たる風采であつた。

五月末、壬生の屯所から姿を隠した山崎蒸が、大坂の船宿に滞在してゐるといふ報を寄せた時は、近藤も土方もこの緊迫してゐる折に、洛中を離れて何をするつもりだらうと審つた。が、その次の報では、山崎は既に三條小橋際にある旅館池田屋惣兵衛方に滞在してゐた。

祇園祭が近いので、何處の宿でも滞在客が溢れてゐた。山崎はかねて池田屋に眼をつけてゐたが、立込んでゐるのを口實に断はられるのを避けるため、豫め大坂で賣藥商人に變装すると、滞在宿から京の池田屋へ紹介状をつけさせた。取引宿の常客であるといふので、池田屋でも断り兼ねて

下座敷の表の間へ泊めた。山崎は薬問屋から薬種を仕入れて來たり、算盤を弾いたりして、頻りに商賈の取引の様を見せ、帳場の信用を買つて秘かに出入する者の様子を窺つてゐると、如何にも不審な點が數々眼に停つた。が、なまじ手出しをする場合ではないと考へて、暫く成行を見守ることに肚を極めてゐた。

これらの情報を屯所へ齎すのは、山崎配下の探偵方に從事してゐる隊士や、守護職の足輕などであつて、深夜本營の裏木戸からそつと忍んで來ては、詳細を報告した。いづれも屑屋、乞食の姿に變装してゐる。山崎が書面を丸めて、淡紙の如くに表へ投捨てるのを拾つて來るのであつた。

(なかなかやるな)と、近藤と土方は頼もしさうな微笑を交はした。

その山崎が、六月四日夜の五つ過ぎ、屯所を出て以來始めて本營へ姿を現はした。裏木戸から忍んで來た山崎の様子は、どう見ても商家の手代か、小商人にしか見えなかつた。縞の上衣に博多の帯、白足袋に小腰を屈めて、揉み手をしながら這入つて來るのを見ると、蚊遣りを焚いて縁先で涼を入れてゐた近藤、土方、沖田の三人は、はじめ誰だかちよつと見當がつかなかつた。が、近寄つて座敷の明りに照らされた、どうだといふ風な山崎の微笑を見ると、沖田が突然笑ひ出した。

「ほう、似合ふなア山崎、一杯喰つたよ。」

山崎は稍得意の面持であつたが、すぐ微笑を納めた。

「局長、大變な奴がをります。」

さういつて、山崎が促すやうに先に座敷へ上ると、三人も續いて中へ這入つた。

「宮部鼎藏がをります。」

「なに、宮部が。——」

鷄鶴返しに土方が唇を動かすと、近藤と沖田の眉もきりツと緊つた。

「宮部が商家の主人らしい男と一緒に、池田屋へやつて來て、誰かをたづねる風でしたが、相手がゐなかつたと見えて、また一緒に歸つて行きました。何處にゐるのだから、その商人らしいのが何者だか、こいつは見のがせぬと思つて後を尾けますと、四條寺町の、古道具と馬具を賣る榊屋喜右衛門といふ見世へ這入りました。相當な構の家で、奥が深く、奉公人がかなりゐる様子ですが、臭いと思ふとどうも臭い。宮部の連れはその家の主人で、連立つて來て連立つて歸つたところを見ると、宮部はそこに潜んでゐるのではないかと目星をつけたですが……」

「よし、僕が行かう。」

氣早にいつて、沖田が眼を輝かした。

「待て待て。夜はヘマをやると逃げられる。」
土方が制した。

「では夜明けにするか。寝込みを踏込めばふん縛れるだらう。」

「いや相手が宮部だ。よほど慮を衝かないことには、肚を斬られてしまふ。」

近藤は黙つて聞いてゐた。

山崎が土方を見上げた。

「副長、見えたところ宮部は大物ですが、或は榊屋の方が、もつと大物かも知れません。この場合はまづ榊屋を狙つて、宮部が逃げたら逃げたで、一應捨てゝ見てはどうでせう。二人で池田屋へ来たところをみると、池田屋にも誰かゝ泊つてゐる。それに聯絡があるとなれば、他にも綱が引けるに相違ない。榊屋は、町の真中に家を構へて、商賈をやつてる點から見ても、あの店が何かの聯絡場所に利用されてゐることは明らかです。榊屋を洗へば、或は根こそぎ手繰れはしないかとも思ひます。」

山崎の感に、誰よりも信を置いてゐるのは近藤であつた。

「よし、明け方榊屋へ手入れだ。」

これで決つた。山崎は急いで池田屋へ引返した。

それから四刻の後、即ち六月五日の拂曉、沖田總司、永倉新八、原田左之助は、各組の聯合隊士二十名を引率して、急湍の如く榊屋喜右衛門方を襲撃した。

不意打の急襲にもかゝはらず、驚くべき榊屋の警戒網は強く、僅かに宮部の僕と、當の喜右衛門とを捕縛しただけで、他は下男下女に至るまで、悉く逃げ去つてしまつた。しかも喜右衛門は急を知りながら、止まつて書類を焼き捨てゝゐたために捕へられたのであつた。

土蔵の中の山のやうな武器彈藥、志士間の多數の往復文書を押収した時には、沖田は山崎の炯眼に今更の如く感嘆した。

屯所では、直ちに押収文書を仔細に點検して見たが、何等具體的な計畫らしいものを發見するに至らなかつた。それで、何のための武器彈藥の貯藏かを吐かせようとして、喜右衛門を拷問にかけた。

拷問の場所新徳寺内の道場へ、近藤も立合つたが、背中の皮が破れて、毆る竹刀が血まみれになつても、喜右衛門は頑として口を割らなかつた。

近藤は業を煮やして、一先づ本營へ引揚けた。土方は残つて、根氣よく自身汗みづくになりながらも、執拗な拷問を續けた。腹を立てると、横合からすぐに斬つてしまふ短氣な連中は寄せつけなかつた。朝から曇つて、息苦しい程蒸暑い日であつたが、喜右衛門は地獄繪の人間のやうな姿になつて、拷問者の勞苦に沈黙の冷笑を酬ひてゐた。

九時半頃、汗を拭き拭き土方は本營へ歸つて來た。

「しぶとい奴です。漸く實名を吐きました。」

「何者だ。」

「古高俊太郎です。」

「ほう、安政以來の古顔ではないか。」

「拷問して見て、益々相當な奴だと思ひましたが、これ程の奴とは思ひませんでした。尊攘派の先輩ですから、浪人共の温床になつてゐたに相違ありません。——山崎はさすがに好いところを睨みましたよ。」

「何か吐いたか。」

「いや、これからがひと骨です。名告つておいて、それならどうしたと嘯いてをります。もう何度も陥つてをるのですが、息を吹返す度に氣力を取戻してをります。根競べですよ。相手は古道具屋ですから、見世先で骨董を漁るつもりで、氣永にやつて見ませう。はゝゝ。」

土方は畫食を濟まして、また道場へ行つた。

古高俊太郎正順といへば、現役的盛名こそ宮部鼎藏等の後にあるが、嘗て毘沙門堂門跡に仕へた江州坂田の浪士で、安政大獄の大立物たる梅田源次郎等と親交のあつた、勤王倒幕派の先輩として、隠然志士間に重きをなしてゐた。今度こそ過激浪士を、根こそぎ洗へるかも知れないと、近藤は拷問の結果を期待した。

雲の上で燃えてゐる陽が、地面を釜底のやうに蒸し上げる七つ時となつた。土方はがっかりしたやうな顔をして、再び本營へ戻つて來た。

「どうも骨を折らせやがる。背中の肉がべとべと竹刀に附いて、上つて來るのですが、それでも呻くだけで無言の行です。」

さすがの土方も餘程手古摺つたとみえて、井戸端へ行つて息繼ぎの水を飲み、更に體にも浴びた。

そして居間で下帯などを取換へて、近藤の傍へ来て休んでゐると、急に隊士の一人が駈込んで来た。「副長、息を吹返して頻りに殺せと申してをります。」

「さうか。大分音をあげて来たな。よし、もう一息だ。」

土方は悪鬼のやうな笑ひを浮べた。

「では道場の梁へ吊しあげて、五寸釘を逆さに足の甲へ通しておけ。それに百目蠟燭を立て、火を點けるんだ。」

目的よりも意地の方が強くなつてゐる土方を、近藤は黙つてにやにや笑ひながら見てゐた。土方は新手の折檻を命じてから、ゆつくり茶を飲んで、また道場へ出掛けて行つた。

血相かへた土方が、近藤のところへ飛んで歸つたのは、暮六つが鳴つてゐる最中であつた。

「局長、一大事です。この二十日前後を期して、京都顛覆を圖るといふ密謀が擧りました。」

さすがの土方も、ひどく興奮してゐた。

「自白したのか。」

「素直な自白ではありませんが、苦しさの餘り、息も絶々になつて毒付いてをるので。貴様等の命も二十日前後までだ。烈風の晩に御所附近から火が出て、中川宮、守護職の参内が要撃される。」

見てをれ、今に貴様達も吠面をかくぞといふんです。なかば謔言のやうに毒付いてをるので、これだけのことが判つたのですが、訊問に答へるんぢやないから、詳細は解りません。」

近藤も一文字に口を結んで唸つた。眼が据わつて来た。

「差當り池田屋ですが、山崎の報告を待つてゐる場合ではありませんまい。旅館、茶屋町を軒別に洗つて見てはどうでせう。古高を捕へたために、暴發の時期が早まりでもしたら、取返しがつきますまい。」

「それもあるが、古高がそれ程の奴なら、古高奪還を目指して、今夜あたり屯所が襲はれるかも知れんぞ。」

「そいつは願つたり叶つたりですが。……では、今夜一晩待受けて見ますか。」

「隊の総員はどれくらゐだ。」

「山南等と大坂出張中の者が三十五名。四十名近く残つてをりますが、寢込んでゐる者などもありますから、備へに起てる者は約三十名でせう。」

こんな相談の最中、庭先から薄汚い一人の乞食が這入つて来た。顔馴染みの所司代の足輕、渡邊幸右衛門であつた。

「お、報告か。」

「は。」

土方が立つて行つて、渡邊の差出すくしやくしやの紙屑を受取つたが、二重に包んだ紙は、直ぐに近藤と一緒に披けられた。

今日夜五ツ時、徒黨池田屋ニ會ス模様ナルモ、或ハ四國屋重兵衛方ニ變更スルヤモ知レズ、人數相當ニ多キ見込 進

進は山崎の本名。——近藤と土方は期せずして、緊張の中に微笑を交した。

「御苦勞だつたな渡邊。すぐに引返して、五つに出動すると傳へてくれ。軒下へ行けば話せるだらう。覺られるなよ。」

「大丈夫でございます。」

乞食の渡邊は、野良犬のやうに素早く庭先を走つて行つた。

近藤は直ちに總員の非常召集を行ひ、出動準備を命じた。詳細を報じて人數手配を依頼する使を、守護職と所司代へ飛した。總員三十名、いづれも着込みの上に、例のだんだら染の制服を着けて、刀、手槍等、武器の嚴重な點檢を受けた。

人數不足で、隊士の大坂出張を遺憾に思つたが、この急迫の場合何とも仕方なく、遺漏なきを期して、己むなく守護職と所司代の援兵を乞ふたのであつた。

元治元年六月五日、京は祇園祭の宵宮であつた。鉾山車の囃子が賑かに聞える四條通を中心に、市中は年に一度の大祭に湧立つてゐた。殊に蒸暑い宵のことゝて、宵征の人々は、宵宮の賑ひに加へて川風を慕ひ、三條四條は浴衣團扇に埋まるばかりだつた。新選組に取つて、まことに囃子は出動の伴奏であり、人波は幸運の煙幕となつた。

壬生を出た隊士は、三人五人と別々に打連れて、普段の巡邏と何等異なる様子なく、五つまでには悉く祇園の町會所に集合した。こゝで會津の兵を待つて勢揃を濟まし、一舉に人波を衝いて三條を急襲し、池田屋並に四國屋を包圍する豫定であつた。

この夜黒谷の會津邸では、新選組からの報に愕然色を失つたが、同時に宛を關下に雪ぐといつて、長州の率兵上京説が頻りに行はれてゐる際、兵を繰出して浪士を大量的に殲滅するといふ策に不安を感じた。これが長州の決意を促進する結果、却つて重大事件を誘致し、關下に兵亂が起つて、それが會桑二藩治安不行届のためといふ、責任問題になつては重大事だと杞憂した。

議論は區々に岐れて、容易に決しなかつた。が、事態は急を告げてゐるのだ。長州問題も重大だ

が、現に暴發を企圖してゐる浪士團のあることも重大であつた。止むなく所司代との間に意見を往復させた結果、出兵は洛中治安の餘儀なきに出でたことを、傍證する手段として、守護職、所司代、町奉行の他に、一橋、加州、彦根、淀の諸藩へ出兵を促した。かくして方針一決、町方與力同心まで加へた當夜出兵の總兵數は、實に三千餘と注せられた。が、このため思はぬ時が費されて、新選組は既に祇園會所を疾くに去つてしまつてゐた。

三千の兵は、氾濫した濁流が低地へ流れ込むやうに、雑沓の市中を八方から三條小橋へ押し詰めて、非常警戒線が張られて、三條と四條の間はびたりと通行を禁止された。股賑を極めた夜の兩橋上は、忽ち人影を失つて、遙かに流れるどよめきと囃子の響のみが、人無き墨繪の橋影に、異様な不氣味を深めて行つた。

三

約束より一刻後の四つまで待つても、會津の手兵が來ないのに、近藤は業を煮やした。

「來なければ來ないでよい。援兵が來なくて手出しがならなかつたとあつては、新選組の耻辱だ。」

愚圖愚圖してゐては機を失ふ。それに、見廻組に飛込まれて、功を横取りされぬとも限らん。――

土方、我れわれだけで斬込まう。」

近藤は意を決して、再び隊士をばらばらに、三條小橋の町會所へ移した。近藤は斬込みを決意すると同時に、今夜は討死かも知れないと思つた。しかし、士氣の沮喪するやうなことは何一つ口にしなかつた。

三條の會所で隊士を二分した。一手は土方が率ゐて四國屋へ向つた。この手に屬した井上源三郎、齋藤一、林信太郎、島田魁、松原忠司などは何人も人を斬り、白刃を竹刀同様に心得てゐる腕達者であつた。原田の師谷三十郎の實兄で、大坂に町道場を持つてゐる谷萬太郎、局中唯一の軍學者武田觀柳齋もこの手に加はつて行つた。

土方等が出ると同時に、近藤の一隊も池田屋へ向つた。宵宮といふのに、池田屋では大戸を降してゐるのが、少し早過ぎるやうに思はれたが、潜戸を押すと難なく開いた。山崎が裡から手廻しをしておいたものらしかつた。

部置された隊士だけが外に残り、一部は裏口へ廻つた。中へ這入つたのは近藤、沖田、永倉、藤堂、原田、谷三十郎の六人であつた。帳場に坐つてゐた主人の惣兵衛は、拔身の刀槍を提げて這入

つて来た武士達を見るときよつとした。

「主人か。新選組だ、御用改めをするぞ。」と近藤が穏かにいつた。

「はい、御苦勞様でございます。」

惣兵衛は懸命に落着いて、冷たい汗を感じながら、宿帳を持つて立つて来た。

「局長。」

横手の座敷から飛出して来たのは、山崎であつた。瞬間、何かしら感極つた、久振りの邂逅のやうな眼を見合せた。

「當家か。」

「さうです。」

「ではすぐ四國屋へ行つて、土方にこつちへ廻れといつてくれ。」

「承知しました。」

山崎は出口を要心して、「山崎蒸だ」と自分の名を叫びながら飛出して行つた。

惣兵衛はしまつたといふ風に愕然と立竦んだが、一瞬、階段下へ駆け寄つて二階へ叫んだ。

「お二階のお客様方、御用改めでございますぞ。」

「おい、洒落れたことをいふな。」

草鞋のまゝ飛上つた永倉が、刀の尖でぐんぐん惣兵衛を押詰めた。

議が決して酒宴になつてゐた二階では、折角の惣兵衛必死の警告も、よく聞き取れなかつたのであらう。

「誰だ、今頃誰が来たんだ。」

運参の同志だと思ひ込んだらしい聲がして、とん／＼と階段を降りて来る者があつた。その足が中程まで来て、ひよいと顔が下を覗いた途端、二段跳ぎに跳び上つてゐた近藤が、舐の昇るのを堰止める力を刀身の鈍に罩めて、青竹を割るやうに眞甲から斬り下けた。相手が呻くと同時に、近藤は階段に身を伏せた。ざくりと頭部を斬り割られた浪士は、筋斗打つて近藤の上を越え、階下へ轉け落ちたまゝ動かなかつた。

これは本山七郎と變稱して、奥羽、蝦夷までも尊王の大義を説いて遊歴した上、公卿間にも出入し、雄辯を以て鳴つてゐた土佐の北添信麿であつた。――まだ三十歳を出てゐなかつた。

北添の殺られた物音に、北添と並んで坐つてゐた同じ土佐の石川潤次郎が、はてなと首を傾けて立上つた。覗いて見たのと、近藤を先頭に立てた新選組が、階段を駈上つて来たのが同時であつ

た。
「おい、壬生浪士の斬込みだ。」

一聲高く叫ぶなり、石川は燭臺の灯を吹き消した。同志は一齊に立上つた。あちらでもこちらでも灯が消えた。

「逃ける、逃ける」と上座から叫んだのは官部鼎藏の聲だった。

會議から酒宴になつた席なので、誰一人刀を手許に置いてゐなかつた。刀を置いた方へ駆け出さうとする者。欄干から屋根に出て、中庭へ飛降りる者。既に斬込んで来た新選組の前に立塞がる者。——地獄繪の上は一時に墨で塗り潰された。

四十人近い人々が、消え残つた一つ二つの灯りの中で、右往左往する名状し難い混亂を、一瞬にして觀取した近藤は、裂帛の叫びを擧げた。
「斬れッ。斬れッ。」

この叫びは、五人や十人の斬込みでないことを感じさせるのに効界があつた。二階へ踏込んだのは僅かに近藤、沖田、永倉、藤堂の四人であつたが、志士達が近藤の絶叫から受けた印象は、殲滅を期して襲撃して来た數十数百にも思へたに違ひなかつた。それゆゑ立向ふよりも脱出を考へ、官

部もまた同志を徒死させまいとして、逃けると叫んだに相違なかつた。

小人數の新選組にとつて、これ程都合なことはなかつた。近藤の叫びが奏功して、彼等は追ひ討の有利な立場に立つた。しかも近藤の叫びは、異様に凄じいもので、肚の底から頭の頂邊にかけて、滲透るやうに痾高い、それでゐてびりびり響き渡る聲であつた。

竹刀を取つた近藤の腕は、取立てゝいふ程のものではなく、試合ふ者は必ず勝てる自信を以て臨むのであつたが、しかも見事に打込まれるのが常であつた。氣合に眩んだ一瞬の虚を衝かれるのであらう。江戸の試衛館で、山南の敗れたのも、實に鋭い獨特の氣合のためであつた。——その聲が、襖を打抜いた廣間の混亂の中を、征矢のやうにびいと貫いて走つた。

志士達は續々と屋根から中庭へ飛降りた。官部の「逃ける、逃ける」と近藤の「斬れ、斬れが、兩陣の指揮者の號令のやうに交錯した。

「沖田、下だ。」

近藤は突如、猛然と志士達を追つて進み入ると、廣間を從斷して裏口への階段へ迫つた。どとつと駆け降りると、正に中庭から裏口へ出ようとしてゐる一人の浪士の背後から、肩口へ追ひ討に一刀を浴せた。若い浪士はよろめいたが、颯と横へ退いた。薄手だつたと見えて、一と跳びに屏へ飛

びつくと、そのまゝ外へ乗越えた。これは長州の吉田稔麿であつた。

吉田はいまだ二十四歳の若さであつたが、久坂義助、高杉晋作と並んで、松下村塾の三秀と稱された秀才だつた。手負ひのまゝ吉田は急を報ずるため、河原町の長州邸へ一散に駆せた。

沖田は裏出口を要し、近藤は扉際に寄つたが、既に敵を受けて吉田を追ふ暇がなかつた。

志士のなかばは町人姿だつた。町人は刀を所持せず、武士は大部分刀を取る餘裕がなく、いづれも脇差、短刀を構へて、しかも狼狽と混乱の後に立直つた勇猛さを發揮して、俄然攻勢に轉じて立向つて来た。が、近藤の鋭刃には、二太刀と合せる者がなく退けられた。

近藤は進んで討たうとしなかつた。土方の一手が来るまで、防ぎ且つ逃走を押へるのみであつた。鋭い劈くやうな気合は、敵を威壓すると同時に、味方を鼓舞するために響き渡つてゐた。

これに反して、沖田は無言であつた。長身瘦羸の彼が、聲もなく揮ふ劍は、必ず近寄る者に觸れずにはゐなかつた。それは技を超え、術を超えた奇怪な跳躍で、近寄る者に退く隙を與へない、一種神秘な、劍の精の魅入つたやうな早業であつた。

いつの間に降りて来たのか、永倉、藤堂が中庭の亂刃の中に激しい聲を立てゝゐた。近藤は敵を拂つた隙にちらと二人の方を見た。その時藤堂に迫つた一人の浪士は、つけ入つて藤堂の小鬘の邊

りへ脇差を走らせた。藤堂は近藤のゐる方へたちちとよろめいた。

「手強い奴。」

近藤がはつとした瞬間、浪士は突き進んで藤堂に二の太刀を浴せようとした。その勢込んで迫る浪士へ、いきなり躍り出た近藤の一刀が、肩口から胸へかけてまともにざくりと遣入つた。うつと呻いて前のめりになつた浪士は、見事に耐へて、猛然と近藤に襲ひかゝつて来た。その凄じさに思はず後退しながら、宮部だなど近藤は直感した。

途端に宮部の體勢が、がくりと崩れて地に伏した。横合から踏出した沖田が、身を沈めて胴を薙いだのだ。が、宮部は更に身を起した。そこを背後から、永倉がまた斬つた。

斬つた永倉が、宮部を斬つたと同様に、背後から肩口を斬られたのは、その瞬間だつた。着込みを斬り割かれたと見えて、永倉はのめつた。

近藤は藤堂、永倉を庇つて志士達に對した。この時、沖田は裏口から手槍を揮つて躍り込んで来た若い浪士に對してゐた。長州邸へ急を報じて、手槍を引提けて再び同志救援に取つて返した吉田稔麿であつた。が、運悪く沖田に發見されたのだ。たゞ二槍、空を突かせただけで、沖田は吉田を斬伏せてしまつた。

天性の妙手は、斬れば斬るだけ疲れを知らずに冴えて行くのかと見えたこの時、沖田はガッと吐血した。そして刀を握つたまゝ、両手で胸を抱いて昏倒した。

藤堂、永倉が負傷に屈せず浪士に立ち向つた隙に、近藤は沖田の傍へ駆け寄つた。

「沖田、どうした。沖田。」

沖田は動かなかつた。近藤はそこに立つて沖田を護つた。見れば藤堂、永倉も苦戦の様子であつた。

「いかん、死ぬ。みんな討死だ。……」

近藤は所詮助からぬと思つた。死にたくなかつた。同時に、死ぬなら斬り捲つて死んでやれと、棄鉢の憤怒に似た激情を覺えた。

土方の一手が四國屋から取つて返して来たのは、この時だつた。表階段の下に槍を揮つてゐた谷三十郎、原田左之助の師弟も、一手になつて這入つて来た。俄然中庭は火を發するやうな混戦となつた。

「局長、局長。」

亂双を潜つて土方が駆け寄つた。

「外は各藩の兵が出勤して、警戒に就いてをりますぞ。」

「よし、生捕れ、生捕れッ。」

味方が増し、手筈の整つたのを知ると、近藤は吻とするよりも、雄渾を感じた。裂帛の叫びは生捕れに變つた。これがまた志士達の氣持を、甚だしく壓迫した。

満身創痍の宮部鼎藏は、この混戦の中に裏階段の下まで這ひ寄つてゐたが、そこで階段に腰掛け、屠腹して果てた。嘗て三條卿と共に、三千の親兵の總督たりし肥後の傑物宮部鼎藏は、歳四十五、恐るべき氣魄であつた。

烈戦は一刻半に及んだ。

死すべきは死し、傷ついた者は動けず、捕はるべきは捕はれた。池田屋の中庭は蒸暑い夜氣が血の匂ひを孕んで、未だに地に盡く影と呻きに、凄愴の光景を呈してゐた。

短い夏の夜がほのぼのと明けはじめた。

新選組では奥澤榮助が即死し、副長助勤の安藤草太郎、新田革左衛門が頻死の重傷を負つた。

志士の方では宮部鼎藏、吉田稔麿、北添佶麿、石川潤次郎、長州の杉山松助、肥後の松田重助、

播州の大高又次郎が即死した。

傷を負つて動けないところを捕へられた者の中には大高又次郎の兄忠兵衛、佐伯稔威雄等があつたが、京の書店の主で梅田雲濱と親交のあつた西川耕藏は、道學易理に通じ、雲濱の碑を建て、天忠組にも關係のあつた大物の一人だつた。

一度は池田屋を脱出し、後死没した者には長州の廣岡浪秀、土佐の野老山五吉郎があつた。廣岡は重傷のまゝ長州邸附近まで這ひ寄り、精限盡きて路上に歿した。野老山も同じく重傷を受けて、長州邸へ辿り着き、潜伏後傷が化膿して間もなく死んだ。廣岡は二十四歳であつたが、野老山は更に若い十九歳であつた。

宮部、松田と共に最も手強く戦つた望月徳彌太義澄は、武市瑞山系の土佐輕格志士で、脱出に際して醫備の兵を死傷させ、角倉まで脱れて力盡き、樹蔭に這入つて屠腹した。坂本龍馬等と共に航海術を修めた海舟門下の逸才で、前途を囑望されてゐた青年であつた。

戒嚴が解かれたのは翌六日の九つであつた。これより先、新選組は出張の役々に後始末を委せ、夜來の曇天が破れて、日の出の空が錦のやうに亂雲を染めて來た頃、隊列を整へて壬生へ引揚げた。沿道は見物人を以て埋まつてゐた。三千の兵力が動いた戦等騒ぎのやうな一夜であつた。

市民は祇園會の宵宮に出たまゝ、夜を明かしてこの騒ぎを見物してゐた。

「君の方の一手がもう少し遅かつたら、僕も危なかつたよ。」

「何しろ凄いな奴等でしたな。」

「沖田が倒れた時には、ひやりとした。」

「しかしこれで、後の餘黨狩を少し手厳しくやれば、當分めぼしい奴の姿は、洛中に見られましま

い。

「後で山南が羨むぞ。」

「はゝゝゝまつたく……」

先頭の近藤と土方とはけろりとして、賑かに談笑して行つた。

稍元氣を恢復した沖田は、隊士の肩に扶けられて歩いた。着込み越しに肩口を斬込まれた永倉は、血に染つたまゝ、甲を斬割かれた左手をぐるぐる巻に纏帯してゐた。重傷の藤堂、安藤、新田、即死の奥澤と、四つの釣臺が運ばれて行つた。千石ものといはれた槍の谷三十郎は、全身蘇芳樽を浴びたやうに眞赤になつてゐた。負傷のためではなく、弟子の原田左之助と左右に別れて、表階段の下を要してゐた時、降りて來る石川潤次郎を下から串刺にした時の返り血であつた。

隊士中満足に刀が鞘に納つてゐる者は數へる程しかなかつた。いづれも制服を切裂かれ、返り血

に塗れ、折れ、曲り、齒のこぼれた抜身の刀槍を提げたまゝ二列に並んでゐた。見物の群集は怖いもの見たさの好奇心から、人垣を作つてはゐるものゝ、胴頭ひを禁じ得る者は一人もなかつた。

會津藩の懸念は的中した。

池田屋の悲報は、率兵上京説の沸騰してゐた長州本國を刺戟して、輿論の硬化を決定的なものとしてしまつた。が、池田屋出動に時を遅らしてまで、慎重な手順を踏んだおかげで、幸ひ會津は自藩だけの責任たる窮地からは免れた。

六月十五日、老骨の主戦派たる來島又兵衛は、悲憤に振ひ起ち、遊撃隊を率ゐて長州を先發した。十六日には家老福原越後が、二十六日には同じく家老國司信濃が、七月初旬にはこれも家老益田右衛門介が、いづれも軍船に乗つて三田尻港を出發した。

かくて長藩は兵を伏見、山崎、嵯峨の三要所に布陣し、三條等五卿並に藩主父子の冤を訴へて、強硬に入京を乞ふた結果は、遂に蛤門の戦となつた。

長州軍は世子定廣の本軍到着に先立つて、一敗地に塗れた。來島又兵衛先づ噎れ、眞木和泉、久坂玄瑞、寺島忠三郎、入江九一等は或は戦死し或は自刃して果てた。禁關に發砲した長藩は、勅勘から更に朝敵の名を蒙るに至つた。

四

蛤門の戦は僅か一日で大勢を決したが、洛中は應仁以來の兵火にかゝり、延焼二里、四萬三千戸を烏有に歸した。

新選組は、最後の掃蕩と落武者の潜伏を防ぐため、赤地に白抜の誠の字の隊旗を大坂に進めた。そして滞陣一ヶ月、淀川筋に秋風の渡る八月末、久振りに壬生の屯所へ戻つた。

朝廷からは長州追討の勅が幕府へ下つたので、幕府は八月二日を以て、將軍自ら征長の軍を統べる事が公布され、將軍の西上を待つばかりになつてゐた。勝てば官軍の悲運は、敗戦の長州一藩を覆ふた。

一夜祇園の山綱で、新選組は隊士の慰勞宴を催した。會津藩から隊士の補給を得て出陣した百人近い人数が、戦死、脱走などで六十人以下に減じてゐた。永倉新八は股に、原田左之助は肩に、そ

れぞれ鐵砲傷を受け、その他にも負傷してゐる者が多かつたが、池田屋以來、亂刃に次ぐに鐵砲彈の洗禮を受けて來た一同の意氣は愈々昂り、益々元氣であつた。

「土方君、三本木へ行かう。」

「何處かへお出掛けですか。」

「後をよろしく頼むよ。」

近藤が答へないうちに土方が云つた。

池田屋以來、土方は近藤の信任の厚さと、自己の優位とを意識的に、山南へ誇示する風があつた。

山南は不快な顔をした。

近藤と土方は駕籠を連ねて三本木の小柳へ向つた。駒野に逢ふのも久し振りであつた。

「まア御機嫌よう。……えらい騒ぎとして。……心配どしたわ。」

駒野は久し振りに顔を見た嬉しさで、涙含んだやうな眼をして近藤を見た。

「どうだお駒さん、恐ろしかつたか。」と土方がいつた。

「へえ、どないなるのやしらんとお思て、ほんまに生きて氣がしまへなんだえ。」

「はゝゝ、どないもならん。この通り騒ぎも鎮まつたし、我れわれも無事だつたよ。」

「ほんまによろしおしたえなす。」

今初じめて、安心したやうないひ方であつた。

酒になつてから、近藤が急に思ひ出したやうにいつた。

「なア土方君、隊士を四五十人補充しなくてはならんと思ふがな。」

「さうです。何しろ鐵砲彈では、損害が大きくてかなひません。早速徵募の布令をしませう。」

「いや、今度は江戸で募りたいと思ふんだ。」と近藤は遮つた。「何といつても兵は東國に限る。今

度も脱走者は悉く關西の者だ。戦の様子を見てても、どうも東國の方が成績がいい。齋藤

や谷のやうな例外はあるが、大體西國の者は實戦よりも、山崎のような仕事の手腕に優れてゐる。

謂はゞ山崎は、その代表者みたいな男だ。腕は出來てゐる者でも、氣魄が乏しい。我武者羅な精神

がないのだな。第一、駆引が先に立つ。一人と一人なら、技に秀でた方に部があらうが、實戦では、

必ず名人達人が強いとはいへないことを、僕は池田屋と今度の戦争で、つくづく感じたよ。今は武

藝も、戦國時代に還るべきだ。泰平の世の名人達人の強さは、必ずしも戦場の強さではない。小太

刀の名人よりも、長い刀を振り廻して疲れない者の方が役に立つ。極言すると、戦國の世のやうに、

鐵棒を振廻して進める臂力と、我武者羅な氣魄とがあれば、技としての劍道は知らなくともよいともいへるのだ。その點では、やはり源平の昔以來、兵は東國に限るといふことになる。僕は今度の徵募は、是非江戸で行ひたい。」

「なる程、尤もな御意見です。一度江戸へお歸りになりますか。」

「歸つて見たい。養父の容態もよくないと、いつて来てをる際ではあるし。……」

「僕も先達來の忙しさで、お見舞状も差出してをりませんが、やはりいけませんか。」

「思はしくないらしい。將軍の御上洛が近ければ、征長の出張で當分はまた下向も出來まいから、二三日でもよい、歸つて來たいと思つてゐるのだ。」

中庭を距てた向ふの座敷から三味線の音締が聞えてゐるが、やがて流れるやうに都々逸が聞えて來た。

へ加茂川の浅きころと人にはみせて

夜は千鳥でなきあかす

近藤は聞くともなしに耳を傾けた。と、突然駒野が「あゝ、久坂はんの……」と呟いて空を見るやうな辟差をした。

「何だ、あれも久坂の作か。」

「へえ。」

呟えた調子が續いた。

へ呟いて牡丹といはれるよりも

ちりて櫻といはれたい

「お氣の毒に、久坂はんもこないだの戦争で、たうどう亡うならはりましたさうにおすえな。」

その刹那、なぜか近藤は、恰も自分が下手人であるかのやうな憂鬱を感じた。それは現に、宮部鼎藏を自分で斬つた現實感よりも、もつと強く、天王山へ掃蕩に向つた時、陣地を焼却して麾下六人の浪士と共に、見事な自刃を遂げてゐた眞木和泉守を、自分の眼で見えて來たよりも、もつと哀惜する氣持の深いものがあつた。久坂に死なれたことが、追へない場所へ久坂に逃げられた如くに虚しかつた。

「あの藝者は誰だ。」

「君尾はんどす。」

「君尾。わしは知らんなう。」

「御存知おへんどすやる。君尾はんは、幕府方のお侍のお座敷へは、出やはらしまへんよつて。」

「なに幕府方だと。」

近藤は女の口から、意外な言葉を聞くように反問した。

「へえ、君尾はんは桂はんが御最良にしといやす、幾松姐はんと一緒に、勤王藝者やいはれてはる人どすもん。……」

「うむ、お前達のなかにも、勤王と佐幕があるのか。」

近藤は笑つて訊いたが、しかも笑へる氣持ではなかつた。

「その佐幕藝者は、あてどすのやわ。」

不意に感情の迫つた聲で、一息にいつたかと思ふと、見る見る駒野の眼は涙に浸された。

「なぜお前が佐幕藝者だ。」

「そやかて、新選組の局長を男に持つたら、立派な佐幕藝者やないかと……」

危ふく嗚咽になるのを、ごくと唾を燕んで飲へた。

「君尾がいつたのか。それとも幾松か。」

駒野は黙つて齒を噛み締めた。近藤は女の問題に思はず固くなつたのを、自ら笑ふやうに不意に

哄笑した。

「泣くな。土方さんに笑はれるぞ。過激不逞が勤王で、皇城の地の治安に任じてをる新選組が、何で佐幕だ。なア土方君。」

「さうとも。お駒さん、我れわれは奴等と戦つて勝つて來たのに、あんたがそんなことに負けてるてどうするのだ。威張り返つてゐてよろしい。天長様に忠義を盡してゐるのは、我れわれではないか。守護職も我れわれも、御所の仰せを承つて働いてをるのだ。奴等は勤王といふ口實を作つて、實は御所と將軍家との御仲を割き、自分達が天下を取らうと謀んでゐる、不逞な輩なんだ。そんな奴等を最良する奴等に負けてゐては、三本木の駒野の估券にかゝはるぞ。」

「ほんなら、久坂はんや桂はんのやうにお偉いお方でも、やつぱりそないな悪人どすのやろか。」

「悪人だとも。あいつ等は、悪人中でも大物の方だ。偉くも何ともないさ。理窟の巧い策士なんだ。」

駒野は考へ込むやうに黙つてしまつた。近藤はたとひ女を慰めるためにもせよ、さう單純にいひ切つてしまへる土方に、羨しさを感じた。

「局長、久坂の都々逸なんど唄はせて、隨喜してをる向ふの客は、ちと臭くありませんか。ひと

つ踏込んでみますか。」

「まあいゝ、今夜は止したまへ。この家を騒がしては可哀想だ。」

「土佐のお侍やさうにおす。」と駒野がいつた。

「土州か。土州なら久坂信者がをらう。」

「ふん、都々逸にお辭儀して、鞆め面でもしてゐるんだらう。」と土方は障子越しに彼方を睨んで、吐き捨てるやうに呟いた。

すると、それに挑戦するやうに、また唄が聞えた。

へ立田川無理に渡れば紅葉がちるし

渡らにや聞えぬ鹿の聲

憎い程いゝ聲だつた。

「君尾はん、唄うては泣いといやすさうにおすえ。」

「君尾といふのは、久坂の情婦か。」と近藤が訊いた。

「さア、深いことは知りまへんけど、久坂はんとは長いお馴染みやつたさうにおすわ。」

近藤はそれ切り黙つてしまつた。土方も話頭を轉じた。

別れ際に「あて藝者を退きとおすわ。」と駒野は近藤に囁いた。

五

近藤の江戸下向の希望は、案外早く達せられることになつた。

その頃、洛中に於ける長州系浪士の宣傳戦術が頗に活發になつて、新選組はその取締に多忙を極

めてゐた。

一 薩州

薩長土の三藩と迄云ひ觸らし、速に攘夷これあるべくと思居候處、昨年中川宮、會津等と心を合せ、正義を不義に落し、刺へ此度長藩屯所に相成候、迎、恐多くも後醍醐天皇の御廟に放火する事、朝敵に非ずして何ぞや、其外天然福利等の家財を盗取り、屋敷へ持歸候事、大盜賊に非ずや

一 松平肥後守

恐多くも京都守護職仰付られ、葦下鎮護の處、此度長藩僅に千人足らずの人数相寄せ候を、

是を掃ふに洛中を焼捨候事、身は微力とは申しながら、實に皇天后土の惡む所也。刺へ其上
山崎應神天皇の御廟に放火する事、朝敵の罪免るべからざる者也。

これ等の攻撃は中川宮、一橋、越前、津、桑名、彦根等にも及び、至る所に書いて貼り出された。
これに對して幕府は町奉行に命じ、廿餘ヶ所の制札場に駁論めいた制札を掲げた。

一、此度長州人、恐多くも自ら兵端を開き、禁闕を犯し、容易ならざる騷動に相成り、諸人の難
澁も一方ならず候處、殘賊も追々召捕、取鎮めに相成候間、立去り候者は安堵歸住致すべ
く候。將又妄に焼拂ひ候等、浮説を唱へ候者も、これあるやに候へども、右様の儀には決
してこれ無候間、銘々職業を勵み、立騒ぎ申す間敷事。

一、元來、長州人名を勤王に托し、種々の手段を設け、人心を迷し候者もこれあり候へども、
禁闕に發砲し、逆罪明白に付、追討仰せ付けられ候。若し信用致し候者も、前非を悔ひ改心
候者は、御容免相成べく候間、申出づべく候。且潛伏落人など見當り候者は、早速申出
候はゞ、御褒美下さるべく候。若し隠置き他より顯はれ候はゞ、朝敵同罪たるべき事。

かういふ宣傳戰の行はれてゐる影に、新選組は池田屋事件當時の、胴に入つた手腕を以て、殘黨
志士の苛辣な探索を續けた。さうした繁忙の最中、近藤は駒野の乞ひを容れ、藝者を退かして三本

木附近に一戸を構へさせた。

駒野を退かせたのは駒野の希ひでもあるが、他にも理由があつた。桂小五郎が潜入して、幾松に
匿はれてゐるらしいといふ情報が一つ。三本木が相當に浪士達の出入を見せてゐることが一つ。そ
れ等を狩るとすれば、駒野が手引をしたとの疑ひを、朋輩からかけられるであらうといふ懸念が一
つ。尠くとも新選組が、局長の情婦を手先に使つたと云はせたくないこと等の理由によつて、近
藤は駒野の落籍を急いだのであつた。

それが九月。——十月に遣入ると、將軍は征長の勅命を拜しながら上洛せず、勅を輕んずるとい
ふ逆手の非難が昂つて來た。隙があれば將軍幕府を窮地へ追込まうとする、まつたく手段事情の如
何を問はない尊攘派の、爲にする惡罵であることは判りきつてゐるとしても、守護職はこれが輿論
となることを惧れた。

京都からは相次で、將軍の上洛を促す急使が立つた。しかし征長が失敗に終つた場合の幕府の立
場、長州に同情を示す公卿諸侯の思惑、財政状態等を深く考慮した江戸の幕閣は、容易に將軍の上
洛を肯はず、勅命もあることゝして、征長の懸聲だけで長藩を壓服し、事態の好轉を圖らうとの肚で
あつた。

こんな事情から近藤は守護職の命を受けて、將軍上洛を幕閣に促し、併せて京都の逼迫してゐる事情を上申するため、遽かに下向することゝなつたのであつた。

半月思はずの滞在豫定ではあつたが、公務の他に、養父にして恩師たる近藤周齋の病氣見舞、隊士の徴募、妻子との對面等、近藤にとつては、差迫つた懸案が幾つもあつた。劍客の永倉新八、學者の尾形俊太郎、兵學者の武田觀柳齋の三人を伴つた。

近藤は東海道を早駕籠で下つた。

往きは残雪の消え残る木曾路であつたが、あれから一年有餘、當時二百餘名中の、一平隊士に過ぎなかつた自分を、回顧せずにはゐられなかつた。

——本庄宿の屈辱を思つた。山岡鐵太郎の知遇を考へた。それから忍辱の日を過ごし、如何に至誠を傾け盡し、身を以て危地に臨んで来たことか。すべてが昨日の事のやうにも、また十年の歲月を閲して来た今日のやうにも思へた。

ともあれ、今は晴れの將軍上洛勸説使であつた。

「京都新選組、大御番頭取御扱近藤勇、公用を以て罷り通る。」

かう駕籠の中から叫んで、箱根の關所を乗打したのには、自ら芝居氣のあつたことを否めなかつた。しかも生一本な近藤は、敢てした芝居氣にも拘らず、感慨の胸に充ちて來るのを禁することが出来なかつた。

出来なかつた。

X

X

X

歸洛は十一月に這入つた。もう比叡風が吹き荒んで、京都特有の底冷えが始まつてゐた。

臺閣を歴訪して上國の形勢を説き、征長親征はともかくも、勅令に對して天機奉伺の上洛を力説したにも拘らず、勸説使としての表向の役目は、上々の首尾とは行かなかつた。その代り隊士の徵募には成功して、新選組の充實した點では意義ある下向であつた。

新規應募者中、めぼしい人物だけでも、新井忠雄（府内浪人）毛内有之進（弘前脱藩）茨木司（府

内浪人）池田小太郎（府内浪人）橋本皆助（大和郡山脱藩）三浦啓之助（佐久間象山の伴、客員）

その他吉村貫一郎、清原清、阿部十郎、中村小次郎、篠崎新八、久米部正親、小原幸造、安富才輔、

富永十郎などが數へられた。しかし何といつても、近藤を満足させたのは伊東甲子太郎一黨の参加であつた。

伊東甲子太郎武明は常陸志築の脱藩者で歳三十二、深川佐賀町に北辰一刀流の道場を開き、上州

出身の中西昇、内海二郎を師範代として、川向ふの劍客として聞えてゐた。

近藤の欣躍したのは、伊東の参加によつて、新選組の存在が重きを加へるであらうといふことに

あつた。何よりも伊東は温厚篤實な國學者であつた。世評といひ、人柄といひ、學識といひ、それだけで充分人を推服せしめる棟梁たるの材を備へてゐた。近藤は最も新選組に缺け、新選組の欲してゐた人物を伊東に見出した。劍などはほんの附録でよかつた。しかもその劍さへ北辰一刀流の極意に達し、腕達者の同志と共に参加したのであるから、これ程の收穫はなかつた。

伊東は實弟の鈴木三樹三郎、同志の篠原泰之進（久留米脱藩）加納鷲雄（伊豆脱藩）服部武雄（赤穂脱藩）佐野七五三之助（尾州脱藩）内弟子の中西昇、内海二郎の七人と共に、佐賀町の道場を壘んで近藤の後を追ひ、十一月十四日江戸を發つた。そして悠々旅程を愉しみながら、十二月一日壬生に到着した。

近藤の不在中、土方と山南敬助が、何かにつけて競合をやるといふ噂が近藤の耳に這入つた。總長と副長のこととて、下手に洗ひ立てて、却て反目らしいものが表面化しては、局中の統制上面白くない結果になると考へた近藤は、そのまゝ放置しておいた。自分が不在で、ちよつとした二人の口争ひにも、仲裁の口を聞く者がなかつたからであらう。自分さへをれば、喧嘩になるところが笑つて済むと、極めて樂觀的に考へてゐた。ところが間もなく、二人の反目のはつきり表面化す事件が起つた。

隊士の田内知といふ者が、八條村のさる家の離座敷を借りて、お房といふ妾を圍つてゐた。田内が山南に従つて大坂出張中馴染んだのを、呼寄せたものであつた。田内の友達は招かれては、女の美しさを見せつけられたりして、平隊士仲間では評判の女になつてゐた。

そのお房が田内の屯所出勤の不在中に、附近の寺に假偶してゐる水戸の浪士と通じた。田内がそれを發見したのは、二人が大びらに離座敷で酒を飲んでゐたところであつた。不意に歸つて來た田内に、水戸浪士は驚いて押入の中へ潜り込んだが、既に遅かつた。田内は酒肴を指して、誰に酒を飲ませたとお房を詰つた。その時不意に押入の戸を引開けた水戸の浪士は、振り返らうとする田内の肩口から、背筋へかけて抜き打に斬下け、立上らうとするのを、横雑に拂つて脚に傷を負はせたまゝ、お房の手を取つてその場から逃走してしまつた。

田内は脚を斬られて追ふことが出来なかつた。漸く家人に屯所へ急を報じて貰つて、駕で壬生へ戻り、山南の計ひで傷の手當を受けてゐたのであるが、これが八條村へ駐け着けた隊士の口から、翌日土方に洩れた。

「山南君、田内が醜態を演じたさうだが、あんたは傷の手當を命じたといふではないか。」
近藤も伊東もゐるところで、土方が咎めるやうにいつた。

「命じたよ。悪いかな。」

山南も突かゝるやうな調子であつた。

「悪い。隊士にあるまじき不謹慎だ。それを咎めもせず、局長の裁断を受けもせず、傷養生をさせるなどは、総長たる者の行爲ではない。隊規を空文にしては、局中の秩序が紊れ、士氣が弛緩する。」

「隊規に抵触してをるかな。女の問題で失態を演じるのはお互ひ様だ。田内一人の問題ではない。いちいち隊規々と洗立て、人命を粗末にするには及ぶまいぢやないか。」

着京早々の伊東の前で、総長と副長の諍ひを、困つたものだとは思つたが、近藤は一應事情を糺さぬわけには行かなかつた。糺せば裁断を下さなければならぬ。二人の反目を仲裁するには一つの機會であつたが、事隊士の對面問題に關してゐるだけに、伊東の前で曖昧な妥協は見せられなかつた。

「士道不覺悟だ。田内に切腹を命じたまへ。」

つひに近藤は嚴格な顔をして、しかし山南にとも、土方にともつかず處断を命じた。

田内は直ちに新徳寺へ引出され、姦夫姦婦を追ふこともならぬ無念を、殘して割腹しなければならなかつた。

「局中法度に觸れて隊士が處断を受ける時には、新入隊士に太刀をとらせて膽力なり腕なりを驗するのが例であつたが、田内の介錯は總長たる山南敬助自ら買つて出た。田内への同情からか、近藤、土方への面あてからか、おそらくそのいづれでもあつたに違ひあるまい。」

これが入隊早々伊東甲子太郎のはじめて見た、新選組内訌の相であつた。

この年の暮、近藤の歸洛に先立つて西下してゐた、尾張大納言慶勝を總督とする征長軍は、十二月二十七日を以て撤兵を開始した。藩主父子の謹慎待罪、三家老の斬首、五卿の筑前移轉、山口城の破却等、構和條件のすべてを長藩が容れた結果であつた。

長藩は禁門の變に敗衄し、八月、英、米、佛、蘭の四國聯合艦隊と戦つて、辛い目を見た。内憂外患の疲弊に乗じて、棕梨藤太、熊谷式部等保守派が、藩府の權を握つた際とて、幕府の條件中重要項目となした、京都出陣の責任者三家老の斬首と永世家名繼絶、五卿の九州動座を即座に承諾して、溫和恭順を誓つた。この時は西下の七卿中、澤卿は但馬生野の一擧に去り、錦小路卿また病に歿して既になかつた。

元來征長を好まなかつた總督尾張慶勝は、重要項目の受諾に満足して、あとはほんの形式だけで、早々に征長軍を撤してしまつた。

かくして長州問題は事なく納まるかに見えた。

實は尾張征長總督をかういふ傀儡に仕立てたのは、専ら薩の西郷吉之助の策に出でたのであつた。即ち尾張慶勝の附家老成瀬隼人正を説いて、總督受任を好まなかつたのを無理に納得させ、一應征長の大義名分を明らかにした上、征長を打切らうと努力し、同時に裏面からは、長藩の支藩吉川監物に恭順を慫慂したのであつた。

ともあれ、征長は毛利父子の處分問題だけを殘して、平和裡に第一回の幕を閉じた。そして慶應元年乙丑の春を迎へた。

白梅紅梅

一

京の空は凍てつくばかり透明に晴れて、土の黒い本營の庭には、梅の古木に凛々と花が匂つてゐた。

かつて芹澤達の居間になつてゐた一棟は、四間打通にして、隊務を執る部屋に宛てられ、幹部がそこに充満してゐた。議に上つてゐるのは、暮から問題になつてゐた屯所移轉の件であつた。隊は充實して總員百五十名に近く、屯所は幹部のゐる本營だけでも、狹隘を告げてゐた。それに第一洛名王生では、市中の取締に都合が悪く、隊士が附近に分宿してゐることも不便であつたし、更に創設當時の宿舍のまゝでは、新選組の威を張ることが出來ず、いまだに王生浪の名が消えないのも、なかばは宿舍のせいであつた。

近藤は伊東等の参加を機会に、隊をもつと組織立つたものにしたといと考へてゐた。外部に對しても、存在を權威あるものにしたかつたのであらう。そこで、市中に適當な屯所を物色した。相當の地域が必要であり、建物も生やさしいものでは追付かないとなると、これといふものが容易に見つからず、それかといつて、新築するには費用が許さなかつた。

煙眼の土方は、西本願寺へ眼をつけた。寺内の集會所は、大法會を執行する時以外は、空ツきりであるし、境内も広い。それに西本願寺は長藩と密接な關係があつて、禁門の變の折には、藩の京都留守居乃美織江を匿つた上、秘かに落したといふ噂があり、そのため寺侍の芝田有右衛門、小山藤作、梶原與市等を新選組の手で捕へて、六角の獄へ下したことさへあつたからで、謂はゞ新

選組の監視下におかれてゐるといつてもよかつた。

相手に弱味があるだけに、手剛く押せば集會所を解放せぬことはあるまい。市中取締の便宜からいつても、また寺内の監視の上からいつても、これ程都合のよい場所はないといふことになつて、土方は近藤に諮つた上、口達者連を撰んで本願寺へ強談を行つた。

本願寺では、蛇に見込まれたやうに狼狽して、あらゆる口實の限りを盡して断つたが、土方は頑として應じなかつた。そこで今日最後の回答を聞きに行くことになつてゐた矢先、本願寺からは、隊費と稱して金を届けて寄越したのであつた。

今開かれてゐるのは、それに對する協議だつた。

「我れわれは隊費を借用に行つたのではない。本營を借りに行つたのだ。隊費などを寄越して、災難面をするとは不埒な坊主共だ。飽くまで本願寺移轉を實行しなくてはならん。第一あの宏莊な建物、年中遊ばせておいて、しかも浪士共が逃げ込んで來ると、匿つておくなどは、断じて見脱しておくべきでない。」

土方はさつきから尤もらしく口を歪めて、頻りに強硬な意見を吐いてゐた。

「僕は反對だ」と山南がいつた。「寺などを相手取つて、そんな強制がましいことをするのはよくあるまい。檀家信徒も多くあることだから、隊が衆怨を買ふ結果になる。寺の嘆願を容れて、よろしく撤回すべきだと思ふ。」

「衆怨なんぞ問題ではないよ。隊の方は差迫つてゐるのだ。それを忍んでまで、不逞浪士の温床たる本願寺の乞を容れる必要は断じてない。」

土方は執拗な意地さへ見せてゐた。それは本願寺よりも、むしろ山南の反對意見に對する意地張りのやうであつた。山南は山南で、自己の正當な主張と土方に對する反感から、二重の依怙地を現はしてゐた。

「寺域神域を侵して何の治安だ。本願寺を監視するなら、監視の方法は別にある。移轉は何も、本願寺でなければならぬ理由はあるまい。衆怨を買つてまで、新選組の暴戻振りを示す必要はなからう。そんなことは芹澤流の遣り方だ。」

「なに、暴戻振りだ。芹澤流とは何だ。君は總長の位置にありながら、自ら新選組を攻撃するの

か。」

「攻撃されるやうな、過誤を防いでゐるのだ。」

「では本願寺を措いて、何處へ移るといふのだ。新築の費用はどうするのだ。」

「今の場合、そんな具體上の問題は別だ。」

近藤は例の口をへの字に結んだ、固い表情で聞いてゐたが、急に傍の伊東を顧みたら。

「伊東さん、どうお考へです。」

伊東は江戸で川向ふの美男劍士と評判された、端正な秀貌に品のある微笑を浮べた。

「わたしにはまだ、洛中の様子はよく解りませんが、御意見の上では、總長の御説が一應妥當のやうに思はれますが。……」

土方が険しい眼を伊東に向けた。が、近藤は土方に何もいはずなかつた。近藤の肚は既に決つてゐたのだ。伊東に諮つたのは、伊東への敬意と、一應協議の形式を踏むために過ぎなかつた。

「とにかく、移轉の必要に迫られてをります。それに寺院が諸藩の本陣になるのは、例のあることですから、本願寺を宿營にすることは、特に新選組だけの横暴にはなるまいと思ふのです。」

近藤は穩かに微笑して伊東に説明したが、そのまゝ伊東の賛否を俟たず一座に向つていつた。

「總長の反對もあるようだが、事情はこの上時日を費して、他を物色することを許さない。此際一と先づ本願寺移轉を實行したいと思ふから、土方君にもう一度御足勞を願ふことにする。昨日贈られた隊費は辭退して、當方の目的とするところを、尙よく先方へ傳へて貰ひたい。」

「局長」と山南は鋭く呼んだ。「待つて頂きたい。諸藩が寺院を宿營にするのと、新選組が屯營するのでは事情が異なります。」

「どう異なる。」

「諸藩はまつたぐの假營ですが、新選組の場合は、隊務遂行の本據となるのです。従つて處刑もやれば拷問も行ふ。寺の最も嫌ふ殺生を、寺域に於て行ふのであるから、寺の迷惑がるのも尤もではありませんか。それを押して強請するのは、横暴の譏を免れずまい。」

「土方もいつたが、山南君は自分の新選組を、少し不當に評價されてをるんぢやないかな。新選組の隊務は、盡忠報國の至誠を以て、葦下の鎮護に任ずることであつて、處刑や拷問が目的でないことは、君も知つてをられる筈だと思ふ。その意味では、お座なりに特定の時期を假營する諸藩に較べて、終始一貫洛中警戒に備へる新選組の使命は、本願寺が屯營を提供して然るべき重任にある。」

「よろしい。局長の権限でお取決めになる以上は、反對も徒勞でせう。唯僕は隊の大義名分と、結果の矛盾に疑ひを抱いてをることを申上げておきたい。」

かつた。

山南は座を立つて庭へ降りると、胸の裡まで射し込むやうに明るく冴えた空を仰いだ。

「おゝよく晴れてをるな。……」

如何にも氣持よささうにさう呟いて、不快な空気が放たれたやうに、本營を出て行つた。

協議はかうして終つた。が、雑談にも移らず、そこに残つたものは、據りどころを失つたやうな

白けた沈黙だけであつた。

山南敬助は新徳寺の門前を通り過ぎて、眞直ぐに西の方へ歩いて行つた。小川沿ひの路は活々と

青い水菜畑へ延びて、若い野芹の根を洗ひながら、流れは冴えた音を立てゝゐた。

「山南。……山南。……」

振り返ると、藤堂平助が追つて來てゐた。

「どうしたんだ。」と山南が訊いた。

「本願寺移轉には、僕も反対したかつた。」

二人は並んで藪の間を抜けた。路は藪蔭に沿つて北方へ曲つてゐた。

「口を切る機會がなかつたんだ。僕も近頃の隊の遣方を疑つてゐる。」

「疑ひたくなるさ。みんな土方のために躍らされてゐるんだ。あいつは行商をしてゐた百姓だ。

蛇のやうに執拗な名譽心と、無教育な酷薄と、町人流の小才で固まつたやうな奴だ。局長は生一

本で、性格の強いなかなかいところのある人間だが、惜しむらくは知識と教養がない。そこへ土

方をつけ入つてゐるのだ。その下には、おべつか野郎の武田觀柳や、目明し根生の山崎。後は局

長の命に絶対服従の、武邊一途の馬鹿共ばかりだ。——しかし藤堂、今度入隊した伊東甲子太郎は、

話せる男だよ。局長も尊敬してゐるよだから、今後伊東が頑張つてくれれば、隊も多少はよく

ならうさ。伊東の新選組になるか、土方の新選組になるか、これまで通り土方の新選組では、伊東

が業を賣やさうし、伊東のものになれば、土方が納まるまい。とすると、分裂は避け難い運命だな。

とにかく君は止まつて、伊東に協力したまへ。いづれにしても、現在伊東以上に立派なやつは隊に

ゐない。」

「僕に止まつてといふと、君はどうするのだ。」

「おれは脱走する。申出ても脱退は許すまいから、脱走の外はない。このまゝ止まつてゐれば、お

れは第二の芹澤さ。坐して刃刃を待つより、去つて考へて見る。おれは外から、世の中をも少しよ

「山南、僕も行かう。」

「いや、君は止まつてゐろ。おれは危険が差迫つてゐるので、難を避けるだけだ。別段方針が決つて採る行為ぢやない。君が飛出すには、まだまだ時期があるだらう。もし止まつて、伊東の様子を見てゐたまへ。」

春の陽射しに温められた藪からは、強い朽葉の匂が流れて、頻りに鶯が鳴いてゐた。

二

翌朝、山南の姿はもはや屯所に見えなかつた。堂々と脱退届を残して行つたのであるから、すぐに脱走と知れた。

「局長、どうします。」

反目はしてゐても、試衛館以来近藤の片腕となつて働いた山南であつた。殊に試衛館での地位をいへば、山南は客員であり、毎日指南を受けた先輩であつた。さすがに土方も、直ちに脱走の罪科を隊規に照らすことは、近藤に對して憚られた。が、近藤の決断はむしろ壯烈なまでに斷乎たるものであつた。

「隊規違反だ。捕縛して切腹を命じたまへ。」

總長の重任にある者が隊規に背いた事實は、如何なる救ひの餘地をも残してはゐなかつたのだ。

「局長、捨て、おいてはどうです。」

さりげない顔をして、藤堂が山南救助の綱を投げて見た。

「放置することは、隊自ら隊規を破壊することになる。秩序は厳正に保たなければならぬ。」

近藤は山南の脱退届を掴んだまゝ、幾分蒼褪めた苦い顔をしてゐた。處断を氣兼ねた土方よりも、實行を命ずる近藤の方に苦しみが強いことを、藤堂ははつきり見て取つた。

山南がひと先づ江戸へ下るだらうといふ見通しは、誰の意見も同じだつた。が、誰も追ひたくはなかつた。山南が素直に歸るとは想像されない。山南を追ふことは、山南と双を合はすことに外ならなかつた。追ふ者も追はれる者も、互ひの刃に瘡れるばかりであらう。萬一無事に歸ることが出来たとすれば、それは昨日までの同志を斬つた結果に外ならない。誰がこんな役目を引受けよう。しかも、石像のやうに冷たい顔をして、ぬつと立上つたのは沖田總司であつた。

「僕が行かう。」

一同の視線が沖田に注がれた。

土方の酷薄は陰惨な人間臭に充ち満ちてゐる。が、沖田の冷酷には、たとへば無生物的な、むしろ氷のやうな明るさがあつた。非情の冷酷。——たとへ白刃の下にあるとも、何時吐血して癡れなければならぬかも知れぬ宿命の身に、何の有情が著へられよう。利那の情熱は利那に退き、利那の友情は利那に終る。一瞬後の豫測をゆるさない彼の生命は、生きてゐる瞬間のみの生命だつた。——人生の冷笑に對して冷笑を酬ひながら、生きてあるがまゝに生きてゐる沖田。しかも山南の劍に立向つて、先づ敗れまいと、誰にも一應の安心が持てるのは、沖田の劍を指いて他にないとするれば、山南追跡にこれ程適當な人物が他にあらうか。

長身瘦軀を近藤の肥馬に托して、沖田はたとへば形を顯はした生靈のやうに、黙々として出て行つた。

翌日、局中の豫期に反して、山南敬助は沖田と共に悠然と壬生へ歸つて來た。夜中大津の宿で、軒並に旅籠を調べて歩いて、山南の宿所を尋ね當てた沖田は、いきなり頼まれた品物でも投出すやうに、山南の頭から浴びせかけた。

「隊規違反で切腹の命だ。どうする。」

それは無邪氣なまでに坦々たる調子であつた。さういふ沖田に、山南は罪のない子供を見るやうな愛情さへ感じた。

「見届けて歸るのか。」

「いや捕縛して連れて歸るのだ。」

山南は微笑した。

「よし、歸らう。」

「歸るか。」

「歸る。繩を打つ必要もあるまい。話しながら歸らう。」

沖田は馬で、山南は徒歩で、恰も遊山歸りのやうに風光を愛でたり、暢氣に談笑したりしながら歸つて來たのであつた。

一日を挿んで、總長は罪人の名に替つてゐた。新徳寺の庭の蘆の上に山南は坐つてゐた。手桶も柄杓も既に用意されてあつた。春の黄昏が迫つた中に、隊士達は大きな圓周を描いて、伏眠で昨日までの命令者の姿を眺めた。

近藤は幹部一同を引連れて、焦立つたやうな大股で這入つて來ると、いきなり山南の前に立つた。

「よく戻つたな。」

山南は黙つて笑つた。

「脱走の罪により、隊規によつて切腹を命ずる。承知だらうな。」とまた近藤はいつた。

「承知しました。沖田君、御苦勞だが介錯は君にお願ひしたい。」

沖田は黙つて、たとへば活花のやうに、靜物的な靜さを以て近寄つた。

「なぜわざわざ、腹を切りに歸つて來たのだ。」

土方が毒つくとも、慰めるともつかぬ調子でいつた。

さういふ土方に、山南は冷たい笑ひを向けた。

「君が來ればよかつたんだ。さうしたら歸りもしなければ、歸しもしなかつたさ。しかし君以外の者とは、刃を合はす氣がしなかつたのだ。」

「ふん、曳かれ者の小唄か。」

土方は口を歪めて、山南を睨んだ。

「山南、いひたいことがあれば、聞いておかう。」と近藤が云つた。

「今更遺言でもありませんまい。しかし局長への忠告なら、申上げておきませう。」

「忠告結構だ、拜聴しよう。」

「僕はあなたを惜しむあまり、餘計な口を聞くのですが、あなたは會津侯の命に従ふことが、そのまゝ王事に盡瘁することだと信じてをられる。朝廷に仕へると信じて、勤王愛國の士を斬つてをられる。しかし、この矛盾は偏にあなたの無教養に由來してをるのであつて、あなた自身の罪ではない。あなた自身は、生一本に至誠の臣だと信じてをられる。よき教導さへあれば、あなたは立派に、勤王至誠の臣になれる人だ。が、惜しむらくは無耻無學で、小才が利いて、名譽心だけが人一倍強いといふ、一番始末の悪い人間に頼つてをられる。それは土方ですが、土方には、あなた程の良心の持合せもない。たゞ名譽心と才氣があるばかりだ。が、あなたは自己の無教養を、土方の才氣で補つてをられるために、あなたの國士としての素質は、土方の名譽心の犠牲にされてしまつてをる。従つて、あなたの統治してをられる新選組は、事實は土方の意志に支配されてをるのです。この土方の新選組は、今日まで何をやつて來たか、幕府の手先になり、多くの人材を斬り、幕府の報酬を受けるところによつて、知らず識らずの裡に地位を固めて來た。佐幕派を以て任じ、はつきり幕府の御用を勤めてをるつもりならそれでよい。しかし、あなたはそれを以て、國に對する至誠奉公だと信じてをられる。無慾で生一本な近藤勇は、猿廻しに躍らされる猿のやうに、やがてその躍りに疲

れて、自ら身を亡すだらうといふことが、僕には眼に見える。僕はあなたが氣の毒でならないのです。」

近藤は憎悪とも苦惱ともつかない、凄烈な眼で山南を睨みながら遮った。

「山南、君は自分の言が正しいと信するなら、なぜ土方を斥けて、僕に誠意ある獻言をしなかつた。」
 「殘念ながら、僕もあなたと同様、たゞ風雲に乗じて榮達を圖らうとした、無學無教養の徒でした。盲目の京上りをやつた後は、ひたすらあなたと同じ過りの中で、今日の新選組のために力を致してをりました。新選組の任務に疑ひを持たつた時は、既に遅かつた。最早新選組は、抜きも差しもならない幕府の一機關です。新選組自體さうであるし、勤王派もさう信じてをります。今更新選組が、勤王倒幕を標榜したところで、自他共に許しはしないし、さうするには、新選組を解體する外はありません。解體するにしたところで、昨日まで勤王志士を斬つて廻つた、勤王派の敵は何處へ行くことが出来ませう。唯一つ、僕と同様一同割腹して、不明を我れわれの兇刃に墮れた、勤王志士の靈に謝すことだ。僕にはこんな獻言の徒爾であることは、解り切つてをる。僕はこのこ戻つて来て、こゝで腹を知るが、生き残つて、今後矛盾に苦しんで行くあなた方よりは、遙かに幸福だ。考へて見れば、脱走して見ようとしたことも、僕には徒勞だつた。——局長、僕は慥かにあなた

を好きなんですな。こゝに坐つた時、丁度二年前の今頃、初めて京に這入つたのだと思ふと、いろいろなことが思出されましたよ。僕はあなたに、最後の友情を遺します。それは、新選組を解體して深く切腹するか、それが出来なければ、斷乎として勤王に敵對し、佐幕主義を奉ずるか、いづれか一途をお選びなさい。たゞ土方の奸媚に迷ひ、矛盾の深淵に擦り落ちて行かれるのを、そのまま看過しては死ねないのです。」

「寢言をいふな。」と土方が火を吐くやうに嗷鳴つた。「沖田、早く斬れッ。」

「慌てるな。斷首を受けるのではない、切腹するのだ。」と山南は冷やかにいつて、更に近藤を見上げた。

「近藤さん。我れわれは二ヶ年の間に、多くの人材が墮れるのを見て來ました。大和一擧の松本、藤本、吉村。肥後の宮部、長州の吉田、土佐の北添。去年の戦で死んだ眞木、久坂。六角の牢で死んだ平野、西川。いづれも識見高く、經綸の才を持つた第一級の人物ばかりです。新選組は一度はそれ等の人物を狙ひ、現に幾人かは手に掛けて來ました。しかも新選組には、局長以下誰一人、彼等の人物に比肩し得る者がありません。彼等はいづれも、暴發のために墮れました。しかし、その心事に至つては、おそらく我れわれが、單純に考へた暴發ではなかつたに相違ない。もし暴發の

中の一つが成功してゐたなら、その結果はどうでせう。彼等経綸の才を有する勤王家は、暴發が成功した場合の、施政方針に自信を以て事を策してをる。彼等が單に不逞過激の暴徒であるか、眞に盡忠報國の士であるかは、暴發成功の結果に俟つて見なければ解らない。盡忠報國の至誠を致す筈の新選組としては、彼等を扶けることが、義務であつた場合がなかつたとはいへない。しかも、新選組は徒らに彼等の敵となつた。彼等の總てを不逞過激の徒として扱つた。これは新選組が、彼等の抱懐する識見が如何なるものであるかを、計ることが出来なかつた結果だ。理解の力なくして、武力だけを揮ふ、これが暴力に非ずして何であらう。すべて劣悪な者が、優良な者を征服するのは、暴力によるのです。——新選組は暴力の化身だ。局長は自分の眼を開いて、新選組の任務といふものを、見直されるべきだと思ふ。」

「山南 日が暮れるぞ。下手な長談議はそれくらゐにしないか。」
土方は、すでに憤怒の消えた冷笑を浮べてゐた。山南は笑ひ出した。

「はゝゝ、よろしい。これくらゐにしよう。局長、僕は、大坂出張、中手に入れた、久坂義助の作になる今様の名文を、こゝに所持してをりますから、これを遺品に残しませう。一昨年八月十八日の政變の折、七卿の先導をした久坂が、供奉の面々と共に、雨の中を泣きながら唄つて行つたと聞

いてをります。あの大變に際して、これ程の名文に閤々の情を遣つた、床しい教養と高い心懐が、果して不逞過激の徒に過ぎなかつたかどうか、よく味つて御覽下さい。」

山南は懐中から、數枚を二つ折にした半紙を出して傍らに置くと、徐ろに肌を寛けながら靜かに沖田を顧みた。

「待たせたな、では頼むよ。」

風のない、津々と冷却して來る如月の夕の影は、蒼茫と寺内の土におりてゐた。山南ははじめて藤堂の顔に視線を向けた。

「山南、よくいつた……」と、藤堂の潤んだ視線がそれに答へた。山南は微かな笑ひを浮べて、すぶりと脇差を腹に刺した。

無表情な、機械のやうな沖田の劍風が、颯と夕闇に一閃を残すと見れば、山南敬助の首はどすと土を打つた。

世はかりこもと亂れつゝ、茜さす日のいとくらく、瀬見の小川に霧立ちて、へだての雲となりにけり、うらいたましましやたまきはる内裏にあけくれとのるせし、實美朝臣、季知卿、壬生、澤、四條、東久世、そのほか錦の小路どの、いまうき草の定めなき、旅にしあれば駒さへも、進みかねてはいばえつゝ、降りしく雨の絶間なく、涙に袖のぬれはてゝ、これより海山浅茅が原、露箱わきてあしかちる、難波の浦にたく鹽の、辛き浮世はものかはと、ゆかむとすれば東山、略の秋風身にしみて、朝な夕なに聞馴れし、妙法院の鐘の音も、なんと今宵は哀れなる、いつしか暗き雲霧を、拂ひ盡くして百敷の、都の月をしめで給ふらん。

雨と涙に濡れて、一同唱和しながら西に落ちたのか。……官部鼎藏も供奉してをつた、去年の戦の時、六角の牢で断首された三條公の大夫丹羽出雲守も、三條西公の大夫河村能登守も、その時は一行の中に混つてをつたのだ。……みんな死んだ、久坂もをらぬ。……窓の外は冷たい如月の雨であつた。芹澤暗殺の折と同様、一夜の通夜の後、山南敬助の遺骸を地藏寺に葬つた日の宵、近藤は皮肉な山南の形見を机上に展けて、繰返し暗誦してゐた。軒の雨垂れの音からはじまつて、雨音は遠く近く四境一圓を罩めて聞えた。久坂の熱い心懐が、惻々と心に波を傳へて来る。雨に濡れ、ぬかるみを踏んで、今様の名文を唱

和しながら歩いてゐる現實が、いつか近藤には、自分の経験のやうに感じられてゐた。

間もなく頭巾で面を覆つた近藤は、雨合羽を着けながら縁側へ出ると、母屋の方に向つて僕兼馬丁の久吉を大聲で呼んで、駕籠を呼べと命じた。聲を聞きつけて隣室の土方が出て来た。

「どちらへかお出かけですか。」

「ちよつと行つて来る。」

土方は近藤の支度を見て察しよく笑つた。顔を覆つて、秘かに一人で外出する時は、駒野の家へ行くに決つてゐたからであつた。

居間へ戻つた土方は、郷里への手紙の續きを書きはじめた。総長であつた山南の處刑に就いて、どんな風に書いたものかと、ふと筆をやすめて雨の音に聞き入つた。……山南め、いやなことを並べやがつて、……局長もむしやくしやるから、三本木へ行つたのだらう。しかし局長はまだいゝ。おれのことを奸媚だ、小才が利く、無學無恥で名譽心が強いと、如何にも土百姓だといはぬばかりに、あてこすりやがつた。百姓であることが何だ。おれは百姓の子で、行商もやれば商家に奉公もした。それが何が卑しい。劍の苦勞しか知らぬ武士の苦勞とは、苦勞が違ふんだ。おれが世間を知つてゐればこそ、局長をはじめ、新選組にほろを出させず、隊をして今日あらしめたの

ではないか。町人、百姓、郷士、身分の低い者が國士を以て任じ、憂國の業に携るのは今日の常識だ。何を偉さうに士面をする。今に見てをれ、百姓の子の名譽心がどれだけの仕事をし、どれだけの地位をかちうるか。——土方はむかくしながらか考へた。

町人、百姓、輕格の者が、憂國の至情を呼號するには、身分素性を顧みない程、時勢の切實な必然に迫られての結果だとは、土方の考へ得ないところであつた。が、土方は必死だつた。近藤の介添役となり、新選組を盛り立てることによつて、百姓の子が嘗て夢にも見得なかつた地位を、獲得する努力のためには、女にさへも近づかぬ程の眞剣さであつた。彼は江戸の商家に奉公中、下女との間に情事を起して失敗し、女に弱い自己の缺點を、身に沁みて知つてゐる。禪僧の如く堅く身を持して、性理の鬱を忍んでゐるのも、唯々功名の蹟きをおそれるがためであつた。それ程必死な、全生活を賭した功名への足掻きに、山南の言葉は、蹴返してもやりたいいくらるに憎かつた。彼は憎悪に燃えて、山南の愚物たることを書きはじめた。

その頃、近藤の駕籠は雨の中を三本木へ急いでゐた。が、駕籠は三本木へ這入つても、いつもの如く駒野の家のある路次へは曲らずに、更に小柳の前をも通りぬけた。そして初めての、とある一軒の料亭の前に着けられた。

客と知つて、門まで出て來た仲居の傘に迎へ入れられて、近藤は馴染のない客として奥座敷へ通された。黒八丈の着物に黒羽二重の紋附羽織、縞目の細かい仙臺平の袴といふ服装は、餘程大身の拵であつた。見知らぬ客とはいへ、極めて鄭重な扱ひだつた。

近藤は君尾を呼んでくれといつた。

「あの、失禮におすけど、君尾はんとお馴染みどすやろか。」

「知らぬ、はじめだ。」

「さうでしたら、えらい勝手におすけど、誰ぞ他の藝妓はんで、御辛抱ねがへまへんどすやろか。」

仲居は困つたやうに揉み手をした。

「君尾は當家へは這入らんのか。」

「そやおへんのどすけど、お客が誰方や判りまへんと、君尾はんは、呼びに行つても來てくれはりまへんので……」

「わしは新選組の近藤だ。」

仲居は眼を腫つて、駭きを喉元に堰止めた。それから恐怖をこまかすやうに、固い愛想笑ひを浮べた。

「あの、駒野はんの旦那はんどしたか。……えらい失禮申しまして。……」
近藤は苦笑した。

「君尾へ使ひを出してくれ。近藤が折入つて、面談したいことがあるといつてな。」
「よろしおす、すぐにそない申します。」

引受けたもの、仲居の内心の困惑は眼に見えるようだった。それでなくとも佐幕派姫ひの君尾が、近藤の名を聞いて素直に出て来るとは夢にも思へなかつた。仲居ばかりではない、帳場でも主人夫婦が額を寄せて、君尾が来なければ、近藤が刀を抜いて暴れるものと決めてかゝつて、その時の對策を協議した。

その間に仲居は、おつかなびつくりで酒肴を運んで行つた。帳場ではいざといへば小柳へ頼み込み、駒野に来て貰ふ他はないだらうといふことに相談を決めて、「ほんまに災難やな」とこぼし合つた。

使ひにはいつものおちよぼを遣らず、古参の仲居を撰んだ。が、意外にも、君尾は近藤の座敷へ出るといふ返事だつた。

この案するより産むがやすい結果に、帳場は吻と愁眉を開いたが、さて意地ッ張りの勤王黨者と、

佐幕派の亂暴者との對面であつて見れば、一難去つて更に一難の思ひは、帳場の頭痛を拭つてはくれなかつた。

仲居は自分で意外がりながらも、君尾の返事を近藤に傳へた。近藤は仲居と帳場の骨折に對して祝儀を興へたが、紙包の重い小判の手應へにびつくりした仲居は、一層氣味惡さを覺えながら、禮を述べて引き退つた。

間もなく、松の模様の袴を曳きながら遣入つてきた妓が、型の通りに挨拶した。

「降るのに、よく来てくれたな。」

險はあるが美しいと思ひながら、駒野の京風なとは反對に、而長で眉の秀でた顔を見ながら歪をさした。

「ひとついかう。」

「おほきに……」

艶に笑つただけで、君尾は膝においた手をあけなかつた。

「あて、頂けまへん。」

「飲けんのか。」

「堪忍どつせ。意地どすさかい。」

卒直にいふ言葉に、この座敷へ出て来るまでの覺悟が親へた。なる程、さうかといふ風に近藤は頷いた。

「判つた、お前の意地を破りませんよ。では盃洗の盃を取れ、わしが酌をしてやる。」
君尾は今度は素直に従つて酌をうけた。

「だが君尾、盃も受けられぬ男の座敷へ、どうして来る氣になつたのだ。」

「近藤はんとお名告りやして、折入つてのお話ちうのに、逃けては卑怯やおへんか。」

「成程、お前らしいな。」と、近藤は君尾の氣懐に微笑を誘はれた。「如何にも折入つて尋ねたいことがある。素直に答へてくれるか。」

「事柄によりましては。——」

「難かしいことではない。お前は長州の久坂を知つてをつたな。」

「へえ。」

「いつ頃からの馴染だ。」

「それお訊きやして、何におしやすのどす。」

君尾は油断のない色をみせた。

「君尾、今夜の近藤を疑ふな。討死以前ならともかく、今になつて、隊は久坂の動勢を調べる必要はないのだ。今夜は一個の近藤勇が、久坂のことを知りたがつてゐるだけだ。隠し立てをせず答へてくれ。久坂は偉い男であつたさうだな。」

不思議さうに近藤の顔を見つめてゐた君尾の眼が、次第に潤んで来て、見る／＼揺れる雫になつた。

「お偉いお人どした。……」

睫毛をはなれて、涙はぼつりと膝に浸みした。

「あんな御立派なお方が、まだお若い身空やのに、なんであんなほいほいすることに、おなりやしたんどすやる。……ほんまに、神も佛もあらしまへん。……」

君尾は袖口で眼をおさへた。

「お前が久坂の世話になつたのは、いつ頃からだ。」

「お世話どすて。いんえ、あては長年御最良になりましたけど、お世話になつたことはあらしまへん。あてはつかりやおへん。久坂はんに御最良になつた者は、みんな久坂はんをお慕ひしましたけ